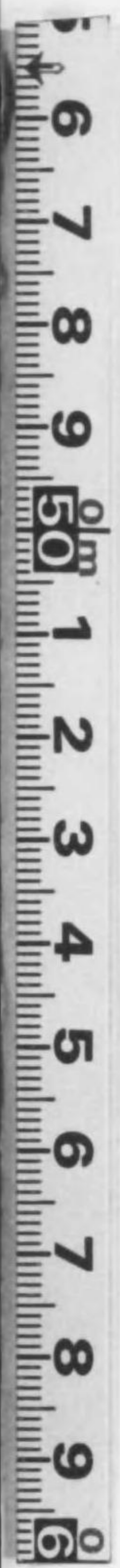


續國譯漢文大成

文學部 五十二

309
65

鉄
入



始



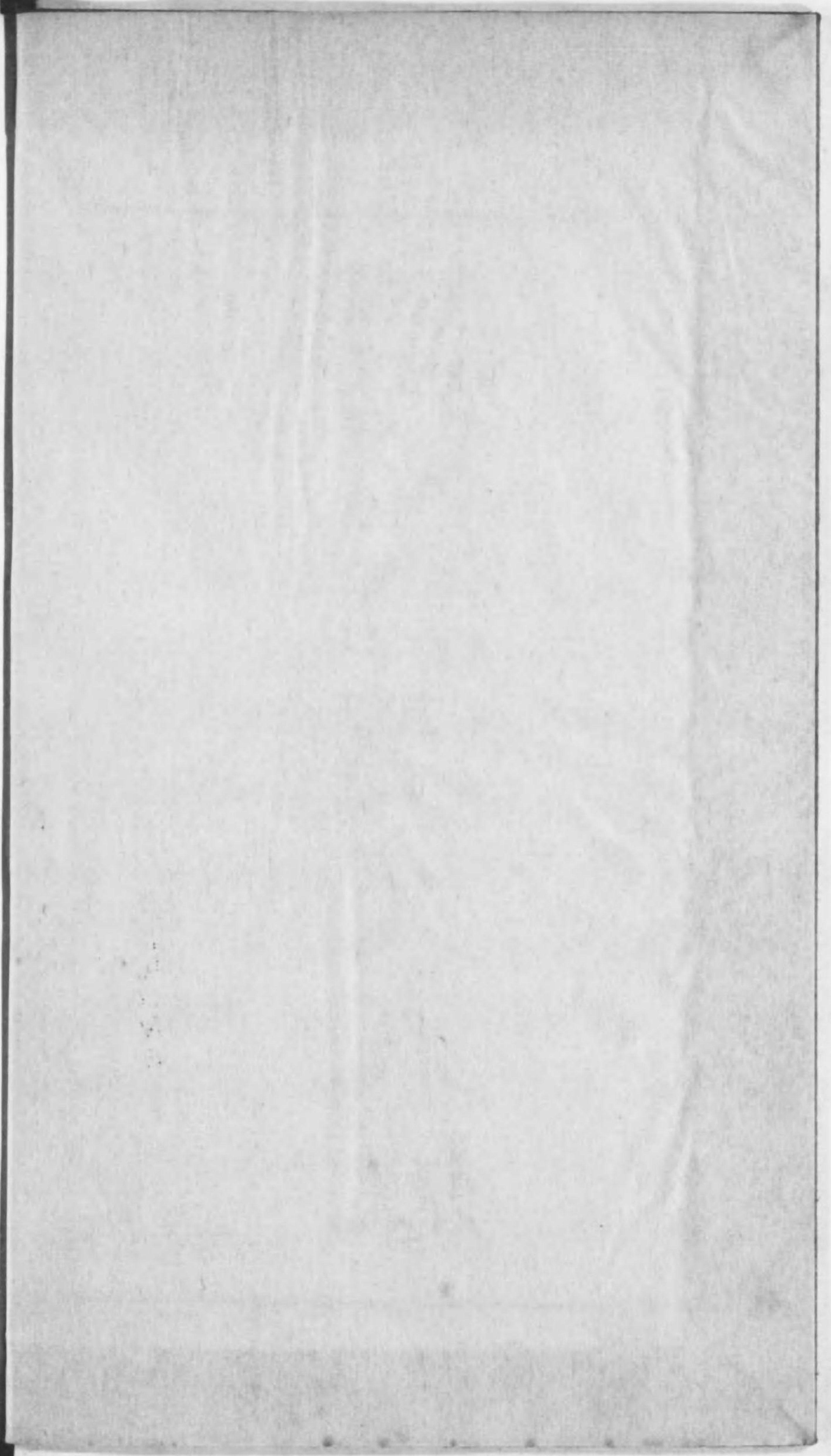
續國譯漢文大成



吉田待郎氏 二冊本

文學部第五十二冊(第十三帙の四)

蘇東坡詩集 一の四



蘇東坡詩集 卷八

古今體詩 六十九首

焦千之求惠山泉詩

茲山定空中。乳水滿其腹。
遇隙則發見。臭味實一族。
淺深各有值。方圓隨所蓄。
或爲雲洶湧。或作線斷續。
或鳴空洞中。雜佩間琴筑。
或流蒼石縫。宛轉龍鸞蹙。
餅罌走千里。眞僞半相瀆。
貴人高宴罷。醉眼亂紅綠。
赤泥開方印。紫餅截圓玉。

焦千之、惠山泉を求むる詩

茲山定空中を空にし、乳水其の腹に満たん。
隙に遇へば則ち發見す、臭味實に一族。
淺深各、値ふことあり、方圓蓄ふ所に隨ふ。
或は雲の洶湧を爲し、或は線の斷續を作す。
或は空洞の中に鳴り、雜佩琴筑を間ふ。
或は蒼石の縫に流れ、宛轉して龍鸞蹙る。
餅罌にして千里に走り、眞僞半は相瀆す。
貴人高宴罷んで、醉眼紅綠を亂る。
赤泥方印を開き、紫餅圓玉を截る。

古今體詩 焦千之求惠山泉詩

五四三

傾甌共歎賞。竊語笑僮僕。
豈如泉上僧。盥灑自挹掬。
故人憐我病。蕝籠寄新馥。
欠伸北窗下。晝睡美方熟。
精品厭凡泉。願子致一斛。

甌を傾けて共に歎賞し、竊語して僮僕笑ふ。
豈如かんや泉上の僧、盥灑して自ら挹掬するに。
故人我病を憐んで、蕝籠新馥を寄す。
欠伸す北窗の下、晝睡美にして方に熟す。
精品凡泉を厭ふ、願くは子一斛を致せ。

【字解】【一】 焦千之 字は伯強、穎州焦陵の人。文學を以て知を東坡に受く。【二】 惠山泉 陸鴻漸の煎茶小品に、常州、無錫縣、惠山寺泉第二、太平寰宇記に、惠山寺在無錫縣南七里。【三】 其腹 蜀志、秦宓傳に、蜀有汶阜之山、江出其腹。【四】 吳味實一族 左傳、襄公二十二年に、魯諸草木、吾臭味也、而何敢差池。【五】 蕝籠 詩、鄉風女曰蕝籠、知子之來之、蕝籠以贈之。【六】 琴苑 白樂天の盧山草堂記に、東南有瀑布、為階閣、落石渠、夜中如環佩聲。【七】 宛轉 やはらかに動く。文選、魯靈光殿賦に、蟠宛轉而承桴。【八】 餅餅 韓退之の詩に、瓶大餅餅小。【九】 赤泥 水經註に、岐水又東逕姜氏城南、為姜水、姜水發杜陽縣大嶺側、世謂之赤泥、觀治波歷而潤、俗名大嶺水也。東坡の毛正仲惠茶詩に、空煩赤泥印、遠致紫玉珎。【一〇】 方印 盧全が謝孟諫寄新茶詩に、口曾陳藏送書信、白餅餅封三道印。風冲之が謝人寄茶詩に、斜封三道印、不奉一行書。【一一】 圓玉 庾信が昭夏歌に、圓玉已美。【一二】 竊語 私語といふに同じ。晉康の家談に、若見竊語私談、便合起。【一三】 蕝籠 がまで作つた籠、茶錄に、茶宜蕝籠、收藏之家、以蕝籠封裏入焙中。【一四】 欠伸 曲禮に、侍坐君子、君子欠伸、捫杖履。

【題義】 此詩は神宗の熙寧五年（皇紀一七三二年、西曆一〇七二年）八月の作である。獨孤及の惠山寺新泉記に、寺居西山之麓、山小多泉、山下有靈池、其泉伏湧潛洩、無汙無穢、始發表丈之沼、

疏爲懸流、及於禪林、周於僧房、灌注於德池、灑澗於法堂とある。

【詩意】 この山は、中が空であつて、乳水が其の腹に満ちて居るに違ひない。それで間隙に遇ふと、其處から發し見はれる。之を譬へると、臭も味も同じの一族で、値ふ所によつて淺深となり、蓄へる所に隨ひて方圓ともなる。（紀昀いふ、意新語粉、得此一起、併下四或字、習調亦覺生趣、盎然不爲耳目之厭と。）或は雲のやうに湧き立つ。或は線の斷續するが如くなる。或は空洞の中で鳴り、雜佩に琴筑を聞へる。（雜佩とは、身に帯びる種種の玉である。）或は蒼石の縫目に流れ、徐に動いて龍や鸞の蹙るやうである。（酉陽雜俎といふ書に、允街縣有泉、泉眼中、水交旋如盤龍、驢馬飲之皆驚走と見えて居る。）水を大小の瓶に入れて運ぶと、千里に走る。さうなると、水に賈物が出て來て、眞偽半は相漬することになる。貴人の高宴が罷んで、醉眼が朦朧として紅綠を亂るとき、遠くから寄せられた新茶を喫する。赤泥開方印とは、新茶の封を開くことで、劉禹錫が試茶の詩句を用ひたのである。（劉禹錫の試茶歌に、白泥赤印走風塵とある。）紫餅截圓玉は磚茶を削ることである。茶の色は、白いのを貴ぶが、餅茶は、多く珍膏を以て其面に油するから、青・黃・紫・黒の異同がある。甌を傾けて茶を啜り、共に歎賞する。水が賈物であることを知らずに歎賞して居るので、僮僕たちは竊にささやいて笑つてゐる。泉上の僧が手を洗ひ嗽いで、自ら水を抱みて茶を煮るには及ばない。故人（焦千之を指す）は私の病を憐んで、好い新茶を蕝籠に入れて寄せられた。まことに辱じけない。志が倦めば欠し、體が倦めば伸する。北窓の下で欠伸し、晝寢の後の心持が宜いとき、茶を喫する。茶の精

品は凡泉を厭ふ。どうか君、惠山泉一斛を送り致せ。

答任師中次韻

任師中に答へて次韻す

閑裏有深趣。常憂兒輩知。

閑裏深趣あり、常に憂ふ兒輩の知るを。

已成歸蜀計。誰借買山貲。

已に蜀に歸るの計を成す、誰か山を買ふの貲を借らん。

世事久已謝。故人猶見思。

世事久しく已に謝す、故人猶ほ思はる。

平生不飲酒。對子敢論詩。

平生酒を飲まず、子に對して敢て詩を論ず。

【字解】(一) 任師中 任偃字は師中、眉山人。兄孜、字は適聖と共に時に知られ、大任・小任と稱さる。東坡の詩に、大任剛烈世無有、疾惡如風朱伯厚、小任溫毅老更文、真柔惠愛小馮君。(二) 買山貲 世説に、支道林(晉の高僧、支遁字は道林) 因入就深公買印山、深公答曰、未聞果由買山而隱、郭超每聞欲高尙隱退者、輒爲辦百萬貲。(三) 世事久已謝 張衡の歸田賦に、與世事乎長辭。

【題義】 此詩は、前詩と同じく熙寧五年八月の作で、任師中が東坡に詩を寄せ、勸むるに詩酒自娛を以てしたので、次韻して之に答へたのである。東坡の自註に、來詩勸以詩酒自娛とある。

【詩意】 世を離れて閑居の裏に深趣がある。併し、常に小兒輩に知られることを心配する。我は已に故山の蜀に歸るの計を成したから、(東坡は蜀、眉山の人) 山を買つて居を卜する資金を借る必要もない。(仕官して俸錢を求めない意。昔、王秀之は晉平の太守となつたが、暮年にして還るを求めてい

ふ、吾山貲已足、豈可久留以妨賢路乎と。時人は王晉平、恐富求歸と言つた。余は久しく世事に遠ざかつたが、故人(任師中を指す)は猶ほ思つてくれるのは辱しめない。詩酒自ら娛むやうにどのお言葉であるが、余は酒を飲まないし、又、君に對して敢て詩を論じようぞ。

沈諫議召遊湖不赴明日得雙蓮於北山下作

一絕持獻沈既見和又別作一首因用其韻

沈諫議召して湖に遊ばんとす、赴かず、明日、雙蓮を北山下の下に得、一絶を作りて持して獻す、沈既に和せらる、又、別に一首を作り、因りて其の韻を用ふ

湖上棠陰手自栽

湖上の棠陰手自ら栽う、

問君更得幾回來

君に問ふ更に幾回か來ることを得る。

水仙亦恐公歸去

水仙も亦、公の歸り去るを恐れ、

故遣雙蓮一夜開

故に雙蓮をして一夜に開かしむ。

棠陰 居官の地をいふ。劉長卿の詩に、幸容棲託分、猶戀舊棠陰。昔、召伯、南國を循行し、甘棠の下に舍る。後人、其の樹を愛して廟伐に忍びず。棠陰の義は此に本く。詩の召南に、蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所憩。甘棠は杜欒。(二) 水仙 湖上に水仙王廟がある、圓蓋を按ずるに、廟は錢塘門外二里に在る。

古今體詩 答任師中次韻 沈諫議召遊湖不赴明日作一絶又別作一首

【題義】此詩も、前詩と同じ時の作で、沈立が湖上に遊ぼうとしたのに、赴かなかつたから、明日、雙蓮に詩を添へて獻じたのである。紀昀いふ、既涉世故、那能不作應酬詩、但存之集中、則轉爲盛名之累、此非作詩者之過、而編詩者之過也。

【詩意】湖上居官の地に沈立之は植木をしたが、昔の甘棠の詩が思ひ浮ばれて、勿剪勿伐の感じがする。君に問ふ、更に幾回來ることが出来るかと。(沈立之は、久しからずして、當に替るべし。)湖上の水仙王廟神も亦、君が歸り去るのを恐れると見えて、故に雙蓮をして一夜に開かしめる。

詔書行捧縷金箋

詔書行くゆく捧げん縷金箋、

樂府應歌相府蓮

樂府に應に相府蓮を歌ふべし。

莫忘今年花發處

忘るる莫れ今年花發く處

西湖西畔北山前

西湖の西畔北山の前

其の後、朝服用ふる所の樂章は、皆、樂府といふ。【三】相府蓮 宋の陳景沂が全芳備祖に、於韻因三瑞蓮、製曲名相府蓮。國史補に、予司空以樂府有想夫憐、其名不雅、將改之、客有笑者、曰、南朝相府曾有瑞蓮、故歌相府蓮、自是後人誤認相承不改耳。

【詩意】君はだんだん榮進して、行くゆくは、縷金箋の詔書を捧げるであらう。そして、朝廟樂府では應に相府蓮を歌ふことであらう。(昔、王儉が南齊の相となつたとき、薦めた所は、皆名士であつた

から、世間では、紅蓮映秋水といつた。今も蓮幕といふは、王儉より始まつたのである。)さて、今年花開く處を忘れてはならない。それは、西湖の西畔、北山の前である。(杭州圖經にいふ、北高峰在靈隱寺後。又いふ、北山之形、如獅子、名獅子峰。と。)

和歐陽少師會老堂次韻

歐陽少師が會老堂に和し、韻に次す

一時冠蓋盡嚴終

一時の冠蓋は盡く嚴終、

舊德年來豈易逢

舊德年來豈逢ひ易からんや。

聞道堂中延蓋叟

聞道らく堂中に蓋叟を延くと、

定應牀下拜梁松

定ず應に牀下に梁松を拜すべし。

蠶魚自曬閒箱篋

蠶魚自ら曬す閒箱篋、

科斗長收古鼎鐘

科斗長へに收む古鼎鐘。

我欲棄官重問道

我官を棄てて重て道を問はんと欲す、

寸筵何以得春容

寸筵何を以て春容を得ん。

【字解】【一】會老堂 熙寧五年に、道康靖が南京から頤州に來つて、歐陽公を訪問した。時に呂正獻は頤州の太守であつて、二公を招宴した。歐陽公の口號に、金馬玉堂三學士、清風明月兩閒人。【二】冠蓋 戰國策に、冠蓋相望。【三】嚴終 嚴助と終軍をいふ。二子は皆少年にして貴くなる。【四】蠶魚 漢書に、曹參爲齊相、避正堂、舍蠶魚をいふ。自曬は、世説に、郝隆以

學記に、侍其從容、然後盡其靡。其の確にいふ、毎一春一而爲二春、然後盡其靡也。

【題義】此詩も、熙寧五年八月の作、歐陽修は趙概（字は叔平、卒して康靖と諡す）と同じく政府に在つて、交情睦ましかつた。趙概が睢陽に歸老すると、歐陽修も相繼いで汝陰に歸つた。一日、康靖は單車で來訪し、月を逾えて反つた。歐陽修は因て其の地に榜して會老堂といふ。當時、相與に唱和し、東坡も其の韻に次したのである。歐陽修の會老堂の詩は、古來交道愧難終、此會今時豈易逢、出處三朝俱白首、湖零萬木見青松、公能不遠來千里、我病猶堪鬪一鍾、已勝山陰空典盡、且留歸駕爲從容といふのである。

【詩意】今や天下に分佈して居る朝廷の使者は、皆新進の少年で、漢の武帝の時に信任された殿助や終軍などいふ人達である。（此詩の一時冠蓋の句は、此意に用いたもので、其の本意は此句を以て趙概を翻起したのである。）有徳の老人は、年來、容易に逢ふことが出来ない。聞けば、會老堂中に蓋叟を延くと。（蓋叟は、趙概を謂ふ。）定めし林下に梁松を拜することであらう（梁松は、後進を謂ひ、呂正獻を指す。正獻は呂公著の諡である。）これは、後漢の馬援の故事に據つたのである。馬援が病氣であつた時、梁松が見舞に行いて林下に拜した。林下に拜すると、必ず起つて答禮をするのが禮であるのに、援は答禮しないでいふ、我は乃ち松が父の友である。松は貴くても、何ぞ其の序を失ふことが出来やうぞと言つたさうである。歐陽公は、此堂に在つて、日に古書を繕く。故に蠶魚自曬開箱篋と言つたのである。又、古文書を好み、古鼎鐘を澤山に收藏されて居る。（此聯は、堂の字に著落す。故に

下に重閣の道の句を以て之に緊接する。）我は官途を棄てて重ねて學の道を問はんとするも、力足らず、才乏しく、寸筵では何を以て春容を得やうぞ。（春は戈春の意、撞くことである。）

題永叔會老堂

永叔が會老堂に題す

三朝出處共雍容

三朝出處共に雍容、

歲晚交情見二公

歲晚交情二公を見る。

乘輿不辭千里遠

輿に乗じて千里の遠きを辭せず、

放懷還喜一樽同

懷を放つて還一樽の同じきを喜ぶ。

嘉謀定國垂青史

嘉謀國を定めて青史に垂れ、

盛事傳家有素風

盛事に傳へて素風あり。

自願塵纓猶未濯

自ら願るに塵纓猶は未だ濯はず、

九霄終日羨冥鴻

九霄終日冥鴻を羨む。

【字解】【一】永叔、歐陽修の字、吉州廬陵の人。文名天下に冠たり。熙寧五年卒す、年六十六。太子太師を贈り、文忠と諡す。【二】三朝、仁宗・英宗・神宗の三朝をいふ。【三】雍容、やほらいた容、史記に、南陽行賈、畫法、孔氏之雍容。虞書、司馬相如傳に、從車騎、雍容閑雅。【四】嘉謀、國を治むるよい謀、書經、君陳篇に、爾有嘉謀嘉猷、則入告、爾后予内之。【五】青史、古は竹の青皮を火にあぶつて、書を除き事を記したものであり。【六】九霄、九天に同じ、青史に、我今垂、爾附、冥鴻。



【題義】歐公の會老堂は、趙康靖の來訪に因つて命名したことを前詩に述べたが、此詩は二公の交情を言ひて歐公を美めたのである。

【詩意】歐公は三朝に事へて誠忠を致し、其の出處進退が雍容として迫らない。殊に晩年に於ける歐公と趙康靖との交はまことは美しいのである。康靖は年八十、輿に乗じて千里を遠しとしないで、汝陰に歐公を訪問した。そして、酒樽を同うして、平生の懐を放つた。さて兩公の國家を治める善い謀は、青史に赫いて居り、其の經國の文章も家に傳へ、世に行はれて居る。素風があつて偶然でない。我は自ら顧るに尙ほ官遊して塵纓（纓は冠のひも）を濯ふことが出来ない。空しく青空を仰いで冥冥に遊んで居る鴻雁を羨んで居るのみである。（張九齡の詩に、今我遊冥冥、弋者何所慕とある。）

和歐陽少師寄趙少師次韻

歐陽少師、趙少師に寄するに和する次韻

朱門有遺啄。

朱門遺啄あり、

千里來燕雀。

千里燕雀を來す。

公家冷如冰。

公が家冷なること氷の如く、

百呼無一諾。

百呼すれども一諾なし。

平生親友半遷逝。

平生の親友半は遷逝、

【字解】【一】趙少師 前詩の趙

概である。字は叔平、廬天、虞城の人。神宗の朝に、太子少師を以て致仕し、維揚に居る十五年にして卒し、康靖と諡す。【二】朱門 杜子美の詩に、朱門酒肉臭。【三】百呼無一諾 韓詩外傳に、一呼再諾者、人

公雖不怪旁人愕。

公は怪まずと雖も旁人愕く。

世事如今臘酒醲。

世事如今臘酒醲なり、

交情自古春雲薄。

交情は古より春雲薄し。

二公凜凜和非同。

二公凜凜として同するにあらず、

疇昔心親豈貌從。

疇昔心親しむも豈貌從はんや。

白鬚相映松間鶴。

白鬚相映す松間の鶴、

清句更酬雪裏鴻。

清句更に酬ゆ雪裏の鴻。

何日揚雄一塵足。

何の日か揚雄一塵足り、

却追范蠡五湖中。

却て范蠡を追ふ五湖の中。

【一】遷逝 遷化といふに同じ、あの世にうつり去る意。潘岳の詩に、暝靈運三天機、四節代遷逝。【二】臘酒 臘祭（陰曆十二月の祭）のときの酒。【三】和非同 論語、子路篇に、君子和而不同、小人同而不和。【四】豈貌從 韓退之が詩に、直置心親無貌敬。【五】清句云云 白樂天の詩に、清句三朝誰是敵。【六】揚雄一塵 漢書に、揚雄居岷山之陽、曰、吾有田一壠、有宅一區。【七】追范蠡云云 史記に、范蠡汎扁舟浮於江湖。

【題義】此詩も、熙寧五年八月の作。紀昀いふ、謹嚴而不局促、清利而不淺薄、自是用意之作と。

歐陽公の趙少師に寄せた詩は、剝剝復啄啄、柴門驚鳥雀、故人千里至、信士百金諾、縉紳相趨動、顔色、閭里歡呼共嗟愕、顧我非惟慰寂寥、於時自可警煇薄、事國十年憂患同、酣歌幾日暫相從、酒醒初不戒徒御、歸思暫起如飛鴻、車馬関然人已去、荷鋤却向野田中といふのである。

【詩意】朱門には剝啄の跡があつて、人の出入が稀である。それで、遠くから燕雀を來たす。家の冷

いことは氷のやうで、百呼しても一諾がない。願れば平生の親しき友は、半はあの世の人となつた。公は命に安んじて怪まないが、旁人は愕く。世事は臘酒の如く醜で、簡單にゆかないが、交情は春の雲の如くに薄い。(王文誥いふ、通幅出色、全恃此二句、撐得結實。)歐陽少師・趙少師の二公は、凛凛として和して同するのではない。故に平生、心相親しむも、貌は必ずしも従はないのである。お互に老人となつて、白鬚の相映するは、松間の鶴のやうである。清句更に酬ゆるは、雪裏の鴻といふ趣がある。何れの日か、揚雄のやうに一宅地を得て、生活に不自由なく、扁舟汎汎として江湖に浮ぶ范蠡のやうな境遇でありたい。

監試呈諸試官

監試諸試官に呈す

我本山中人、寒苦盜寸廩。
文辭雖久作、勉強非天稟。
既得旋廢忘、懶惰今十稔。
麻衣如再著、墨水真可飲。
每聞科詔下、白汗如流瀉。
此邦東南會、多士敢題品。

我は本山中の人、寒苦寸廩を盗む。
文辭久しく作ると雖も、勉強して天稟にあらず。
既に得て旋で廢忘す、懶惰今十稔。
麻衣再び著くるが如し、墨水真に飲むべし。
科詔の下るを聞く毎に、白汗瀉を流すが如し。
此の邦は東南の會、多士敢て題品す。

芻蕘盡蘭蓀、香不數葵荏。
貧家見珠貝、眩晃自難審。
緬懷嘉祐初、文格變已甚。
千金碎全璧、百納收寸錦。
調和椒桂醞、咀嚼沙礫磣。
廣眉成半額、學步歸蹕蹕。
維時老宗伯、氣壓羣兒凜。
蛟龍不世出、魚鮪初驚滄。
至音久乃信、知味猶食楳。
至今天下士、微管幾左袵。
謂當千載後、石室祠高朕。
爾來又一變、此學初誰論。
權衡破舊法、芻豢笑凡飪。
高言追衛樂、篆刻鄙曹沈。

芻蕘盡く蘭蓀、香は葵荏を數へず。
貧家珠貝を見る、眩晃自ら審にし難し。
緬懷す嘉祐の初、文格變すること已に甚し。
千金全璧を碎き、百納寸錦を收む。
調和椒桂醞に、咀嚼沙礫磣なり。
廣眉半額を成し、歩を學んで歸つて蹕蹕。
維時の老宗伯、氣は羣兒を壓して凜。
蛟龍世に出でず、魚鮪初めて驚滄。
至音久うして乃ち信、味を知りて猶は楳を食ふ。
今に至るまで天下の士、管微りせば幾んど左袵。
謂ふ千載の後に當り、石室に高朕を祠ると。
爾來又一變、此學初誰か論ぐる。
權衡舊法を破り、芻豢凡飪を笑ふ。
高言衛樂を追ひ、篆刻曹沈を鄙む。

先生周孔出弟子淵齋寢。
却顧老鈍軀頑樸謝鑄鍛。
諸君況才傑容我懶且噤。
聊欲廢書眠秋濤春午枕。

先生周孔出で、弟子淵齋寢ぬ。
却て顧ふ老鈍の軀、頑樸鑄鍛を謝す。
諸君況んや才傑、我が懶く且つ噤むを容す。
聊か書を廢して眠らんと欲す、秋濤午枕に春く。

【字解】【一】監試 東坡、范夢得に答ふる書に、某被差本州監試、得開二十餘日。當時試官二人、其の一は乃ち劉錫。【二】十餘 十年といふに同じ、左傳、僖公二年に、虢公敗於桑田、晉卜偃曰、虢必亡矣、不可不以五穀。【三】麻衣如雪 麻衣は喪服であるが、こゝは舉子の著ける白布の衣服をいふ。詩の曹風に、麻衣如雪。晚唐、劉得仁の詩に、一著麻衣便白頭。唐、劉虛白の詩に、二十年前此夜中、一般燈火一般紅、不知歲月能多少、猶著麻衣待至公。舉子は皆、白麻を服す。【四】墨水眞可飲 陳の試、進士の程に中らざるもの、飲ましむるに墨水を以てす。北齊、選舉、選者には墨水一斗を飲ましむ。隋書、禮儀志に、後齊每策秀孝、皇帝坐於朝堂、秀孝各以班草對、其有脫誤書謬孟浪者、起立席後、飲墨水一升。【五】科詔 三國志、魏、程曉傳に、高選賢才、以充其職、申明科詔、以督其選。宋史、選舉志に、宋之科目、初惟進士及諸科、歲以爲常、皆秋取解、冬集禮部、奉考試諸州、以本判官試進士、錄事參軍試諸科。【六】流瀆 說文に瀆、汁也。【七】題品 品題といふに同じ。宋史、楊億傳に、當時文士、咸願其題品。温庭筠の詩に、武庫方題品。【八】芻蕘 芻は草を取るもの、蕘は薪を取るもの、詩經の大雅に、先民有言、詢于芻蕘。【九】蘭蓀 蘭も蓀も香草。王勃の上明員外啓に、蘭蓀不替。【一〇】奕在 後漢、馬融の廣成頌に、桂在典奕。典奕は尊菜。【一一】珠貝 文選、蜀都賦に、珠貝沔浮。沔浮は浮沈の意。【一二】眩見 眩耀といふに同じ、目がまはゆき程に耀く。【一三】嘉祐初云云 嘉祐の初、文格雖雖變、劉義、魏宜の屬の如き、皆、選に與からず、士論頗る洶洶。劉義は船山の人。好んで險語をなしたので、歐陽修に怒まる。文格變、嘉祐二年、歐陽修、貢舉を知る。是より先、進士益奇僻に相習ひ、釣魚棘旬、獲一渾渾を失ふ。歐公深く之を疾み、遂に痛く裁抑を加へ、文體亦是より少しく變す。【一四】千金碎金壁 莊子、山木篇に、

林回棄千金之璧。【一五】百納 皇甫冉の詩に、百納老空林。【一六】寸錦 抱朴子に、小文雖巧、猶之寸錦。【一七】嗚呼沙塵 文選上林賦に、嗚呼沙塵。嗚呼の樂府に、沙塵自飄揚。嗚は、食に砂がまじること。【一八】廣成 成、牛額。後漢書、馬融傳に、長安語して曰く、城中好廣成、四方且牛額。【一九】踰路 莊子、秋水篇に、夔謂蚘曰、吾以一足踰踰而行。踰は踰に同じ。同じく秋水篇に、不聞夫壽陵餘子之學行於邯鄲、與、未得國能、又失其故行、矣、直匍匐而歸耳。【二〇】老宗伯 歐陽修をいふ。宗伯は古の六卿の一。周禮に、宗伯主禮之官。時に、歐陽修、禮部を以て貢舉を知る。按ずるに歐陽修は禮部侍郎を以て翰林學士を兼ねるもの八年、故に東坡の謝啓にいふ、會宗伯之選、時文之弊。【二一】不世出 漢書、王吉傳に、欲治之主不世出。【二二】魚鮪初覺 禮記の禮運篇に、以龍爲畜、故魚鮪不涿。涿は魚鮪を驚かす。【二三】至音久乃信 後漢書、陳元傳に、至音不令衆聽。【二四】食糗 詩の泂宮に、爾彼飛鷄、集於泂林、食我桑椹、懷我好音。【二五】微管幾左 論語、憲問篇に、微管仲、吾其被髮左衽矣。【二六】石室祠高殿 太平寰宇記に、文翁學堂、一名周公禮殿。華陽國志に、漢末文翁立文學精舍、作石室、在華陽縣城南、後遇火、太守陳留高朕更修立、又增造二石室。後人因つて以て殿を祠る。【二七】權衡 物の輕重を計る器、申子に、懸權衡以稱輕重。【二八】芻蕘 芻は草を食ふ畜類、牛羊の屬。藁は穀を食ふ畜類、犬豕の屬。禮記に、共寢廟之芻蕘。孟子、告子篇に、芻蕘之悅我口。【二九】凡任 任は、よく交ること、論語、鄉黨篇に、失任不食。【三〇】高言 新書に、見教一高言、韓退之の時に、大句幹元造、高言軋骨。【三一】編樂 衛弁樂廣をいふ。晉の衛弁、字は叔賈、風神秀異、好く玄理を談す。弁の妻の父樂廣は、海内に重名あり。時にいふ、婦翁水清、女翁玉潤と。【三二】曹沈 曹植と沈約、曹植字は子建、操の子、十歳にして善く文を屬す。沈約字は休文、博く羣籍に通じ、善く文を屬す。【三三】淵鑿 淵淵と問子鑿。揚子に、或問、淵鑿之徒惡乎在、曰在鑿。【三四】老鈍 盧綸の詩に、老鈍盡多眠。【三五】鑄鍛 鑄は鑄刻すること。鑄は廣韻に爪刻鑄板也とある。板は食器の蓋板、爪を以て之を刻む。公羊傳の定公八年に、鑄其板。後世は轉じて板木に刻む義に用ゐる。【三六】才傑 沈約の詩に、吏部信才傑。【三七】噤 口を閉ぢる、廣韻に、噤塞而口閉也。

【題義】熙寧五年、東坡は杭州に在つて、中和堂に監試(試験官)をした。其の時に取つた所の應試

者の文章が體甚だ陋といふので、諸試官に呈したのが、此詩である。紀昀いふ、中一段大開大合、波瀾起伏、極爲壯闊と。又いふ、雖痛詆新學、而以嬉笑出之、尙未至以怒罵と。

【詩意】我は本、蜀、眉山の人、寒苦の一書生で、薄俸を受けて居つた。多年文辭を作つたが、それは勉強して作つたもので、天稟ではない。心に得る所がないでもなかつたが、隨つて廢忘し、懶惰今に十年。今は再び白布の衣服を着けて、場屋の人となつた感じがする。昔から進士の程に中らない者は墨水を飲ましめるといふことであるが、我は眞に墨水を飲むべきである。人材登用の科擧に關する詔が下るを聞く毎に、我は白汗が流れて止まない。杭州は東南の都會で、人材が多い。其の品定めをする、草を取り、薪を取る芻蕘も、盡く蘭や蕙の香草に比すべく、かの桂荏や、葦菜などの香草は物の數でない。さて貧家に珠貝の寶を見ると眩くて、自ら審かにし難い。之と同じく、編に嘉祐の初を懐ふと、當時の進士は、文を作る、奇僻に陥り、鈎章棘句、全く渾淳を失つて居る。昔林回は、千金の璧を棄てたといふが、當時の文章は、千金の全璧を碎いたものと謂つてもよろしい。多くの僧衣を着けたものが、寸錦を收めたと謂つてもよろしい。小文は巧なりと雖も、猶ほ之れ寸錦である。恰も調味に椒桂が和しないで、醃(酢漿)く、咀嚼するに、食物に沙礫が礫る(食物に砂が混する)と同じく、すべて奇僻に習つて居る。更にいふと、城中の人、廣い眉を好んで、四方の人、且に半額ならんとするやうなものである。行歩を邯鄲に學んで、未だ學び得ないうちに、故の歩き方を失つてしまひ、一足を以て踣蹠(一足で行く蹠)して歸つたといふ類である。是の時に老宗伯(歐陽修)が出

現して時文の靡弊を一掃した。此の歐陽修の氣は、羣兒を壓して凜然たるものがある。歐陽公は文弊を疾んで痛く裁抑を加へた。それで、いよいよ試榜が出ると、時に推擧されたものが、皆選に入らないので、羣薄の士は、收まらない。晨朝、修の家に羣聚して、之を詆斥した。街司も、遷吏も止めることが出来なかつた。甚しきは歐陽修を祭る文を爲つて其の家に投じたものもある。併し文體は是より亦少しく變つて來た。蛟龍は世に出でない。たまたま出ると魚鱗は初めて驚いて水中を走る。歐陽公の世に出づる、之に類するものがある。凡そ至音は衆聽に合はないから、一時は多く耳を假さない。久うして人に信せられる。今に至るまで、天下の士は、管仲がなかつたなら、夷狄の風に淪み、髮を被りて結ぶことなく、衣の襟を左前に合せて恥ぢることもないであらう。歐陽公が出でなかつたら、天下の文章は、ますます邪徑に陥いつたことと思ふ。故に千歳の後に當り、石室に高殿を祠ると同じこととおもふ。(高殿は石室を修立し増造した太守である。歐陽公は斯文を修立した)爾來、又一變した。(王安石が科擧の法を改めたことを指す。宋史の選舉志に據ると、初、進士試三詩・賦・論各一首、策五道、帖論語十帖、對春秋或禮記墨義十條といふやうな制度であつたが、神宗は王安石の議を入れて、試験の法を改め、從來の詩・賦・帖・經・墨義を罷め、士は各、易・詩・書・周禮・禮記一經を占治し、論語・孟子を兼ねる。春秋は之を罷めた。三傳通じ難いといふのでなく、斷爛朝報と認めたらである。)此學は、一體、誰が諒げたか。權衡は舊法を破り、芻豢は凡任を笑ふ。當時、虛無の學を尙んで、衛玠や樂廣だちの高言を眞似る。當時、詩賦を以て篆刻となして用ひず。曹植や沈約など雕蟲を

鄙しむ。(雕蟲とは文を作るに、字句を鑄飾するをいふ。)先生の周公孔子が出て、弟子の顔淵や閔子騫が寝る。(歐陽公を稱揚す)却て願ふに、老鈍の此身(東坡自ら言ふ)は先生に對し、頑樸であり、鑄鏡を事とした點を謝する。そして又、諸君も才傑であるから、私の懶惰で且つ口無調法を容される。我は聊か書を廢して眠らうとする。時に秋濤は、高く午枕に春いて居る。

【餘論】唐朝の士を取る、専ら科擧に由る。五代亂離と雖も、貢擧は廢しなかつた。進士科があり、明經諸科がある。周の世宗、又、制擧三科(賢良方正科・經學優深科・詳閑吏理科)を置き、朝野の士をして並に擧に應ずることを得しめ、試るに策論を以てした。宋朝、亦之に沿ひ、制擧、常貢の別がある。制擧は常なく、或は行ひ、或は罷む。眞宗は科を増して六となしたが、(賢良方正・博通・墳典・才識兼茂・詳明吏理・誠洞・韜略・材任・邊寄)未だ幾ならず之を廢した。仁宗は六科を復し、以て京朝官を待ち、別に三科を増し、(高蹈丘園・沈淪草澤・茂材異等)以て布衣を待ち、書判拔萃科を置き、以て選人の書に應ずるものを待つ。皆、先づ秘閣に試み、格に中つて然る後、帝、親ら之を策す。其の常貢は、則ち諸州毎秋、解を發し、(發解といふは、州縣より京師に出でて試験を受けしめること。州縣の試験にて優等であつたものは、其の地方官廳から解(公文書)を中央政府に發送し、更に其人を京師で試験する。本州給解、故に之を拔解といひ、發解といふ。)冬、禮部に集り、春に考試する。凡そ進士は、詩賦論及び帖經墨義を試み、諸科は(九經・五經・通禮・三禮・三傳・三史・學究一經等)専ら帖經墨義を試む。開寶中、進士ありて、知擧官情を用ひて、取捨するを訴ふ。太祖乃ち下第竝に選に

中るものを選び、親ら講武殿に御して別に試む。是れより殿試は遂に永制となつた。

望海樓晚景五絶

望海樓晚景五絶

海上濤頭一線來。

海上の濤頭一線來り、

樓前指顧雪成堆。

樓前指顧に雪堆を成す。

從今潮上君須上。

今より潮上らば君須らく上るべし、

更看銀山二十回。

更に銀山を看んこと二十回せん。

【字解】(一)望海樓 太平寰宇

記に、樓高十八丈、唐武德七年置。

(二)一線來 唐、盧肇海潮の賦に、夾二羣山而遶入、射一線而中投。

(三)指顧 手に取る如く近く見える義、漢書、律歷志に、指顧取象。

(四)銀山 庚信の啓に、銀山或動。

【題義】熙寧五年八月の作、杭州圖經に、東樓、一名望海樓、在舊治中和堂北とある。東坡が范夢得に與へた書にも、被差監試、在中和堂望海樓一閒坐云云。樓は鳳凰山半に在るから、潮を見る。故に或は望潮樓といひ、望濤樓といふ。閑中で作つた詩である。

【詩意】潮の生ずる迅速さをいふと、海上に、一線の潮の頭が見えたと、樓前近く指顧の間に、千波萬波が争ひ起つて、雪の堆きさまを成す。(劉禹錫の詩に、八月潮聲吼地來、頭高數丈促山廻、須臾卻入三海門、去、捲起沙堆似雪堆とある。)さて今日より潮が上つたらば、君よ、(君とは、廣く衆人を指す)須らく樓に上るべし。そして更に銀の山を二十回も看ることに致さうぞ。(潮の盛に湧きたらるさまを銀の山といふ。東坡の意を推すと、我は此處に、十日間も逗留しようと思ふから、毎日朝

の潮と夕の汐と一日に兩度づつ、即ち十日の間には、二十回看ることになる。

横風吹雨入樓斜。横風雨を吹いて樓に入つて斜なり、

壯觀應須好句誇。壯觀應に須らく好句にて誇るべし。

雨過潮平江海碧。雨過ぎ潮平かにして江海碧に、

電光時掣紫金蛇。電光時に掣す紫金の蛇。

【詩意】横風は雨を吹いて斜に樓に入る。此の壯觀は應に好句に寫して誇るべきであらう。雨過ぎ潮が平かにして、江海は見渡す限り碧の色である。そして、電光は時に紫金蛇をひく。(樓上の風雨電光の壯觀を寫し、紙上颯颯として聲あり。江海碧といひ、紫金蛇といふ、金碧著色の畫を観るやうである。)

青山斷處塔層層。青山斷ゆる處塔層層、

隔岸人家喚欲嚮。岸を隔つる人家喚べば嚮へんと欲す。

江上秋風晚來急。江上の秋風晚來急なり、

爲傳鐘鼓到西興。爲に鐘鼓を傳へて西興に到る。

【詩意】樓上から望むと、西興鎮の層層と聳ゆる塔が見える。又、其の人家は近くて、喚ぶときは響

へやうとする。日晚れ方からは、浙江上の秋風がきびしく吹き起つて、浙江の寺の鐘鼓の聲を傳へ、西興に送り到るのである。(西興は、越にあり、越州圖經にも、西興鎮は蕭山縣の西十三里にあると見えて居る。要するに、此の樓は杭州の浙江に在つて、越州の西興に對せるもので、此詩は樓上から、西興の青山層塔を望んだ感じを述べたものである。)

樓下誰家燒夜香。樓下誰が家か夜香を燒く、

玉笙哀怨弄初涼。玉笙哀怨して初涼を弄す。

臨風有客吟秋扇。風に臨んで客の秋扇を吟するあり、

拜月無人見晚粧。月を拜して人の晚粧を見るなし。

【字解】【一】玉笙。李義山の詩に、恨望銀河吹玉笙。【二】吟。秋扇。晉、王琨の白團扇歌を吟じたので、班婕妤の事を用いたのではなからう。謝芳姿が白團扇を製して、王琨に贈る詩に、團扇復團扇、持許

自障面、憔悴無復理、羞與郎相見。班婕妤が團扇詩に、新製齊纨素、皎潔如霜雪、裁成合歡扇、團圓似明月、出入君懷袖、動搖微風發、常恐秋節至、涼氣奪炎熱、棄捐篋箱中、恩情中道絕。【詩意】誰が家か樓の下で、夜香を燒く。玉笙の音は哀怨で初涼を弄する。風に臨んで客が秋扇を吟じた。司空圖の詩に、晚粧留拜月、卷上水精簾とあるが、月を拜して、人の晚粧を見ることがない。【餘論】紀昀は此首を評して、格力較卑靡と言つて居る。

沙河燈火照山紅。沙河の燈火山を照して紅なり、

【字解】【一】沙河。唐の地理志

歌鼓喧呼笑語中。歌鼓喧呼たり笑語の中。
 爲問少年心在否。爲に問ふ少年心在りや否や、
 角巾欵側鬢如蓬。角巾欵側して鬢蓬の如し。

のかぶる頭巾、高適の時に、丘園有角巾。晉書羊祜傳に、既定邊事、當角巾東路歸故里。
 欵側八九丈。

に、錢謙益南五里有沙河塘、咸通二年、刺史崔彥曾開、昔潮水衝擊錢塘江岸、至於奔逸入城、勢莫能禦、故開沙河以決之、河有三、曰、外沙、中沙、裏河。【二】角巾、隱者

【題義】昔の胥山といふは、今の吳山のことである。胥山の西北は、舊、石を鑿つて棧道を爲つた。唐の景龍四年に、沙岸の北が漲り、地漸く平坦となつた。州司馬李珣が始めて沙河を開いて、水陸に路を成した。杭州圖經に據ると、此時河流去胥山未甚遠。景龍沙漲の後、錢氏に至り、沙に隨つて岸を移し、漸く鐵嶺に至る。今の新岸は、胥山を去る、已に三里を逾え、皆、通衢となつて、居民が甚だ盛といふことである。

【詩意】沙河の燈火が山を照して紅であり、歌鼓笑語、喧呼して甚だ賑かである。爲に少年に問ふが、角巾を著け欵側して鬢は蓬の如きに心ありや否や。

蟹眼已過魚眼生。蟹眼已に過ぎて魚眼生し、

試院煎茶

試院茶を煎る

【字解】【一】蟹眼已過魚眼生。蟹の眼は小さく、魚の眼は大きい、以て湯の沸騰の度を狀する。大觀茶

颺颺欲作松風鳴。颺颺松風の鳴を作さんと欲す。
 蒙茸出磨細珠落。蒙茸磨を出でて細珠落ち、
 眩轉甌飛雪輕。眩轉甌を逸つて飛雪輕し。
 銀餅瀉湯誇第二。銀餅湯を瀉いで第二を誇る、
 未識古人煎水意。未だ識らず古人水を煎する意を。
 君不見昔時李生。君見すや、昔時李生客を好んで手自ら
 好客手自煎。煎し、
 貴從活火發新泉。活火に従ひ新泉を發するを貴ぶを。
 又不見今時潞公。又見すや、今時潞公茶を煎して西蜀を
 煎茶學西蜀。學び、
 定州花瓷琢紅玉。定州の花瓷紅玉を琢するを。
 我今貧病常苦飢。我今貧病にして常に飢うるを苦めば、
 分無玉盃捧蛾眉。玉盃の蛾眉に捧しむるなきを分とす。
 且學公家作茗飲。且く公家を學んで茗飲を作し、

論に、凡用湯、以魚目蟹眼連珠並
 爲度。【二】颺颺、水經の註に、
 風颺颺而颺、颺は小風、颺は颺風
 の聲。【三】松風鳴、吳許次孺茶疏
 に、水一入、鑊便須急煮、候有松
 聲即去。【四】蒙茸、草が亂れ生
 ずる。謝朓の詩、霜畦紛綺錯、秋町
 鬱蒙茸。【五】詩第二、惠山泉煎
 茶を第二と爲す。又煎茶は、兩浙が
 盛で、越州の日注が第一。景祐より
 以來、洪州雙井の白芽が製作尤も精
 しく、遠く日注の上に出で、遂に草
 茶の第一となる。【六】好客、史
 記、馮諼傳に、閉孟嘗君好客。
 【七】定州花瓷、宋時、定州造る所の
 瓷は、宣和・政和間の窯を以て最とな
 す。定窯に光素、凸花の二種あり、白
 色を以て正となし、白骨にして加ふ
 るに勅水を以てし、淚痕の如きもの
 あるを佳となす。茶疏に、茶取古

樽爐石銑行相隨。

樽爐石銑行くゆく相隨ふ。

不用擗腸拄腹文。

腸を擗し腹を拄する文字五千卷を用ひず。

但願一甌常及睡。

但願ふ一甌常に睡足り日高まる時に及ばんことを。

足日高時。

ばんことを。

白樂天の詩に、黃金不惜買銀甌。【〇】擗、腸拄、腹文字。盧全が孟諫議新茶を寄するを謝する詩に、三椀搜枯腸、惟有文字五千卷。【二】睡足日高時。盧全が新茶の詩に、日高丈五睡正濃、軍將打門驚周公。都谷の詩に、願清一甌春有味。願清は浙江長興縣に在り、茶の産地、其の産する所の紫筍茶も亦、願清と名く。

【題義】此詩は熙寧五年八月十日、試院に在つて、作つたものである。唐宋詩醇に、獨寫煎茶妙處、於三集中諸詠茶詩、別出一奇、語不必深、而精采自露云云と。紀昀いふ、發端超妙、惜以下多入二澀調二耳と。

【詩意】昔、蔡君謨は、茶辨を作つて、詳に水泉煎飲等を辨じ、蟹眼・魚眼用湯の法を述べた。それは、茶經に、凡候湯有三沸、如魚眼、微有聲爲一沸、緣邊如湧泉連珠爲二沸、騰波鼓浪爲三沸、則湯老とあるに據つたものであらう。湯の沸騰の度は、蟹眼の小沸が過ぎて、魚眼の大沸が生じ、鼈腹として松風の鳴く音を作さうとする。更に形容すると、蒙茸と亂れて茶の磨(石磴)から細い珠が落ち、茶の甌を逸つて眩轉し、飛雪の如くに軽い。銀餅から湯を瀉いで第二を誇る。(乃ち是れ

尋常茶を點する時、先づ略瓶中の湯を傾けて、方に點す、之を第二湯といふ。これは未だ古人の水を煎する意を識らないのである。(古語にいふ、煎水不煎茶)昔、李約は茶を嗜んで、能く自ら煎し、人に謂つて曰く、茶須緩火炙、活火煎と。活火は炭の餘あつて、方に熾なるものをいふ。李生は、活火に従ひ、新泉を發するを貴んだ。又、今時の瀟公は(瀟公煎茶の事は、考ふる所なし)茶を煎して、西蜀を學び、定州の花瓷に紅玉を琢する。我は今、貧病であつて、常に饑うるを苦しむ境遇であるから、勿論蛾眉をして捧げしめる玉碗もない。それで且く公家を學び、茗飲をなして、樽爐(樽は甌)石銑(廣韻に銑、燒器)を隨へて行く。腸を擗へ腹を拄へる文字五千卷を用ひないのである。ただ願ふ、一甌を喫し、十分に睡つて、日の高き時に及ばんことを。(是時、甫めて王安石の議を用ひて、士を取る法を改め、詩賦・帖經・墨義を罷め、専ら策を以て千言を限定す。故に東坡が諸試官に呈する詩に、聯袂廢書眠、秋濤春三午枕。正に此篇の末句の意と同じ。未識古人煎水意、且學公家作茗飲。亦、皆、此の意である。)

孫莘老求墨妙亭詩

孫莘老墨妙亭の詩を求む

蘭亭蘭紙入昭陵。

蘭亭の蘭紙昭陵に入るも、

世間遺跡猶龍騰。

世間の遺跡猶ほ龍騰。

顏公變法出新意。

顏公法を變じて新意を出す、

古今體詩 孫莘老求墨妙亭詩

五六七

【字解】【一】孫莘老、宋の孫覺、字は莘老、高郵の人。官、龍圖學士。王安石の爲に逐られたが、安石退いて鍾山に居ると、造り訪ふ。安石の卒するに及び、文を作つて誄す。【二】墨妙亭、今の浙江興興縣、舊湖州府

細筋入骨如秋鷹。細筋骨に入つて秋鷹の如し。
 徐家父子亦秀絕。徐家の父子亦秀絶、
 字外出力中藏稜。字外に力を出して中に稜を藏す。
 嶧山傳刻典刑在。嶧山の傳刻典刑あり、
 千載筆法留陽冰。千載の筆法陽冰を留む。
 杜陵評書貴瘦硬。杜陵書を評して瘦硬を貴ぶ、
 此論未だ公ならず吾は憑らず。此論未だ公ならず吾は憑らず。
 短長肥瘦各有態。短長肥瘦各有態あり、
 玉環飛燕誰敢憎。玉環飛燕誰か敢て憎まん。
 吳興太守真好古。吳興の太守は真に古を好み、
 購買斷缺揮縑緙。斷缺を購買して縑緙を揮ふ。
 龜趺入座螭隱壁。龜趺座に入り螭壁に隱る、
 空齋畫靜聞登登。空齋畫靜にして登登を聞く。
 奇蹤散出走吳越。奇蹤散出して吳越に走り、

署内に在る。曾蒙の墨妙亭詩に、
 名盛位知難久、壯字豐碑亦易忘、
 東木已非。眞筆刻、色絲空喜好文章、
 峴山漢水成虛擲、大厦深潭且閉藏、
 好事今推賢漢守、故開新館集琳瑯、
 【一】 蘭紙。北戸錄に、晉宋間、有
 一種紙、長丈餘、就船抄之、世謂蘭
 紙。【二】 昭陵。唐太宗の陵、今の
 陝西、醴泉縣東北、九嶷山にある。
 【三】 顔公變法。書斷に、唐、顔眞
 卿書、雄秀獨出、一變古法。【四】
 新意。杜預左傳序に、此蓋春秋新意。
 【五】 細筋入骨云云。衛夫人筆陣圖
 に、善筆力者多骨、不善筆力者
 多肉。又いふ、多骨骨微肉者、謂
 之筋骨。【六】 徐家父子。徐嶧之は
 會稽の人、書を善くし、法を以て其
 の子浩に授く。浩は益工に、法書
 論一篇を撰んで時の楷範となる。嶧
 之は廣平の太守、浩は中書舍人、國

勝事傳說誇友朋。勝事傳說して友朋に誇る。
 書來乞詩要自寫。書來つて詩を乞ひ自ら寫さんことを
 爲把栗尾書溪藤。爲に栗尾を把つて溪藤に書す。
 後來視今猶視昔。後來今を視ること猶昔を視るがごとく、
 過眼百世如風燈。眼を過ぐる百世風燈の如し。
 他年劉郎憶賀監。他年劉郎賀監を憶ひ、
 還道同時須服膺。還道はん時を同うせば須らく服膺す。

子祭酒。【一】 嶧山傳刻。寶泉の遺
 書賦註に、李斯作小篆、書嶧山碑、
 其後石燬失、土人刻宋代之。杜子
 美の詩に、嶧山之碑野火焚、遺木傳
 刻肥失眞。【二】 陽冰。李陽冰は
 趙郡の人、唐朝書評に、陽冰篆書、
 若古篆倚物、力有萬夫、李斯後一
 人而已。【三】 貴瘦硬。杜子美
 八分小篆歌に、書貴瘦硬方通神。
 【四】 玉環飛燕。楊妃外傳に、妃
 小字玉環。漢成帝内傳に、飛燕身輕不勝風、帝置七寶避風臺。【五】 龜趺。石碑の臺石に龜の形を刻んだもの、寶樹の詩に、龜
 趺負奇石、浮語極衰移。【六】 螭。螭首をいふ、碑の額又は柱頭に、螭の形を雕るもの。六典に、碑碣之制、五品以上立碑、註
 にいふ、螭首龍狀と。【七】 登登。碑を打つ聲、詩に紫之登登。【八】 栗尾。筆をいふ。【九】 溪藤。刻溪紙をいふ、唐國史補
 に、紙則有越之刻藤。【一〇】 觀今猶視昔。蘭亭敘に、後之視今、猶今之視昔。【一一】 如風燈。韓退之の詩に、百歲如風
 狂。杜荀鶴の詩に、百歲風前短燈。【一二】 劉郎憶賀監。劉禹錫の詩に、高樓賀監昔曾登、壁上海龍龍虎聲。又いふ、偶因獨立
 空驚目、恨不同時便伏膺。

【題義】此詩も熙寧五年八月の作。東坡の墨妙亭の記に、熙寧四年十一月、高郵孫莘老、自廣德移
 守吳興、其明年二月、作墨妙亭於府第之北、逍遙堂之東、取凡境內自漢以來古文遺刻以實之と
 ある。紀昀いふ、句句警健、東坡極加意之作と。又いふ、此眞通人之論、詩文皆然、不獨書也と。

王文誥いふ、江淹擬詩序、已明此旨、東坡移以論書耳と。

【詩意】王右軍（王羲之）蘭亭修禊序の真本は、繭紙に書いてあるさうで、唐、太宗の初、之を得たから、趙模・馮承素・諸葛貞の流に命じ、榻本にして諸王に賜うた。其の真本は、玉匣に入り、従つて昭陵に葬つたから、見ることが出来ない。併し世間に遺つて居る右軍の筆の跡は、梁の武帝が評したやうに、字勢が龍の天門に躍り、虎の鳳閣に臥したやうである。凡そ書は通ずれば變する。歐陽詢は王右軍の體を變じ、柳公權は歐陽の體を變じて顏真卿等に至る。皆、法を得た後に、自ら其の體を變する。若し法を執りて變じないときは、號して奴書となす。顏真卿は書法を變じて新意を出し、細筋が骨に入つて、秋鷹のやうである。（徐浩の論書に、初學之際、宜先筋骨、筋骨不立、肉何所附と見ゆ。）徐浩父子も亦秀絶である。（徐浩、字は季海。浩が父嶠之、字は惟岳。父子皆、草隸に工であつて、人は其の書を狀して怒猊抉石、渴驥奔泉となした。其の字は、外に力を出して、中に稜を藏する。）王文誥いふ、鍾王之法、七字道盡と。鍾は鍾繇、王は王羲之・王獻之。李斯は小篆を作つて、碑山の碑を書いた。其の書は傳刻されて、典刑が存する。碑山の碑に刻んだ李斯の小篆は、其の後、唐の李陽が其の筆法を得て、玉箸體と號した。杜子美は、書を評して瘦硬を貴ぶと言つたが、此論は公平でないから、我は從はない。（亭中に顏・徐・李斯等の石刻があるから序に之を言つたのであらう。）短長肥瘦、各態があつて、楊貴妃の身肥えたるも、趙飛燕の身輕きも、誰か敢て憎まうぞ。吳興の太守孫幸老は、眞に古を好み、斷缺を購買して、緘繒を揮ひ、廣く境内に索めて、漢以來の古文遺刻を取

り、墨妙亭を築いて之を貯へたのである。其の収集の多き、石碑の臺石の龜趺も、亭の座に入り、同じく螭首（龍の角なきもの）も壁中に隠れ、空齋は畫靜にして碑を打つ聲の登登たるを聞くのみである。奇蹤は吳越に散出し、勝事は傳説して友朋に誇る。孫君にはわざわざ書信を寄せて詩を我に求めらる。（王文誥いふ、收到墨妙句、似率易、而手法細密之甚と。）我は爲に筆を把つて刻溪紙に書く。後の今を視るは、猶ほ今の昔を視るがやうで、眼を過ぐる百世と雖も、風燈の如きである。劉禹錫は高樓賀監昔曾登、壁上筆蹤龍虎騰と言つたが、他年、劉禹錫が賀監を憶つたやうに墨妙亭を憶ふとき、もし君と時を同うせば、須らく此書を服膺すべしと言はうとする。

【餘論】歐陽修の集古錄に、蘭亭修禊序、世所傳本尤多、世言、真本葬昭陵、唐末之亂、昭陵爲温箱所發、所藏書畫、皆別取裝軸金玉而棄之、太宗時、搜訪集爲三十卷、模傳之、分賜近臣、獨蘭亭真本亡矣、故不得列於法帖。この温箱といふは、京兆華原の人で、少うして盜をなし、後、李茂貞に事へ、姓名を李彦韜と改む。後唐、明宗の時、嘗て諸陵を發くの罪を以て德州に流し、死を賜はつた。

李公擇求黃鶴樓詩因記舊所聞於馮當世者

李公擇、黃鶴樓の詩を求む、因りて舊馮當世に聞きし所のものを記す

黃鶴樓前月滿川

黃鶴樓前月川に滿つ、

【字解】〔一〕李公擇 李常、字

抱關老卒飢不眠、
夜聞三人笑語言、
羽衣著屐響空山、
非鬼非人意其僊、
石扉三叩聲清圓、
洞中鏗鉦落門關、
縹緲入石如飛烟、
鷄鳴月落風馭還、
迎拜稽首願執鞭、
汝非其人骨腥羶、
黃金乞得重莫肩、
持歸包裹敝席氈、
夜穿茆屋光射天、
里閭來觀已變遷、

抱關の老卒飢えて眠らず。
夜聞く三人笑語していふを、
羽衣履を著けて空山に響く。
鬼にあらず人にあらず意ふに其れ僊、
石扉三たび叩いて聲清圓。
洞中鏗鉦門關落つ、
縹緲として石に入る飛烟の如し。
鷄鳴き月落ち風に馭して還り、
迎拜稽首して鞭を執るを願ふ。
汝は其の人にあらず骨腥羶、
黄金乞ひ得て重うして肩にするなし。
持し歸つて包裹す敝席氈、
夜赤屋を穿ちて光天を射る。
里閭來り觀れば已に變遷す、

は公擇、建昌の人。熙寧中、諫院に
知たり。均輸・青苗の毒を天下に流
すを言つて、出されて滑州に列た
り。哲宗立ちて、戸部尙書に進み、
尋で出されて鄆州に知たり。【一】
黃鶴樓 太平寰宇記に、黃鶴樓在武
昌江夏縣西二百八十步、昔、費文禰
登仙、每騎黃鶴、於此憩、駕。
【二】 馮當世 馮京、字は當世、江夏
人。富郵公の塔にして文簡と諡す。
【三】 抱關 門番をいふ。孟子、萬章
篇に、抱關擊柝。荀子、榮辱篇に、
抱關擊柝。【四】 羽衣 漢書、郊祀
志に、使使衣羽衣。【五】 石扉三
叩 劉孝綽の詩に、方夜勢石扉三
叩。【六】 鏗鉦 鏗鼓の聲をいふ。文選、
吳都賦に、鏗鼓之鏗鏗。【七】 門關
周禮に、有股門關。【八】 縹緲
はるかに廣い。白樂天の詩に、山在
虛無縹緲之間。【九】 執鞭 論語、

似石非石鉛非鉛、
或取而有衆忿喧、
訟歸有司今幾年、
無功暴得喜欲顛、
神人戲汝真可憐、
願君爲考然不然、
此語可信馮公傳、

石に似て石にあらず鉛鉛にあらず。
或は取りて衆忿喧するあり、
訟有司に歸して今幾年。
功なくして暴に得喜んで顛せんと欲す、
神人汝に戲る真に憐むべし。
願くは君爲に然不然を考へよ、
此の語信すべし馮公傳ふ。

述而篇に、雖執鞭之士、吾亦爲之。
【一】 麗理 呂氏春秋に、水居者麗、
草食者麗。【二】 包裹 淮南子に、
包裹天地。

【題義】 此詩も熙寧五年八月の作。樂城集に據つて考へると、公擇は時に鄂州に知となつて居た。紀
陶いふ、音節驟然と。
【詩意】 鄂州黃鶴樓前、月は川に滿つる。相傳ふ、樓の下に石があつて、其の光の徹して居る所から
石照と言つた。其右の巨石が所謂仙人洞である。嘗て一守關の老卒があつて、晨夕毎に洞下に拜する。
或る夕、月が晝の如くであつたとき、三道士が洞中から出て、吟嘯すること久しく、將に復、洞に入
らうとする。老卒は之に従ふ。道士いふ汝は何人か。老卒は具に之に對へ、且つ富貴を欲する所以を
いふ。道士いふ、此洞間の石、速に一塊を抱いて去るべしと。老卒持して出でると、やがて石が合つ
て、入ることが出来ない。翌日、石を視ると黄金であつたといふことである。(此詩は此傳説に據つた

ものである。再びいふと、三道士は履を著け、其の履音が空山に響く。鬼でなく、人でもなく、其れ仙人か。三たび石扉を叩く、其の聲が清圓である。洞中も鏗鏘と響いて、やがて門闕が落ちる。縹緲として石に入り、飛烟のやうに消えてしまつた。既にして鶴が鳴き、月が落ちる。風に駭して還り、迎拜して鞭を執つて出入に從ひ、趨走したいと願ふ。すると仙人はいふ、汝は其人ではない。汝の骨がまだ腥いと。老卒は黄金を乞ひ得たが、重くて肩にすることも出来ない。(紀昀いふ、以上三句、他人須三數行一方了。)持ち歸つて弊れた席氈に包んで置いた。黄金の光は、夜、茅屋を穿つて、天を射たのである。さて我が里閭に歸り來つて觀れば、已に變遷して故の如くではない。石に似て石でなく、鉛に似て鉛でもない。(王文誥いふ、隨筆填寫、亦如斷續碎瓦、皆成黄金。)或は之を取つて衆が憤喧する。そこで有司に訴へた。それから今に幾年か分らない。功がないのに暴に富を得て、喜んで願せんとする老卒よ、神人の汝に戯れるは、眞に憐むべきである。願くは君爲に此の事の然るか然らざるかを考へよ。此の話は、馮當世が傳へたものであるから、信すべきである。(紀昀いふ、得此二語、方非小説傳奇、不然則遊騎無歸、收束不住と。)

八月十日夜看月有懷子由并崔度賢良

八月十日夜月を見て、子由并に崔度賢良を懷ふあり

宛邱先生自不飽

宛邱先生自ら飽かず

【字解】「崔度 蘇東坡に通じ、

更笑老崔窮百巧

更に笑ふ老崔百巧を窮むるを。

一更相過三更歸

一更相過ぎ三更に歸る、

古柏陰中看參昴

古柏陰中に參昴を見る。

去年舉君苜蓿盤

去年君が苜蓿盤を擧ぐ、

夜傾閩酒赤如丹

夜閩酒を傾く赤うして丹の如し。

今年還看去年月

今年還看る去年の月、

露冷遙知范叔寒

露冷に遙に知る范叔の寒さを。

典衣自種一頃豆

衣を典して自ら種う一頃の豆、

那知積雨生科斗

那ぞ知らん積雨科斗を生ずるを。

歸來四壁草蟲鳴

歸り來れば四壁草蟲鳴く、

不如王江常飲酒

如かず王江の常に酒を飲むに。

【一頃豆】 范叔寒 史記、范雎傳に、范叔一寒如此哉。【一頃豆】 漢、楊惲傳に、田彼南山、蕪穢不治、種一頃豆、落而爲其。【科斗】 豆田蟲を生ずるをいふ。科斗は、おたまじやくし。劉克莊の時に、塘水拍岸科斗生。

【題義】 崔度は時に陳州の教授であつた。子由も同じく學官であつたので、月を見て子由を懷ひ、并

文があり、周く世務を知るといふので、韓琦は之を薦擧して、盛に其の才を稱した。【二】宛邱 陳州をいふ。時に子由は、陳州の學官であつた。【三】參昴 參は西方の申の位にある星の名、昴は二十八宿の一。詩經召南に、嘒彼小星、維參及昴。

【苜蓿盤】 苜蓿を盛つた盤、書言故事に、唐、薛令之爲東宮侍讀、時、官署簡淡、以詩自悼云、朝日上闕圓、照見先生盤、盤中何所有、苜蓿長一闌干、飯盡匙難進、羹稀筋易寬、只可謀朝夕、何由保歲寒。

【閩酒】 李賀の詩に、小槽酒滴真珠紅。今、閩廣の間に釀す所の酒、之を紅酒といふ。其色は殆んど眞珠

せて崔度に寄せたのが此詩である。紀昀いふ、清而不淺と。

【詩意】宛邱先生子由は、自ら足るとしない。更に老崔度の百巧を窮める態度も、笑ふべきである。夜の八時頃相通り、同じく十時頃歸つて見ると、古柏の陰中に參星と昂星とを見る。去年陳に在つて、君が首着盤を擧げ、（此は辛亥都を出て陳に在る時を指す。）夜、鬪酒を傾けたことを思ひ出す。酒の色は赤くて、丹のやうであつた。今年また去年の月を見る。露冷かにして遙に范叔の寒きを知る。（子由・崔度を懷ふ）衣を典して自ら一頃の豆を種ゑたが、思ひ掛けもなく、長雨で蛙を生ずると同様で、收穫がなかつた。歸り來て見ると、四壁に草蟲が鳴いて居る。王江（陳州の道人）のやうに常に酒を飲んで居るに越したことはない。

【餘論】張耒の明道雜誌に、陳州有王江者、真有道之士、嗜酒伴狂、形短而肥、丫髻（あげまきに結んだ髪）簪花、語言不常而中有理、止無常處、惟持一葉一束、或至京師、今不復見矣。又、龍川志にいふ、丐者王江居宛邱、喜飲、大雪埋之、氣勃然、雪輒融液、自云、本考城人、嘗舉學究。熙寧三年、子由が陳に至つた時、脾肺に疾が多かつた。幸、道士の服氣法を授けるものがあつたが、遂に身を終へるまで之を行つた。當に之を王江及び李若之に得たのであらう。

八月十五夜

八月十五夜

催試官考較戲作

試官の考較を催し戲れに作る

【字解】【一】茅簷 茅簷と同じ、陶淵明の詩に、塵積前簷下。【二】市樓 許渾の詩に、市樓餘酒過青

月色隨處好

月色隨處に好し。

不擇茅簷與市樓

擇ばず茅簷と市樓と、

況我官居似蓬島

況んや我官居蓬島に似たり。

鳳唳堂前野橘香

鳳唳堂前野橘香し、

劍潭橋畔秋荷老

劍潭橋畔秋荷老ゆ。

八月十八潮

八月十八潮、

壯觀天下無

壯觀天下に無し。

鯤鵬水擊三千里

鯤鵬水擊三千里、

組練長驅十萬夫

組練長驅十萬夫。

紅旗青蓋互明滅

紅旗青蓋互に明滅、

黑沙白浪相吞屠

黑沙白浪相吞屠す。

人生會合古難必

人生會合古より必し難し、

此景此行那兩得

此の景此の行那ぞ兩ながら得ん。

願君聞此添蠟燭

願くは君此を聞いて蠟燭を添へよ、

古今體詩 催試官考較戲作

五七七

春一【一】蓬島 蓬萊島をいふ。李義山の詩に、蓬島煙霞閣苑城。【二】鳳唳堂 鳳凰山下に在り。此山は鳳塔を建てて、鳳唳は正に居る所の池上に落つ。書、一室あり、山の落ちんと欲する處に在り。近之を奪き、之を鳳唳堂といふ。【三】劍潭橋 王文簡いふ、杭州無此橋名、指三蜀中也、月色隨處好句、不專指杭州。【四】八月十八潮 錢塘候潮圖に、八月十八日、獨大常潮、遠觀數百里、若素練橫江、稍近見潮頭萬數丈、捲雲湧雪、混混而前、聲如雷鼓、猶不足形其容之。夢梁錄に、臨安每歲八月內潮怒勝於常時、自十一日起至十八日、傾城而出、最為繁盛、自廟子頭直至六和塔、水軍散開於潮未來時、下水、打陣、展旗、百端呈露、號天下壯

門外白袍如立鶴 門外の白袍立鶴の如し。

觀。臨安志に、毎仲秋既望、潮怒特甚、杭人執旗游水上、以逐子者、

弄潮之戲始於此。【七】 臨海水軍三千里。莊子、逍遙遊に、北冥有魚、其名爲鯨、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之徙於南冥也、水擊三千里。【八】 組練。白練織の體、組甲被練と熟す、衣甲の飾をいふ。組甲とは、甲に漆して、組文をなすもの。被練は練袍をいふ。左傳、襄公三年に、楚子重伐吳、使鄧廖帥組甲三百、被練三千、以侵吳。【九】 長驅。休まずして追ひかくる。戰國策に、輕兵銳卒、長驅至齊。【一〇】 兩得。荀子に、人一之於禮義、則兩得之矣。【一一】 白袍。宋の初は、唐の舊制に仍り、官あるものは、皂袍を服し、官なきものは白袍を著る。楊文公歐陽に、晉、開運詔兩制各作詩賦一篇、禮部爲考試之式、獨學士李溥不肯曰、俾誰字有數、因人成事、使再衣白袍入貢部、下第必矣。洪邁の貢院詩にも、慚愧紛紛白袍子とある。

【題義】 此詩も熙寧五年八月十五夜、杭州の州宅で作つたものである。丁度、此の時、杭州に、進士の考較(試験)があつたが、(宋時定制、放榜在中秋日、以後詩考之、是年八月十七日始出榜、故公有催試官之作) 八月十八日は、觀濤の時期であるから、夜を日に繼ぎて、考試を濟ませ、諸試官と愉快に觀潮をなさうと試官を促したものである。私事を以て公事を促したから、戲作の二字を以てことわる。紀昀いふ、此何等大典、乃以竣事遊眺促之、立言殊不得體、雖題有戲字、其實戲字已先錯と。

【詩意】 八月十五夜は、月色隨處に好し、茅葺の家と、市樓とを擇ばない。我が杭州の官居は蓬萊島に似た仙境である。殊に鳳味堂前の野橋は香しく、劍潭橋畔の秋荷は老いたのである。(鳳味堂も、劍潭橋も、皆、杭州府廳の佳境で、州宅と相違つて居る。) 八月十八潮の壯觀は、天下に比がない。(方輿

勝覽に據ると、杭州の海潮は、毎日晝夜、再び上る。常に、月の十日、二十五日は、最も小。月の三日、十七日は、極めて大。小なるときは、漸く漲りて、數尺に過ぎない。大なるときは、濤の湧くと、高さ數丈に至る。毎年八月十八日には、遠くは數百里から士女が來つて、集り觀る。此時、舟人漁子は、濤に浜り、浪に觸る、之を迎潮といふさうである。) かの莊子にある鯢魚が鵬に化して、南溟に徙るとき、翼を以て、水を擊つこと三千里、(此日の潮勢をいふ) 又、かの左傳に見ゆる楚の子重が吳を伐ちたる時、組甲被練の十萬の精兵を率ゐて、長驅したるも、此の潮の如くであつたらう。紅の旗や、青い蓋は、弄潮人のいでたちの派手な狀で、それが潮の進退高低によつて、見えつ隠れつするのである。潮の打ち來るときは、白浪を捲き、潮が退く時は、黒い沙を捲き去る。即ち相呑むが如く、相屠るがやうに見える。人生の會合は、古より難いとする所、まして此の壯絶の景、此の集合は、容易に得られない。之を聞かれたなら、蠟燭を添へて、終夜、考試の業を執り、速に其の事を畢へて、遊覽に出掛けるが宜しからう。門外には、白袍の舉子等が早く試みられたしとて首を伸ばして待つて居る。(舉子は、皆、白麻を服す、故に白袍といふ。鶴の字は、白袍を狀し、又、首を伸ばして居るとの意をも含めるのであらう。)

八月十七日復登望海樓自和前篇是日榜出

與試官兩人復留五首

古今勝詩 八月十七日復登望海樓自和前篇是日榜出與試官兩人復留五首

八月十七日復た望海樓に登り、自ら前篇に和す、是日榜出づ、試官兩人と復た五首を留む

樓上烟雲怪不來。樓上烟雲來らざるを怪しむ、

樓前飛紙落成堆。樓前飛紙落ちて堆を成す。「看るべし、

非關文字須重看。文字に關するにあらざるも須く重く

却被江山未放回。却て江山に未だ放回せざるを被る。

如飛、惟比宋二詩不下、移時一紙飛墜、乃沈詩也。

【題義】再び望海樓に登り、試官兩人と韻語をなしたのであるが、詩中、往往寓意がある。といふのは、當時、新學が盛に行はれて、去取必ず東坡の意の如からざるものがあつた爲めであらう。紀昀いふ本色得好と。

【詩意】樓上は烟雲の來ないことを怪しむ。それは樓前に飛紙が落ちて堆い爲めであらう。唐の中宗が昆明池に幸し、羣臣に詩を作らしめ、其の中から一篇を選んで新曲を爲らうとしたとき、須臾にして紙の落ちること、飛ぶが如く、ただ沈・宋（沈佺期と宋之問）の二詩のみが下らなかつた。時を移して一紙が飛び墜ちた。乃ち沈佺期の詩であつたといふ。今は文字に關するのではないが、江山も一文章である。須らく其の江山に放回されないことを重く看るべきであらうかと思ふ。

眼昏燭暗細行斜。眼昏く燭暗く細行斜なり、

考閱精強外已誇。考閱精強外已に誇る。

明日失杯君莫怪。明日杯を失ふ君怪しむ莫れ、

早知安足不成蛇。早く安足を知らば蛇を成さず。

【字解】「不成蛇」戰國策に、陳轅曰、楚有詞者、賜其舍人卮酒、舍人相謂曰、蓋地爲蛇、先成者飲酒、一人蛇先成、引酒且飲曰、吾能爲之足、未成、一人之蛇成、奪其尾曰、蛇固無尾、子安能爲之足。

【詩意】眼昏く、燭も暗くて、細行の文字が斜めである。（後句の秋花不見と同意。）たとひ擧子の程文（試験の答案）を考閱することが精強であつても、外已に誇の色を見はしたならば、蛇を畫いて足を加へるの類となる。かくて明日杯を失ふ（酒を飲むことが出来ない意）のも、當然である。即ち早く安足を知らば、蛇の畫が出来ないのである。（此詩は戰國策にある蛇固無尾、子安能爲之足に據つて説をなしたのである。）

亂山遮曉擁千層。亂山曉を遮りて千層を擁し、

睡美初涼撼不響。睡美にして初涼撼かすも響へず。

昨夜酒行君屢歎。昨夜酒行りて君屢歎す、

定知歸夢到吳興。定めて知る歸夢の吳興に到るを。

【字解】「千層」方千の詩に、積翠千層一運間。「撼」ゆすり動かす意、韓退之の詩に、蛇蟄撼大樹。「響」言にて應ずる意、呼欲響の類。「吳興」今の浙江吳興縣。

【詩意】亂山千層を擁して居るので、夜の明けることが遅い。初涼睡眠快くしてゆり動かすも應じない。昨夜、酒が行つたときも、君はたびたび歎息された。定めし故山の吳興に歸るを夢みたことであらうと推察する。

天台桂子爲誰香。

天台の桂子は誰が爲に香し、

倦聽空階點夜涼。

聴くに倦みて空階夜涼に點す。

頼有明朝看潮在。

頼ひに明朝看潮の在るあり、

萬人空巷鬪新粧。

萬人空巷に新粧を鬪はす。

中、天台桂子落十餘日、方止云云と見ゆ。

【字解】一、天台 山の名、今の浙江天台縣の北に在る。古より飛仙の居る所と稱す。二、桂子 かつらの實、宋之問の詩に、桂子月中落。白樂天の詩に、天台桂子落紛紛。また、陸龜蒙の詩の註に、唐の垂拱

【詩意】天台山は飛仙の居る所、其山の桂の實は、誰が爲に香ばしいのであるか。桂子の香しいのを聴くに倦みて、空階夜涼に點した。幸に明朝は觀潮の時期であるから、人出は定めし多かるべく、萬人は空巷に新粧を鬪はすことであらう。

秋花不見眼花紅。

秋花見ず眼花紅なり、

身在孤舟兀兀中。

身は孤舟兀兀の中にあり。

【字解】一、眼花 醉眼がちらついて、昏花を生ずるをいふ。杜甫の飲中八仙歌に、眼花落井水底眠。

細雨作寒知有意。

細雨寒を作す意あるを知る、

未教金菊出蒿蓬。

未だ金菊をして蒿蓬を出でしめず。

【二】金菊 屢隱の詩に、采采黃金花、何由滿衣袖。【三】蒿蓬 卑賤に喩ふ、李白の詩に、我輩豈是蓬蒿人。

【詩意】試院中に在つては、秋花をば見ることが出来なく、但眼花の紅なるを見るのみである。(眼花は、醉眼の昏花を生ずることである。)此の身は孤舟兀兀(動かない貌)の中にある。細雨が降つて寒さを催す。未だ金菊をして蒿蓬を出でしめない。(王安石新學の盛行は、東坡の意の如くならないものが多い。故に金菊蒿蓬の感があるのであらう。)

秋懷 二首

秋懷 二首

苦熱念西風常恐來無時。

苦熱西風を念ふ、常に恐る來るに時なきを。

及茲遂淒凜又作徂年悲。

茲に及び遂に淒凜、又徂年の悲を作す。

蟋蟀鳴我牀黃葉投我幃。

蟋蟀我が牀に鳴き、黃葉我が幃に投す。

牕前有棲鵬夜嘯如狐狸。

牕前棲鵬あり、夜嘯狐狸の如し。

露冷梧葉脫孤眠無安枝。

露冷にして梧葉脱し、孤眠安枝なし。

熠燿亦有偶高屋飛相追。

熠燿亦偶あり、高屋飛んで相追ふ。

定知無幾見、迫此清霜期。 定めて知る幾くも見るなきを、此の清霜の期に迫る。

物化逝不留、我興爲嗟咨。 物化逝いて留らず、我興ちて爲に嗟咨す。

便當勤秉燭、爲樂戒暮遲。 便ち當に勤めて燭を秉るべし、樂を爲すこと暮遲を戒む。

【字解】【一】 西風、秋の風、李白の詩に、八月西風起。五行説にては、秋を西に配する。【二】 凄涼、きびしく寒い、陸游の詩に、霜降已凄涼。【三】 蟋蟀、今のこほろぎ。詩の唐風に、蟋蟀在堂、歲聿其莫。きりぎりす、こほろぎの稱、古今相反す。【四】 車帳、(垂布の類)。【五】 漢書、賈誼傳に、置爲長沙王傅、有屬入舍、止於坐隅、屬、不詳鳥也。【六】 無安枝、曹操の樂府に、月明星稀、烏鵲南飛、遙樹三匝、無枝可依。【七】 燭、蠟燭、蠟のこと。詩、東山に、燭燭宵行。註にいふ、燭燭、螢火也。李陵の詩に、晨風吹北林、燭燭東南飛。因にいふ、即照夜光、燭燭、皆螢である。燭燭は、螢火の蟲、飛んで光ある貌。故に燭燭、燭也といふ。【八】 無幾見、詩に、無幾相見。【九】 清霜、杜子美の螢火詩に、十月清霜重、風零何處歸。【一〇】 物化、萬物變化の理をいふ。莊子、齊物論に、此之謂物化。【一一】 我興、詩に、我興視夜。【一二】 秉燭、古詩に、晝短苦夜長、何不秉燭遊。

【題義】 此の二首も熙寧五年八月の作である。秋懷を述べたものであるが、眞意は時事に及んだものである。唐宋詩醇の評に、前作感憤、後作乃導其冲和、起乎悲、止乎樂、蓋猶是優游卒歲之旨とある。【詩意】 夏季には、秋風を待ちわびて、常に秋の來る時はまだかと口癖のやうに言つたが、さて秋になると、却つて又、寂しい。其上に、月日も早く徂去る。かくては百年の歲月も、幾ばくもなからうと流年を悲しむのである。(紀昀いふ、流年遲暮之感、妙不寫、只以物化烘托而出。) 蟋蟀は我が牀の下に鳴いて居り、黄葉は我が垂布に投ずる。牀前には棲鵬がある。鵬は惡鳥であつて、夜嘯

くこと狐の如く狸の如くである。露冷にして梧葉(桐の葉)が脱し、狐眠の鵬は、其の身を安んずる枝は無い。(此は栖むこと其の所にあらざるをいふ。梧桐は鳳凰の栖む所である) 螢にも亦、偶(友の義)がある。高屋に飛んで相追ふ。併し螢は時を得たさまで、友を求めて高屋上に飛び廻はつて居るも、此の清霜の期に迫つたから、幾もたたなく、見えなくなるであらう。即ちやがて死ぬであらう。萬物は皆、かやうに變化して行き、少しも留まらない。我等も、ゆくゆくは、此の如くなるであらうと、我は興き之が爲に嗟した。(此句は起の徂年悲の句に應じて、其の意を終へる。) 時節は右のやうに、速に移り易はるものであるから、暮遲(暮年といふに同じ)となつても、致し方がない。時に及んで、勤めて蠟燭を取つて、夜にかけて樂しむべきである。(此詩は時事と離れない。蟋蟀・棲鵬・燭燭の三物は、小人に比す。即ち此の衰世に方り、世を濟ふべき賢者を渴望したが、其の出て事を執る人を見ると、衆望に叶はないで、却て天下を誤る虞がある。(暗に王安石を指す) まして、羣小人は競ひ出て、時に乗じて、勢を逞しくするも、(呂惠卿以下の小人を指す) 此輩は久しからずして當に自滅すること、かの燭燭や、蟋蟀の如くであらうと思ふ。)

海風東南來、吹盡三日雨。 海風東南より來り、吹き盡す三日の雨。

空塔有餘滴、似與幽人語。 空塔餘滴あり、幽人と語るに似たり。

念我平生歡、寂寞守環堵。 念ふ我が平生の歡、寂寞として環堵を守る。

壺漿慰作勞。裹飯救寒苦。

壺漿作勞を慰め、飯を裹みて寒苦を救ふ。

今年秋應熟。過從飽雞黍。

今年秋應に熟すべし、過從雞黍に飽かん。

嗟我獨何求。萬里涉江浦。

嗟我獨り何を求めん、萬里江浦を渉る。

居貧豈無食。自不安吠畝。

居貧なるも豈に食無からんや、自ら吠畝に安んぜず。

念此坐達晨。殘燈翳復吐。

此を念ひて坐して晨に達す、殘燈翳ひ復た吐く。

【字解】 一 海風東南來。李白の詩に、海風吹不斷。二 空塔。何遜の詩に、夜雨滴空塔、滴入愁人耳。三 幽人。晏
に、幽人自吉。四 環堵。環は周廻、長一丈四方を堵となす。一丈面環。張翥の詩に、環堵自環堵。杜子美の詩に、車馬入
家、蓬蒿翳環堵。禮記、儒行篇に、儒有「一畝之宮、環堵之室。淮南子に、環堵之室、笑之以生茅。韓詩外傳に、原憲居環堵之室、
夫以蓬蒿。五 壺漿慰作勞。作勞を一本に、我勞に作る。壺は瓶。漿は飲料、米汁で作る。醜の類。陶淵明の詩に、壺漿勞
近聞。晉書、載記に、作勞耳鳴、非不詳微也。揚惲の書に、田家作苦、斗酒相勞。尙書に、不昏作勞。六 裹飯救寒苦。
莊子、大宗師篇に、裹飯而往食之。七 我獨何求。詩に、不知我者、謂我何求。八 坐達晨。潘安仁が懷舊賦に、展長歎
以達晨。九 殘燈翳復吐。杜子美の詩に、曳雲蒙清曉、初日翳復吐。

【詩意】 海風が東南から吹いて来て、三日の雨を吹き盡してしまった。空塔の餘滴が幽人と語るやう
である。(二篇は、此の句から生じ来り、極めて奇警である。古詩の夜雨滴空塔、滴入愁人耳より
脱化したるは言ふまでもないが、更に新意を出して居る。紀昀いふ、平語卻極奇幻と。)さて首を回
して郷里に在った時の平生の樂みをいふと、寂寞として環堵の室を守つて居た。(方一丈を堵となし、

四方が各一堵の小室である。儒者には環堵の室といひ、佛者には方丈の室といふも、要するに同じく
小室を意味する。)東坡の心持を推していふと、我は郷里にあつて、儒家に生れ、儒業を守つて居たが、
今から思ふと、それが無上の樂みであつた。故郷に居た時は、鄰里の人が酒漿を壺に入れて送り來
り、田を作る辛勞を慰めてくれたり、飯を裹んで送りくれたりした。今歳は何處も豊作であるから、
故郷では、定めし、あちこちへ往來して雞黍などの御馳走で飽食することであらう。今我は何を求め
る爲に、かやうに江浦の險を涉つて、此の萬里の遠方に来つたのであるぞ。郷里に居るなら、貧家で
はあるが、食物のないのではない。但、自ら吠畝の中に安んじて、農作を爲すことが厭やであつたか
ら、仕官をなしたのである。(紀昀いふ、亦人不肯道語)今日から思へば、愧かしくも、悔ゆること
である。此が爲に眠ることも出來ずに、坐して晨に達するのである。無情の殘燈までが暗くなつたり、
又、明るくなつたりして、吾が心事を諒としてくれるやうに感ずる。(雨滴を友とするに、筆を起し、
殘燈を友とするに筆を收む。)

哭歐陽公孤山僧惠思示小詩次韻

歐陽公を哭す、孤山の僧惠思小詩を示され、韻に次す

故人已爲土。衰鬢亦驚秋。

故人已に土となり、衰鬢も亦秋に驚く。

猶喜孤山下。相逢說舊遊。

猶は喜ぶ孤山下、相逢うて舊遊を説くを。

【字解】 孤山 杭州園經に、孤山去錢塘治四里。 已爲土 莊子、在宥篇に、上見光而下爲土。 舊遊 惠

【題義】 熙寧五年九月、歐陽修の訃音を聞いて、孤山の惠勳の室に哭し、文を爲つて之を祭つた。(餘論を參照) 歐陽公年譜に、熙寧辛亥六月、以觀文殿學士太子少師致仕、七月歸穎、明年壬子閏七月、年六十六と見えて居る。

【詩意】 故人は已に死して土に化した。我が衰鬢も亦、秋に驚いて無情を感ずる。併し、孤山の下、(其地は即ち寶雲菴である。)相逢うて舊遊を談ずるのは、まことに喜ばしいことである。

【餘論】 東坡が哀を孤山に擧げて、歐陽文忠公を祭つた文は、本集、祭文の冠である。其文に曰く、嗚呼哀哉、公之生於世、六十有六年、民有父母、國有耆龜、斯文有傳、學者有師、君子有所恃而不恐、小人有所畏而不爲、譬如大川喬嶽、不見其運動、而功利之及於物者、蓋不可計而周知、今公之沒也、赤子無所仰、朝廷無所稽疑、斯文化爲異端、而學者至於用夷、君子以爲無爲爲善、而小人沛然自以爲得時、譬如深淵大澤、龍亡而虎逝、則變怪雜出舞輪歸而號、狐狸、昔其未用也、天下以爲病、而其既用也、則又以爲遲、及其其釋位而去也、莫不冀其復用、至其請老而歸也、莫不憫恨失望、而猶庶幾於萬一者、幸公之未衰、孰謂公無復有意於斯世也、奄一去而莫予追、豈服世濁濁、潔身而逝乎、將民之無祿而天莫之遺、昔我先君、懷寶遁世、非公則莫能致、而不肖無狀、因緣出入、受教於門下者、十三有六年於茲、聞公之喪、義當匍

匍往弔、而懷祿不去、愧古人以忸怩、緘詞千里、以寓一哀而已矣、蓋上以爲天下、而下以哭其私、

梵天寺見僧守詮小詩清婉可愛次韻

梵天寺僧守詮の小詩を見る、清婉愛す可し、次韻

但聞烟外鐘不見烟中寺。

但烟外の鐘を聞き、烟中の寺を見ず。

幽人行未已草露溼芒屨。

幽人行いて未だ已まず、草露芒屨を溼はす。

惟應山頭月夜夜照來去。

惟應に山頭の月、夜夜來去を照すべし。

【字解】 梵天寺 杭州園經に、梵天寺在鳳凰山。臨安志に、梵天寺、乾德中、錢氏建、舊名南塔、治平中改今額。 幽人 世を避けて居る人。周易の履卦に、履道坦坦、幽人貞吉。

【題義】 冷齋夜話(宋の釋惠洪著す)に、東吳の僧守詮は、佯狂垢汚、而して詩語清婉である。嘗て一詩を湖上山寺の壁に落日寒蟬鳴、獨歸林下寺、柴扉尙未掩、山月隨行屨、時聞犬吠聲、更入青蘿去と書いた。東坡は此の詩を一見して之に和したのが此詩である。

【詩意】 但烟外の鐘を聞くのみで、烟中の寺を見ない。幽人は行くこと未だ已まずして草露が芒屨(わらわづ)を溼す。(王文誥いふ、此種句調、猶之盤筵中、間以小食、雖亦適口、然非一飽物也云云)ただ山頭の月だけが、夜夜、來去を照らすことであらう。

【餘論】紀昀いふ、莊老告退、山水方滋、晉・宋以還。清音遂暢、授以風雅之本旨、正如六經而外別出三元談、亦自一種不可磨滅之文字、後人轉相神聖、遂欲截斷衆流、專標此種爲「正法眼藏」(釋尊が靈山會上にあつた時、一語をも説かないで、ただ梵天の捧げた金波羅華を拈した。大衆は皆、嗟然として居つたが、摩訶迦葉一人は、其の意を了して、破顔微笑した。釋尊よりて迦葉に宣はく、我に正法眼藏、涅槃妙心あり、今、汝に附與すべしと。釋尊が自ら大悟得了し給へる甚深秘密の悟境を正法眼藏といふ。)然則三百以下、漢魏以前、作者豈盡俗格哉、東坡之喜此詩、蓋亦偶思螺蛤之意。談彼法者、勿以藉口と。按するに、禪家にては、東坡の溪聲便是廣長舌、山色不離清淨身の二語を取つて、以て道を見ると爲す。然れども、其の梵天寺五古の色相ともに空にして、已に上乘に臻るには若かない。其の成佛は當に靈運の下に在らざるべしと思ふのである。

和沈立之留別二首 沈立之留別に和す 二首

而今父老千行淚 而今父老千行の淚

一似當時去越時 一に當時越を去る時に似たり

不用鐫碑頌遺愛 用ひず碑に鐫りて遺愛を頌すること

丈人清德畏人知 丈人の清徳は人の知らんことを畏る

【字解】(一) 沈立之 沈立、字は立之、歷陽の人。三朝に歴事し、自首一節、儲書數萬卷に至る。神宗藏する所を問ふ、立、其の目及び著す所の名山水記三百卷を上る。臨安志に、熙寧三年十二月、趙鼎自杭徙知青州、是月庚申、和州人沈立自越移杭、五年壬子立除書官西院、和州人陳襄來代。(二) 而今 論語、泰伯篇に、而今而後、吾知免夫、小子。(三) 遺愛 古

人仁愛の後世に遺る意、左傳、昭公二十二年に、及子產卒、仲尼聞之、出涕曰、古之遺愛也。(四) 丈人 長老の稱、晏、師針に、師貞、丈人吉。

【題義】此詩は熙寧五年八月の作、沈立之が審官院に除せられて杭州を去るとき、詩を留めて別を爲したのである。

【詩意】今、父老が君の爲に千行の涙を垂れるのは、全く越州を去りし當時に似て居る。併し、君の遺愛を碑に鐫つて之を頌するのは無用である。すべて丈人の清徳は、人の知らんことを畏れるからである。(昔、晉の胡威(字は伯武、淮南の人)は、其父質と俱に清慎を以て聞えた。世祖(武帝)威に謂つて曰く、卿の清は、父に孰與れぞ。對へて曰く、臣不如也、臣父清畏人知、臣清畏人不知と。)

臥聞鐫鼓送歸艗 臥して鐫鼓の歸艗を送るを聞き、

夢裏忽忽共一觴 夢裏忽忽として一觴を共にす。

試問別來愁幾許 試みに問ふ別來愁へ幾許ぞ、

春江萬斛若爲量 春江萬斛若爲ぞ量られん。

【字解】(一) 臥聞 馬載の詩に、山鐘可臥聞。(二) 鐫鼓 鐫は小鉦、晉書の宋顯傳に、具威儀、鳴鐫鼓造焉。(三) 歸艗 艗は吳の大舟の名。謝玄暉の辭隋王、艗に、唯待春江可望、候歸艗於春浦。

【詩意】鐫や太鼓を鳴らして歸艗を送るのを臥ながら聞いて居る。(此れ即景の語)夢裏忽忽として一

觴(酒杯)を共にしたが、試に問ふ、一別以來、愁へ幾許ぞ。愁思の深いことは、春江の水よりも過ぎて居る。(李後主が詞にも、問君都有幾多愁、恰似一江春水向東流とある。東坡が自註に、去時予在試院とある。沈立之が初めて去つた時は、未だ送別することを得なかつた。併しながら、猶ほ夢裡に於て、共に一觴を傾けたのである。如今、別後の愁恨は、豈、春江萬斛の比量すべきであらうやといふ意味である。)

和陳述古拒霜花

陳述古が拒霜花に和す

千株掃作一番黃

千株掃ひ作す一番の黃

只有芙蓉獨自芳

只芙蓉の獨自芳しきあり

喚作拒霜知未稱

喚びて拒霜と作す知る未だ稱はず

細思却是最宜霜

細思すれば却つて是れ最も霜に宜し

【字解】(一)陳述古 陳襄字は述古、文惠公雍佐の長子。慶歷二年、進士及第。熙寧中、知制誥に除せらる。青苗法の不便を論じ、是れ商鞅の術と、王安石・呂惠卿を駁して以て天下に謝せんことを望む。王安石に忌まれ、數月ならずして、出でて

陳州に知たり、未だ期ならずして、改めて杭州に移る。述古、官に莅み、至る所必ず務めて學校を興す。學者稱して古靈先生となす。【一】香 陸龜蒙の詩に、幾點社翁雨、一番花信風。【二】芙蓉 爾雅の疏に、江東人呼芙蓉爲芙蓉。【三】拒霜 本草に、芙蓉、一名拒霜、藍如荷花、八九月始開、故名拒霜。【題義】古靈先生集(二十五卷ある)に、中和堂木芙蓉盛開、戲呈子瞻詩がある。此詩は之に和したのである。原唱の末二句は、容易便開三百朵、此心應不長秋霜といふのである。此詩は則ち更に一層を進めて、以て述古の斥けられて、名愈重きに比するのである。【詩意】秋風が千株を掃ひ去つて、草木が一番の黄色を呈した。只、芙蓉の獨自芳しきあるのみ。拒霜と喚び作すも、命名の適當しないのを覺ゆる。細思すれば、却て是れ最も霜に宜しいのである。(紀昀いふ、用意頗爲深曲、查初白以淺譏之、似乎未喻其旨と。)

次韻孔文仲推官見贈

孔文仲推官贈らるるに次韻す

我本麋鹿性諒非伏轅姿

我は本麋鹿の性、諒に轅に伏するの姿にあらず

君如汗血馬作駒已權奇

君は汗血の馬の如し、駒と作つて已に權奇

齊驅大道中竝帶鑾鑣馳

齊しく大道の中を驅り、竝に鑾鑣を帯びて馳す

聞聲自決驟那復受繫維

聲を聞いて自ら決驟す、那ぞ復繫維を受けん

謂君朝發燕秣楚日未歛

謂ふ君朝に燕を發し、楚に秣うて日未だ歛かず

云何中道止連蹇驢隨

云何ぞ中道にして止まん、連蹇驢隨ふ

金鞍冒翠錦玉勒垂青絲

金鞍翠錦を冒ひ、玉勒青絲を垂る

旁觀信美矣自揣良厭之

旁觀は信に美なり、自ら揣るに良に之を厭ふ

均爲人所勞何必陋鹽輜

均しく人に勞せらる、何ぞ必しも鹽輜を陋とせん

君看立仗馬不敢鳴且窺。
 調習困鞭箠僅存骨與皮。
 人生各有志此論我久持。
 他人聞定笑聊與吾子期。
 空齋臥積雨病骨煩撐支。
 秋草上垣牆霜葉鳴堦墀。
 門前自無客敢作揚雄麾。
 候吏報君來弭節江之湄。
 一對高人談稍忘俗吏卑。
 今朝枉詩句粲如鳳來儀。
 上山絕梯磴墮海迷津涯。
 憐我枯槁質借潤生華滋。
 肯效世俗人洗刮求瘕瘕。
 賢明日登用清廟歌緝熙。

君看立仗に立つの馬、敢て鳴き且つ窺はず。
 調習鞭箠に困み、僅に骨と皮とを存す。
 人生各志あり、此の論我久しく持す。
 他人聞かば定ず笑はん、聊か吾子と期す。
 空齋積雨に臥し、病骨撐支を煩す。
 秋草垣牆に上り、霜葉堦墀に鳴く。
 門前自ら客なし、敢て揚雄の麾きを作さんや。
 候吏君の來るを報ず、節を弭む江の湄。
 一たび高人に對して談じ、稍俗吏の卑きを忘る。
 今朝詩句を枉げ、粲として鳳の來儀するが如し。
 山上上りて梯磴を絶ち、海に墮ちて津涯に迷ふ。
 憐む我枯槁の質、潤を借りて華滋を生ず。
 肯て效はんや世俗の人、洗刮瘕瘕を求むるに。
 賢明日に登用し、清廟緝熙を歌ふ。

胡不學長卿預作封禪詞

胡不學長卿を學んで、預め封禪の詞を作らざる。

【字解】 孔文仲 字は經父、新喻の人。進士に擧げられ、台州推官を歴。熙寧の初、范鎮、制舉に薦む、對策萬言、新法を力論し、王安石に怒られ、罷めて故官に歸る。【一】 推官 唐の官名。節度・觀察兩使の僚屬。其の後、諸州皆置く。宋、其の制に沿ふ。【二】 樂風 鄒野に嘯ふ、朱熹の送郭拱辰序に、宛然樂風之姿、林野之性。【三】 伏犧 史記、魏其武安傳に、今日延論、周促效、轍下駒。漢書、灌夫傳、武帝怒曰、周促效、轍下駒。【四】 汗血馬 血の如き汗を出す駿馬。前漢書、大宛傳に、宛別邑七十餘城、多善馬汗血。言其先天馬子也。【五】 推奇 詭計に同じ。顏延年の赭白馬賦に、雄志側僥情、推奇兮。前漢書、禮樂志に、志傲僥情、推奇。【六】 繼 繼は天子の馬車の衝に著けた鈴。鐘は馬衝。詩の秦風に、駟車繼繼。【七】 決驥 疾走する、莊子、齊物論に、樂見之決驥。【八】 繁維 つなぐ、詩、小雅、白駒に、繫之維之。【九】 朝雲 燕云云。顏延年、赭白馬の賦に、且朝雲、晝發、荆楚。李白、天馬歌に、鐘鳴刷、燕晴林、越、神行電邁、騁、俊逸。【一〇】 連雲 連雲 困み難みて進まざる驥。鐘は、うさぎ馬、驥は、らば、買直の賦に、騁、駕龍牛、馳、蹇、蹇、兮。揚雄の反駁に、騁、驅連雲而奔、足。【一一】 金鞍 買直の賦に、杜子美の驄馬行に、赤汗微生白雪毛、銀鞍卻覆香羅帽。高都護の驄馬行に、青絲絡頭爲君老。僊簡文帝の紫駟詩に、青羅隱玉鞍。庚信の馬射賦に、控玉勒、而搖星、跨金鞍、而動月。【一二】 寶鞍 寶鞍の形、屈原賦に、騁、垂、兩耳、伏、蹇、車、兮。李太白の天馬歌に、崔東園車上、被鞍。戰國策に、汗明見春申君曰、夫騁之齒至矣、服蹇車而上太行、流汗漉地、白汗交流、中阪遙延、負轅而不能上、伯樂遺之、下車扳而哭之、騁於是而俯而嘖、仰而鳴、見伯樂之知己也。【一三】 立仗馬 唐書、李林甫傳に、居相位、凡十九年、固寵市權、蔽欺天子耳目、諫官無敢言者、補闕杜陵上書言政事、斥爲下邳令、因以語動其餘曰、君等獨不見立仗馬乎、終日無聲而食三品芻豆、一鳴則黜之矣。【一四】 調習 詩、秦風、馴駟の疏に、調習車馬之事。【一五】 此論我久持 漢書、儒林傳に、仲舒善持論。【一六】 揚雄 揚子に、在夷詔則引之、倚門牆則應之。【一七】 弭節 離騷に、吾令羲和弭節兮、望崦嵫而勿迫。班彪の北征賦に、釋余馬於彭陽兮、日弭節而息思。爾雅に、水草交爲湄。【一八】 俗吏卑 漢書、倪寬傳に、非魯吏所及。【一九】 絕梯磴 盧仝の詩に、皇天不爲臣立梯磴。【二〇】 清廟 生華滋、後漢、郭伋傳に、帝勞之曰、買能太守。

古今體詩 次韻孔文仲推官見贈

帝城不遠、河潤九里、冀京師鼓鑿之福也。莊子、列禦寇寓於、河潤九里、澤及三族。古詩に、綠葉發華滋。【三】求之既得、後漢、趙壹の賦に、所好則饋皮出、其毛羽、所惡則洗垢求其糞。【三】賢明日登用、文選、聖主得賢臣、頌に、有賢明之臣。【三】清廟歌、維清、詩、清廟、文王を祀るなり。維清、象舞を奏するなり。維清、維清、文王之典。詩、大雅、穆穆文王、於緝熙敬止。【三】胡不學、長卿、云云、史記、司馬相如傳に、相如病甚、天子使所忠往、而相如已死、家無書、問其妻、曰、長卿未死時、爲一卷書、曰、有使者來求書、奏之、其遺札書言封禪事、忠奏其書、天子異之云云。

【題義】此詩も熙寧五年九月の作。東坡の杭を過ぎて唱和したは、正に文仲の擧を罷めて、復、台州推官に還つた時である。但、年月を推すと、文仲が台州から再び罷めて杭州に至つた時であつて、罷めて台州に還つた時ではない。東坡と文仲とは、同じく范景仁（范鎮字は景仁、兩たび翰林に入り、四たび貢擧を知る。卒して忠文と諡す。）に薦められ、竝に外に斥けられた。此詩を作つたのは、此關係である。

【詩意】我は本、麋鹿のやうな鄙野の性で、まことに、局促として輓に伏するの姿ではない。君は大宛汗血の馬のやうで、駒の時から既に奇計がある。齊しく大道の中を驅つて竝に鑾鑾を帯びて馳せ、聲を聞いて疾走した。（以上、我本麋鹿性を説く）何ぞ復、束縛を受けやうぞ。君は朝に燕の地を出發し、南の方楚に秣つても、日が未だ傾かないといひ、何ぞ途中で止まうぞといはれる。其れで驢馬の如き驢馬の如き我も、足を難みつ附き隨うたのである。黄金の鞍に翠錦を置き、玉の勒に青絲を垂れる。外貌は傍から觀てもまことに美しい。併し我は心窃に之を厭ふのである。均しく人に役せられるからには、何ぞ必しも鹽車（良馬が驛馬と同じく鹽を運ぶ車を曳かされるを鹽車の憾といふ。）

を陋とはしない。君看よ儀仗に立てる馬を、終日鳴きもしないし窺ひもしない。調習や鞭箠に苦しんで、僅に骨と皮とを存するのみである。人生各志がある。我は久しく此論を持して居るが、他人が聞かば、必ず笑ふであらう。聊か吾子と期する。長雨で空齋に臥し、病骨を支へて居る。秋草は垣牆に上り、紅葉は塔墀（墀は石を敷ける庭）に鳴いて居る。門前に客がなくても、揚雄に真似て之を招かうともしない。候吏が君の來れるを報らせたから節を江の涘に弭めた次第である。（此句に據るも、文仲は確に台州より杭州に至るから、節を江の涘に弭めたのである）一たび高人に對して談じたので、俗吏の卑きを忘れたのである。今朝は枉げて詩句を賜はる、榮として鳳凰の來儀するがやうである。我は山に上つて梯磴を絶ち、海に墮ちて津涯に迷ふに異ならない。憐むべきは我が枯槁の質であるが、幸にも河潤九里、君の餘澤を蒙むるを喜ぶ。肯て世俗の人が洗刮して瘡痕を求めぬに效はない。賢明が日に登用されて清廟緝熙（緝は明、熙は廣、光が明かなる貌）を歌ふ。胡ぞ司馬長卿を學んで、預め封禪の詞を作つて置かないか。

朱壽昌郎中少不知母所在刺血寫經求之五

十年去歲得之蜀中以詩賀之

朱壽昌郎中、少うして母の所在を知らず、血を刺し經を寫し、之を求むること五十年、去歲之を蜀中に得、詩を以て之を賀す

古今體詩 朱壽昌郎中少不知母所在刺血寫經求之五十年以詩賀之

嗟君七歲知念母。
憐君壯大心愈苦。
羨君臨老得相逢。
喜極無言淚如雨。
不羨白衣作三公。
不愛白日昇青天。
愛君五十著綵服。
兒啼却得償當年。
烹龍爲炙玉爲酒。
鶴髮初生千萬壽。
金花詔書錦作囊。
白藤肩輿簾盛繡。
感君離合我酸辛。
此事今無古或聞。

嗟君七歳母を念ふを知る、
憐む君が壯大心愈々苦きを。
羨む君が老に臨んで相逢ふを得るを、
喜び極まりて言なく涙雨の如し。
羨まず白衣三公となるを、
愛せず白日青天に昇るを。
愛す君が五十綵服を著け、
兒啼して却て當年を償ふを得るを。
龍を烹て炙となし玉を酒となす、
鶴髮初て生ず千萬壽。
金花詔書錦もて囊を作る、
白藤肩輿簾は盛繡。
君が離合に感じて我は酸辛す、
此事今は無し古或は聞く。

【字解】(一) 朱壽昌字は康叔、三歳の時、父は母劉氏を出し、母子相知らざること五十年。温公日錄に、壽昌以同母弟妹在同州、乃折衷列河中、故詩以長陵爲比。(二) 金剛經をいふ。(三) 得相逢、白樂天の詩に、誰知臨老相逢日。(四) 淚如雨、魏武帝の詩に、枕淚淚如雨。(五) 白衣作三公、白衣は無位無官の人、未だ仕官しない人は白衣を著る。史記儒林傳序に、公孫弘、以春秋、白衣爲天下三公。漢代の三公は、大司徒、大司馬、大司空。又、荀爽白衣作三公。布衣より起り、九十五日にして三公に至る。(六) 白日昇青天、史記、始皇本紀註に、茅故曾祖父蒙於華山之中、乘雲駕龍白日昇天。(七) 綵服、列士傳に、老萊子、年七十著五色斑斕之衣、戲舞於庭、爲小兒啼、以悅親。(八) 鶴髮、白髮をいふ、庾信が竹杖賦に、鶴髮難皮、蓬頭歷齒。(九) 千萬壽、蔡邕の表に、上千萬壽。(一〇) 白藤肩輿云云、宋史、輿服志に、白藤輿、金剛轎車、内外命婦通乘。(一一) 酸辛、阮籍が詩に、悵悵酸辛。(一二) 長陵、長陵、漢書、外戚傳に、王太后、武帝母也、徵時生女在民間、武帝車駕自往迎之、在長陵小市、直至其門、家人驚恐、女逃匿、扶將出拜、帝下車立曰、大姊何藏之深也、載至長樂宮、與俱歸太后。場來は、洪武正韻に、翰、事來也。發語の辭、韓愈の詩に、場來岐山下、日暮邊鴻吹。

長陵場來見大姊。
仲孺豈意逢將軍。
開皇苦桃空記面。
建中天子終不見。
西河郡守誰復譏。
穎谷封人羞自薦。

長陵場來大姊を見る、
仲孺豈將軍に逢ふを意はんや。
開皇の苦桃空しく面を記す、
建中の天子終に見ず。
西河の郡守誰か復譏らん、
穎谷の封人は自ら薦むるを羞づ。

兒啼、以悅親。(一) 鶴髮、白髮をいふ、庾信が竹杖賦に、鶴髮難皮、蓬頭歷齒。(二) 千萬壽、蔡邕の表に、上千萬壽。(三) 白藤肩輿云云、宋史、輿服志に、白藤輿、金剛轎車、内外命婦通乘。(四) 酸辛、阮籍が詩に、悵悵酸辛。(五) 長陵、長陵、漢書、外戚傳に、王太后、武帝母也、徵時生女在民間、武帝車駕自往迎之、在長陵小市、直至其門、家人驚恐、女逃匿、扶將出拜、帝下車立曰、大姊何藏之深也、載至長樂宮、與俱歸太后。場來は、洪武正韻に、翰、事來也。發語の辭、韓愈の詩に、場來岐山下、日暮邊鴻吹。

【題義】此の詩は、熙寧五年九月の作。朱壽昌が母を尋ねるために、官を棄てて、四方に行き、終に之を陝州に得、迎へて歸り養つたことを美めたのである。詩中に、此事今無古或聞と言つたのは、壽昌の母を愛するやうにした。左傳、隱公元年に見ゆ。

王太后、武帝母也、徵時生女在民間、武帝車駕自往迎之、在長陵小市、直至其門、家人驚恐、女逃匿、扶將出拜、帝下車立曰、大姊何藏之深也、載至長樂宮、與俱歸太后。場來は、洪武正韻に、翰、事來也。發語の辭、韓愈の詩に、場來岐山下、日暮邊鴻吹。

昌を褒めて李定を貶したのである。李定は、母の喪に服しない。壽昌は、官を棄てて母を求めた。此の二人が朝を同うし、王安石は李定に左祖し、却て壽昌を忌む傾向があつたので、東坡は西河郡守誰復讞と言つた。其の意は、獨李定を刺るのみでなく、亦以て深く王安石を罪したのである。

【詩意】 ああ君は、七歳の時分から、母子相知らないことが五十年、常に母を慕つて已まなかつた。一旦決然官を罷めて四方に母を尋ね、遂に廻り逢つたので、喜び極まつて涙が雨の如きも、尤もなことである。君の心を推すと、無位・無官から一躍して三公となるのも羨ましくない。又、神仙の術を得て、白日雲に乗り、青天に昇ることも、別に愛しない。老萊子が七十の老年になつて身に五色斑斕の衣を服し、嬰兒の戯を親の前に爲し、落ちて地に臥し兒啼を爲したといふのが君の満足する所であつたらう。母子相逢うて、龍を炙りものとし、玉を酒とし、白髮千萬壽。(仙人の壽を保つをいふ)ここに、長安の大尹錢明逸は、朝に上表して、朱某向棄官尋母、今既得之馮朝一矣、宜還舊秩、以勸激天下と。其の秋、朱壽昌は、太夫人に侍して都に入つたが、上は嘉賞し、特に召見して其の官を復し、其母を長安縣太君に封じたといふことである。金花詔書、錦もて囊を作り、白藤肩輿、簾は盛飾とは此の事を言ひ表はしたものである。人生の聚散には常がない。君の離合に感じて、我は酸辛する。(壽昌の事を敘するは、此に至つて畢る。以下、東坡の本意に入る。)さて、王安石は李定を薦めて臺官とした。李定は母の喪に服しなかつたので、臺諫の人人に其の不孝用ふべからざるを論せられた。東坡も此詩によつて李定を貶したのである。昔、漢の武帝は骨肉の親に厚かつた。母太後の微な

るとき生んだ異腹の姉が長陵小市に住んで居ると聞いて、親ら之を迎へた。又、同じく漢の霍去病の父仲孺は縣吏であつたが、平陽侯の侍者と私通して去病を生んだ。父子相聞しなかつたのを、去病が將軍となつて匈奴を撃つとき、平陽に至つて之を迎へた。仲孺は我子ながら、今は赫赫たる將軍である。之に逢ふことを思はなかつたであらう。隋の開皇の初、呂永吉といふものが、自分の姑は苦桃といふ名で、楊廣(隋の煬帝)の妻であると稱したから、勘驗して、之を追贈した。建中の天子徳宗も、母沈氏の所在を失ひ、使臣をして天下に周行せしめた。子の親に於ける至情は、高きも卑きも變りはない。然るに、西河郡守吳起が母歿するも、終に歸らなかつたことを今は譲らないのは遺憾である。(西河の郡守は、吳起を借りて、李定を指したのである。)かかる世には、穎考叔のやうな純孝の人が自ら薦めて出るを羞ぢるであらう。朱壽昌は世と名を争ふことを欲しないから、河中を乞うて去るのである。

湯村開運鹽河中督役

居官不任事 蕭散羨長卿 官に居て事に任せず、蕭散長卿を羨む。

胡不歸去來 滯留愧淵明 胡ぞ歸らざる、滯留淵明に愧づ。

鹽事星火急 誰能郵農耕 鹽事星火急なり、誰か能く農耕を郵まん。

萋萋曉鼓動 萬指羅溝坑 萋萋曉鼓動き、萬指溝坑に羅る。

天雨助官政。汝然淋衣纓。
 人如鴨與猪。投泥相濺驚。
 下馬荒隄上。四顧但湖泓。
 線路不容足。又與牛羊爭。
 歸田雖賤辱。豈失泥中行。
 寄語故山友。慎毋厭藜羹。

天雨官政を助け、汝然として衣纓に淋ぐ。
 人は鴨と猪との如く、泥に投じて相濺驚す、
 馬を下る荒隄の上、四顧但湖泓。
 線路足を容れず、又牛羊と争ふ。
 田に歸る賤辱と雖も、豈泥中の行を失はんや。
 語を寄す故山の友、慎みて藜羹を厭ふことなかれ。

【字解】 湯村 九域志に、仁和縣有湯村其一也。咸淳臨安志に、河通湯鎮諸山巖門鹽場、東坡嘗於此督役開河。
 【一】 蕭散 蕭散といふに同じ、しづかひま、唐書、裴度傳に、治第東都、野服蕭散。司馬相如の賦に、意思蕭散、不復與外事。
 相國。【二】 星火急 李密の陳情表に、急於星火。【三】 藜羹 おほき藜。詩經に、韋新羽蓋藜兮。【四】 澆坑 林寬が昔雨の詩
 に、窮巷變澆坑。【五】 汝然 禮記、檀弓篇に、孔子汝然流涕。【六】 泥中行 詩經に、胡爲乎泥中。【七】 藜羹 あかさのあつ
 もの、莊子、蘆玉篇に、孔子窮於陳蔡之間、七日不火食、藜藿不糲云云。糲は米粒がないこと。陶淵明が貧士の詩に、弊糲不糲
 肘、藜藿常乏糲。

【題義】 此詩も熙寧五年、十月の作である。故山の友は、藜羹を厭ひて仕官せんことを思ふことなか
 れと言ひて、朝廷の運鹽河を開くの不當であり、又、農事を妨げることを諷諷す。紀昀いふ、天雨句
 拙滯、人如句太俚と。王文誥いふ、其文如經、其筆如史と。
 【詩意】 官に居て事に任じなく、意思蕭散と言つた司馬相如を羨ましく思ふ。(長卿は相如の字) 胡

歸らないか、ぐづぐづと滯留して居るのは、歸去來の辭を作つて故園に歸つた陶淵明に愧ぢる。新法
 の一なる開運鹽事の監督は、星火よりも急である。(宋史の食貨志に據ると、熙寧五年以盧秉提舉兩
 浙鹽事、竈戶益困、惟杭・越・湖三州格新法不行、發運司劾奏虧課、皆獄治云云) 誰か能く農耕を
 妨むものぞ。農事を妨げる事などは一向思はないで、どんどんと太鼓を打つて人民を召集し、之を驅
 つて鹽河の事に従はしめる。萬指が溝坑に羅る。其の中には天雨が汝然として流れ、衣や纓(冠系)
 に淋ぐ。人は鴨の如く、又、猪(豬の俗字)の如くに泥に投じて相濺驚する。(此の四句は、下の四句
 と兩層に分つ。上四句は役をいひ、下四句は督役をいふ。皆雨中の實事である) 余も亦、馬から下り
 て荒堤の上に立つて四方を眺めると、一面に湖となり泓となつて、線路は足を容れることも出来ない。
 その上、また、牛羊と争ふのである。(王文誥いふ、一路敍雨中督役固妙矣、其下一轉入結、可稱
 絶倒と) 歸田は賤辱であるとしても、泥中に行いて耕すことは失はない。
 【餘論】 是時、盧秉は、鹽事開運河に提舉であつた。提舉は管理の義である。(宋代に提舉常平倉、提舉
 水利、提舉茶鹽等の官は、皆、監督官である) 運河を開くに、人夫千餘人を役する。東坡は大雨中に、
 其の河を部役したのである。ただ般鹽は既に農事でなくて、農民を役する。秋田が未だ了了ならぬのに、
 民を招くは、農事を妨げる。又、其の河中には往往湧沙があつて數里に達する。それで、東坡は、運
 河は開き得るも不便といふ。又、自ら泥雨勞苦を嗟き、司馬長卿が居官而不任事を羨み、又、陶
 淵明のやうに、早く官を棄てて歸り去らないのを妬むた。農事が未だ休まないで、人夫を役する千餘

人。故にいふ、鹽事星火急、誰能郵農耕一と。又、百姓已に勞苦す、意はざるに、天雨が又、官政を助け、民を勞せしめる。かくて百姓も疲弊する。勞役する人の泥水中に在つて辛苦するは、鴨と猪とに異ならない。東坡自身も亦泥中に在つて、牛羊と路を争つて行くのである。もし、歸田せば、かかる苦勞はなからう。故にいふ、寄言故山友、慎勿服藜藿一と。

是日宿水陸寺、寄北山清順僧二首

是の日水陸寺に宿して、北山の清順僧に寄する二首

草没河堤雨暗村。

草河堤を没して雨村に暗く、

寺藏修竹不知門。

寺は修竹に藏れて門を知らず。

拾薪煮藥憐僧病。

薪を拾ひ藥を煮て僧病を憐み、

掃地焚香淨客魂。

地を掃ひ香を焚いて客魂を淨うす。

農事未休侵小雪。

農事未だ休せず小雪を侵し、

佛燈初上報黃昏。

佛燈初て上つて黃昏を報す。

年來漸識幽居味。

年來漸く識る幽居の味を、

思與高人對榻論。

高人と榻を對して論せんことを思ふ。

【字解】(一) 水陸寺 清湖橋に在り、今は廢す。臨安志に、自太平橋北前沙河一至臨平上塘條下、有水陸院、東坡嘗開湯運河、宿此。

(二) 清順 西湖の僧清順、字は顯然、清苦にして、佳句多し。嘗て詩を賦していふ、久服林下遊、頗識林下趣、從藥錄陰案、不礙清風度、閑來石上眠、落葉不知數、一鳥忽飛來、啼破幽絕處と。王荆公湖上に遊んで之を受し、東坡も亦、與に

遊んで唱和多し。【三】拾薪煮藥 後漢書、承宮傳に、爲諸生拾薪。温庭筠の詩に、煮藥石泉清。【四】掃地焚香 國史補に、韋應物、性高潔、鮮食葷、所在焚香掃地而坐。【五】對榻 韋應物の詩に、對榻遇清夜。

【題義】此詩は熙寧五年十月の作。詩中に農事未休侵小雪の句があるのを見ても、十月であることが知れる。鹽河の工事を雨中に督促し、夜、水陸寺に宿し、懷を北山の清順に寄せたのである。

【詩意】草は河堤を没し、雨は一村を籠める。我が宿した水陸寺は、竹林に藏れて、門も知れない。薪を拾ひ、藥を煮て、寺僧の病を憐み、地を掃ひ、香を焚いて、我が旅魂を淨うした。農事は未だ休まず、小雪を侵して働いて居る。佛前に燈が照せられて、黃昏になつたことが分る。年來漸く幽谷の味が解つたから、高人(清順を指す)と榻(狭く長く低い牀)を對して高談したいと思ふ。(前六句は、東坡自ら道ひ、後の二句は清順に入る。)

長嫌鐘鼓聒湖山。

長も鐘鼓の湖山に聒しきを嫌ふ、

此境蕭條却自然。

此境蕭條として却て自然なり。爲し、

乞食遠村眞爲飽。

食を乞ひて村を遠り眞に飽くことを言なくして客に對す本禪にあらす。

無言對客本非禪。

言なくして客に對す本禪にあらす。

披榛覓路衝泥入。

榛を披いて路を覓め泥を衝いて入り、

洗足關門聽雨眠。

足を洗うて門を關し雨を聽いて眠る。

【字解】(一) 蕭條 深靜の貌、班固の燕然山の銘に、蕭條萬里、野無遺寇。(二) 自然 老子に、道法自然。(三) 乞食 晉陶淵明に乞食詩がある。(四) 披榛 抱朴子に、葛洪、貧無僮僕、蓬蒿傾決、披榛出門、排草入室。(五) 窮買鳥 唐書、賈島字浪仙、初爲浮

遙想後身窮賈島。遙に想ふ後身の窮賈島、
夜寒應響作詩肩。夜寒うして應に詩を作る肩を響かす。

「べきを。」
層、名無木。韓退之に、遊無本層。范陽の詩がある。【七】變作詩肩。韓退之の詩、石鼎聯句の序に、彌明袖手煉肩而高吟。

【詩意】余は平生、鐘や太鼓の湖山に聒しいのを嫌つて居る。此境は深静で寂しいが、却て自然である。村を逸つて食を乞ふので、空腹を感じない。客に對して無言で居ても、禪を學んで居る譯でもない。貧くて僮僕がないから、榛（雜木の茂れるもの）を披いて路を免め（さがし求める意、竟は俗字）泥を衝いて入る。足を洗つて門を關ざし、雨の音を聽いて眠る。（王文誥いふ、題云是日、必當有雪此二句、方是真境、即乞食無言一聯語中、有骨竝不平也。）遙に想ふ、窮賈島の後身ともいふべき北山の清順僧が、寒い夜、肩を響かして高吟して居られることを。

鹽官部役戲呈同事兼寄述古

鹽官部役戲れに同事に呈し、兼て述古に寄す

新月照水水欲冰。新月水を照して水氷らんと欲し、
夜霜穿屋衣生稜。夜霜屋を穿ちて衣に稜を生ず。
野廬半與牛羊共。野廬半は牛羊と共にし、
曉鼓却隨鴉鵲興。曉鼓却て鴉鵲に隨つて興く。

【字解】【一】鹽官。鹽官縣圖經にいふ、縣管六鄉、隋、開皇九年、置杭州鹽官縣、縣屬有鹽場十所。臨安志に、漢志但有海鹽縣、晉宋志乃有海鹽、鹽官兩縣。鹽官の置は、當に吳の時に在るべし。吳王濞、海

夜來履破裘穿縫。夜來履破れ裘縫を穿つ、
紅頰曲眉應入夢。紅頰曲眉應に夢に入るべし。
千夫在野口如林。千夫野に在り口は林の如し、
豈不懷歸畏嘲弄。豈歸るを懷はざらんや嘲弄を畏る。
我州賢將知人勞。我州の賢將は人の勞するを知る、
已釀白酒買豚羔。已に白酒を釀し豚羔を買ふ。
耐寒努力歸不遠。寒に耐て努力せよ歸ること遠からず、
兩脚凍硬須公軟。兩脚凍硬せば須らく公軟かにすべし。

を煮て鹽を爲るは、此地である。【二】野廬。田舎のいへ。同じく東坡の詩に、老覺華堂無意味、卻思時到野人廬。【三】曉鼓。曙鼓といふに同じ、曉を報する太鼓の音。【四】穿縫。穿は穴があくこと、後漢書、耿恭傳に、衣履穿決。【五】紅頰曲眉。李太白の詩に、上馬啼紅頰。韓退之の文に、曲眉而豐頰。【六】豈不懷歸。詩、小雅に、豈不懷歸。長此簡書。簡書は兵事の命令を

【七】賢將。漢書、韓信傳に、項王不能任屬賢將。同じく嚴延年の註に、謂郡守爲郡將者、以其兼統武事也。杭州は節鎮を帯び、所部六州、京口に至つて止む。【八】白酒。禮記に、酒清白とあるは、酒に清酒と白酒とあるをいふ。梁武帝の詩に、玉盤著朱李、金杯盛白酒。【九】兩脚凍硬云云。唐、楊國忠の傳に、帝歲幸華清宮、諸楊湯沐館在宮東垣、帝臨幸、必獨五家、賞資不貲計、出有賜曰餽路、返有勞曰軟脚。大曆雜記に、子儀自同州歸、代宗詔大臣就宅作軟脚云云。

【題義】此詩は、熙寧五年十月、東坡が部役されて、鹽官に至つたとき、戲れに同事のものに呈し、兼て陳襄（字は述古、學者稱して古靈先生といふこと、前に見ゆ。）に寄せたのである。

【詩意】新月が水を照して水が氷らうとする。夜霜が屋を穿つて衣も堅くなる。（夜色の寒烈をいふ。）

田舎の家に居て半は牛や羊と共にし、曉を告げる太鼓を聞くも、却て鴉や鵲に随つて興さる。(王文誥いふ、二句極鍊的、是開河官語) 夜來、履は破れ、裘も縫目に穴があく。紅頬曲眉の人も、應に夢に入るであらう。(王文誥いふ、接得挺拔) 千夫野に在りて口は林の如くである。それで、故郷に歸りたいと懐はないでもないが、此等の人の嘲弄を畏れるから、少しも口には出さない。我州の賢明な太守は、人の苦勞するを察して同情がある。既に白酒を醸して、豚や羔(小羊)を買つて振舞つてくれた。努力して寒氣に耐へよ。最早、故郷に歸ることも遠くはあるまい。そして兩脚が凍硬したならば、公は須らく軟にするであらう。(紀昀いふ、題有戲字、不嫌滑稽、然不應如此之鄙。)

鹽官絕句 四首 鹽官絕句 四首

南寺千佛閣 南寺千佛閣

古邑居民半海濤 古邑居民半は海濤、
師來構築便能高 師來つて構築して便能高く高し。
千金用盡身無事 千金用ひ盡して身事なく、
坐看香煙繞白毫 坐して香煙の白毫を繞るを見る。

章於靈山會上、爲諸大衆、說二十八品、放眉間白毫相、光照三千大千世界。

【字解】(一) 千佛閣 臨安志に、慶善寺在鹽官縣西南二百步、天監七年、土人安靈度、因井中有光三日不止、捨宅爲寺、地濱海、遂以觀海無名、祥符元年改今額、有千佛閣。(二) 千金用盡 李太白の詩に、千金散盡還復來。(三) 白毫佛の額にある毛、光を發して無量の國土を照らすといふ。法華經に、世

【題義】四首ともに熙寧五年十月の作、慶善寺千佛閣に登つたときの感想である。紀昀いふ、四首皆不脱宋調と。

【詩意】古邑の居民、半は海濤に在つたが、師(僧居則を指す)來つて構築して、居處が高くなつたのである。千金も用ひ盡して身も軽く、安坐して香煙の白毫を繞つて居るを見るのみである。

北寺悟空禪師塔 北寺悟空禪師の塔

已將世界等微塵 已に世界を將つて微塵に等うす、
空裏浮花夢裏身 空裏の浮花夢裏の身。
豈爲龍顏更分別 豈龍顏の爲に更に分別せんや、
只應天眼識天人 只應に天眼天人を識るべし。

【字解】(一) 悟空禪師 釋齊安、姓李氏、悟空と號す、唐宣宗悼安國寺悟空禪師碑在鹽官縣。東坡の自註に、名齊安、宣宗徵時、師知其非凡人。(二) 塔 悟空塔、鹽官縣に、安國寺在縣西北、寺中有悟塔、塔前有古楡存焉。(三) 微塵 法華經に、三千大千世界抹爲微塵。(四) 空裏浮花 華嚴經に、如目擊人見空中花。圓覺經に、譬彼病目見空中花。(五) 龍顏 前漢書、高祖爲人除幸而龍顏。(六) 天眼 五眼の一、天人が禪定を修して得たる眼。五眼とは、肉眼・天眼・法眼・慧眼・佛眼をいふ。(七) 天人 三國志に、曹植曰、眞天人也。

【詩意】悟空禪師は已に世界を將つて微塵に等しうして居る。空裏の浮花の如く、又夢裏の此身は、龍顏の爲に更に分別しようぞ。只應に天眼の通力(神通力)によつて、天人を識るべきである。

塔前古檜

塔前の古檜

當年雙檜是雙童。

當年の雙檜は是れ雙童、

相對無言老更恭。

相對して言なく老いて更に恭し。

庭雪到腰埋不死。

庭雪腰に到つて埋むれども死せず、

如今化作兩蒼龍。

如今化して兩蒼龍と作れり。

【詩意】鹽官の安國寺にある悟空禪師の塔前には、古檜がある。當年の雙檜は是れ雙童である。傳燈錄に據ると、神光といふ僧、達摩大士の少林に住すと聞いて乃ち往く。晨夕參承、天大に雪ふるも、光は堅立して動かなくつたが、積雪膝を過ぎたといふことである。此詩は其の意を借り用いたのである。只今は化して兩蒼龍となつた。(紀昀いふ、此竟無起無收、作二絕句、非莊非戲、非幻非真、却不爲佳、第二句尤屬と。)

【字解】(一) 塔前古檜 石林燕

景錄に、悟空禪師塔前檜、亦唐物、徽宗詔取之、檜大不可越、橋、乃以大舟泛海、出楚州、以入汴、行一日、颶風猛、檜枝與帆低昂不可制、舟與人皆沒。此事宣和年間で、移したのは朱勳といふ人。

僧爽白雞

僧爽の白雞

斷尾雄雞本畏烹。

斷尾の雄雞本烹らるるを畏る、

年來聽法伴修行。

年來法を聽いて修行に伴ふ。

還須却置蓮花漏。

還須らく却て蓮花漏を置くべし、

【字解】(一) 白雞 東坡の白註に、養二十餘年、嘗在坐側、雞經胸際居いふ、學道之士居山、宜養白犬、白雞、可引辟邪。梅聖俞詩に、譚庭鳴白雞、韻道歌黃鶴。(二) 斷尾 左傳、昭公二十二年に、

老怯風霜恐不鳴。

老いて風霜を怯るれば恐くは鳴かじ。

蓮花漏 惠遠法師、山中に在つて蓮花漏を置き、其の早晚を記して以て行道の節となす。翻譯名義に、盧山遠公門有僧慧要者、患山中無剎漏、乃於水上立十二葉芙蓉、因波輪、以定十二時、尋覺無差。

【詩意】昔、賓孟といふもの、或日、郊邊へ適きたるとき、雄雞が自ら其尾を断ち切るを見、何故ぞと侍者に問ふ。侍者は答へて、是ぞ雄雞が犠牲となりて殺されるのを厭ふが爲に候といつたさうである。斷尾の雄雞は、本、烹られるのを畏れる。道を學ぶ士は、白雞を養つて邪を避ける故に、白雞は年來、法を聽いて修行に伴ふのである。併し還須らく却て蓮花漏を置くべきである。なせならば、老いて風霜を怯るれば恐らくは鳴かないであらう。(紀昀いふ、結寓意と。王文誥いふ、此用山中畜雞應更而鳴事。)

賓孟、郊、見雄雞自断其尾、問之侍者曰、自憚其犧也。

六和寺沖師開山溪爲水軒

六和寺の沖師山溪を開して水軒と爲す

欲放清溪自在流。

清溪を放て自在に流めんと欲するも、

忍教冰雪落沙洲。

冰雪をして沙洲に落しむるに忍びんや。

出山定被江潮流。

山を出づれば定めて江潮に流されん、

能爲山僧更少留。

能く山僧の爲に更に少く留まれ。

【字解】(一) 六和寺 六和塔は浙江杭州南高峰の下に在る。其地には、舊、六和寺があつたから、六和塔といふ。太平興國中、寺名を開化寺と改めたが、塔の名は今に改まらな

【題義】 此時も熙寧五年十月の作。山溪を開して水軒となすは、在山水清の意から出たのである。
 【詩意】 清い谷間の水を放つて自在に流れしめやうとするも、この潔い氷雪をして沙洲に落ちしめるに忍びない。山を出づれば定めて江湖に流されやう。(流とは泥などの物に著く意から起る) 能く山僧の爲に更に少く留まれ。(王文誥いふ、二句、従我如「此水千山底、自爲「翻按、可見其游行自在也。)

冬至日獨遊吉祥寺

冬至の日、獨吉祥寺に遊ぶ

井底微陽回未回。

井底の微陽回るや未だ回らずや、

蕭蕭寒雨溼枯蓼。

蕭蕭たる寒雨枯蓼を溼す。

何人更似蘇夫子。

何人か更に蘇夫子に似たる、

不是花時肯獨來。

是れ花時ならざるも肯て獨來る。

【題義】 熙寧五年十一月の冬至に、獨で吉祥寺に遊んだ時の作である。吉祥寺には牡丹があるから、花時ならざるも言つたのである。紀昀いふ、率筆而極有風致一と。

【詩意】 冬至は、一陽來復、陰曆十月の極陰が、十一月に至つて始めて來復する謂である。其の冬至となつて、井底の微陽が回るや、未だ回らずや、蕭蕭として(物寂しく)寒雨が枯れた草の根を溼は

す。何人か更に此の蘇夫子に似たるものぞ。即ち花の時節でもないのに、花の名所に來るのである。
 【餘論】 吉祥寺は牡丹の名所。同じく東坡が吉祥寺の花の時に、仙衣不用剪刀裁、國色初酣卯酒來、太守問花花有語、爲君零落爲君開。又、東坡が杭州に在つて、陳述古に約し、同じく吉祥寺の牡丹を賞しやうとするとき、花將に落ちんとして、述古に至らず。東坡は詩を作つて、今歲東風巧剪裁、含情只待使君來、對花無信花應恨、直恐明年便不開といふと、述古之を開いて、明日即ち來つたといふことである。

後十餘日復至

東君意淺著寒梅。

東君意淺く寒梅を著く、

千朵深紅未暇栽。

千朵深紅未だ栽うるに暇あらず。

安得道人殷七七。

安んぞ道人殷七七を得、

不論時節把花開。

時節を論せず花を把つて開かしめん。

七七に謂つて曰く、鶴林の花は、天下の奇絶なり。嘗て聞く能く非時の花を開かしむと、今、重九將に近かんとす。能く此花を開いて此日に副はんや否や。七七之を語し、乃ち前二日に鶴林に往いて宿す。中夜に女子來り、七七に謂つて曰く、妾は上元に命ぜられ、此花を司りて人間に在り、此花、今道者と之を開かしめん。然れども久しきにあらすして闌苑に歸せんと。女子倏然として見え、九日にして爛漫たること春の如し。其の後、兵火、寺を焚き、樹は根株を失ふといふ。

【字解】 【一】 東君 屈原の九歌

に、東君篇あり。東王父とも、東王公

ともいふ。青陽の氣、萬物の先とい

ふ意より出づ。 【二】 殷七七 字は

文祥、周寶舊之を識る。移つて浙西

を鎮するに及んで、七七忽ち到る。

鶴林寺の杜鵑花高さ丈餘、實、一日

【題義】冬至の後、十餘日を経て、東坡は復、吉祥寺に至り遊ぶ。紀昀いふ、此却無味と。
 【詩意】東君（春をいふ）は心が浅くして、ただ意を梅花に著けるのみである。従つて千朶（朶は花の枝）の深紅を未だ裁うるに暇がない。（千朶深紅は、吉祥寺の牡丹をいふ）どうか道人殿七七を得て、時節に拘はらず、花を把つて開かしたいものである。（言ひ換へれば、一陽が初めて動いて、東君の消息は、纔に寒梅に到つた。未だ千朶の牡丹を培出するに暇がないから、道人の術で牡丹を開かしたいといふのである。）

戲贈

戲れに贈る

惆悵沙河十里春。

惆悵す沙河十里の春、

一番花老一番新。

一番花老いて一番新なり。

小橋依舊斜陽裏。

小橋舊に依る斜陽の裏、

不見樓中垂手人。

見ず樓中手を垂るるの人を。

善點社翁雨、一番花信風。【一】垂手人 古樂府に、舞有大垂手小垂手。梁の吳均の曲に垂手怨道追、飛燕掌中嬌。また、且復小垂手、廣袖拂紅塵。

【題義】戲れに人に贈つた詩であるが、作つた時が分らない。王文誥いふ、舊在前卷望海樓晚景、沙河燈火照山紅句下、與題不合、今改載於此。又、紀昀は、此詩を評して、晚唐窠臼といつた。

窠臼といふのは、常を踏み故を襲ふの謂である。もと鳥の巢のことで、形が臼に似たるより窠臼といふ。
 【詩意】沙河十里の春色は人を惱まして痛み怨ましめる。一度は花老い、一度は新である。小橋はもとの儘に、斜陽（日暮）の中にあるが、樓中手を垂れる舞人を見ない。

和人求筆迹

人の筆迹を求むるに和す

麥光鋪几淨無瑕。

麥光几に鋪いて淨うして瑕なし、

入夜青燈照眼花。

夜に入つて青燈眼花を照す。

從此刻藤眞可弔。

此より刻藤眞に弔すべし、

半紵春蚓縮秋地。

半は春蚓を紵ひ秋地を縮ぬ。

飲中八仙歌に、知章騎馬似乘船、眼花落井水底眠。【一】刻藤眞可弔 刻藤で紙を作る、唐書に、元興作弔刻藤文、今之世、錯爲文者、皆妖閻刻藤之流也。

【題義】人が詩を寄せて筆迹を求められたから、之に和したのである。作つた時は分らない。末の二句は、眼花の二字より生出したのである。

【詩意】紙は案に鋪いて、淨うして瑕がない。夜に入つて、燈の青い光は、眼花を照らして居る。かくて筆を染めると刻藤の紙こそ眞に憐むべきである。半は春の蚓のやうに、行く時は體を引きて而る

後に伸びるやうな字が書かれ、又、秋の蛇のやうにうねうねして匍匐する形も出来る。(昔、唐の太宗が蕭子雲の書を論じて、行行若^レ紫^ニ春^ニ蚓^一、字字如^レ縮^ニ秋^ニ蛇^一と言つたさうだが、これは、骨力の無いことを諷つたのである。紆は紫と同じく、まとふ意。縮はつかねまとふ意である。)

將之湖州戲贈莘老

將に湖州に之かんとし、戲れに莘老に贈る

餘杭自是山水窟

餘杭は自らは是れ山水の窟

仄聞吳興更清絕

仄に聞く吳興は更に清絶と

湖中橋林新著霜

湖中の橋林新に霜を著け、

溪上茗花正浮雪

溪上の茗花正に雪を浮ぶ

願渚茶芽白於齒

願渚の茶芽は齒よりも白く、

梅溪木瓜紅勝頰

梅溪の木瓜は紅頰に勝れり

吳兒膾縷薄欲飛

吳兒の膾縷薄うして飛ばんと欲す、

未去先說饑涎垂

未だ去らざるに先づ説けば饑涎垂る

亦知謝公到郡久

亦知る謝公郡に到ることの久しきを、

應怪杜牧尋春遲

應に怪むべし杜牧春を尋ぬるの遅きを、

【字解】(一)餘杭 縣の名、明

清時代には浙江杭州府に屬したが、

今は浙江錢塘道に屬す。(二)吳興

今の浙江、吳興縣。(三)清絶 陸

雲興兄弟書、實自清絶。(四)湖中橋

林 石林避暑錄に、吳中橋、惟東西

二山最盛矣。吳備志に、橋出洞庭、

宋時、洞庭山屬吳興。(五)願渚

元和郡縣志に、願渚山、貞元以後、

每歲以紫筍茶進奉。(六)梅溪

吳興統記に、梅溪一名東海堰、在

烏程縣西南六十里。(七)木瓜

和名オケ、花は紅白の二種ある。願

渚泉上に木瓜堂あり、其の庭除に木

鬢絲只可對禪榻

鬢絲只可し禪榻に對するに、

湖亭不用張水嬉

湖亭用ひず水嬉を張るを

紙を以て花を鑲して上に貼し、

漢水を以て之に澀さ、日に曬して乃ち紅なり。

【一】吳兒膾縷薄欲飛 吳興志に、唐、吳昭德、吳興人、善造鑲、時人嘲之曰、

若遇吳、鑲細花鋪。【二】願渚 美味を見て流す涎。陸游の詩、

願渚茶芽白於齒。【三】湖中橋 晉の謝安傳に、嘗爲吳興太守。願渚公嘗謝公禪除に、

太保謝公嘗、咸和中、以吳興山水清遠、求與此郡。【四】清絶 杜牧が宣城の幕に佐であつた時、湖州に寄贈多しと聞き、往いて之に遊ぶ。刺史崔元克は水嬉を張り、州人をして畢く觀しめ、杜牧をして之を聞せしむ。因つて一女姝を見、之に期して曰く、吾十年ならずして來つて此郡を守らん。來らずんば適く所に從かすと。牧、湖州に守たるに及び、女已に人に從ふこと三年。牧因つて詩を賦して曰く、自是尋春去較遲、不須惆悵恨芳時。【五】鬢絲云云 杜牧が題禪院詩に、

紙を以て花を鑲して上に貼し、漢水を以て之に澀さ、日に曬して乃ち紅なり。

【六】梅溪 吳興統記に、梅溪一名東海堰、在烏程縣西南六十里。

【七】木瓜 和名オケ、花は紅白の二種ある。願渚泉上に木瓜堂あり、其の庭除に木

鬢絲只可對禪榻

鬢絲只可し禪榻に對するに、

湖亭不用張水嬉

湖亭用ひず水嬉を張るを

紙を以て花を鑲して上に貼し、

漢水を以て之に澀さ、日に曬して乃ち紅なり。

【一】吳兒膾縷薄欲飛 吳興志に、唐、吳昭德、吳興人、善造鑲、時人嘲之曰、

若遇吳、鑲細花鋪。【二】願渚 美味を見て流す涎。陸游の詩、

願渚茶芽白於齒。【三】湖中橋 晉の謝安傳に、嘗爲吳興太守。願渚公嘗謝公禪除に、

太保謝公嘗、咸和中、以吳興山水清遠、求與此郡。【四】清絶 杜牧が宣城の幕に佐であつた時、湖州に寄贈多しと聞き、往いて之に遊ぶ。刺史崔元克は水嬉を張り、州人をして畢く觀しめ、杜牧をして之を聞せしむ。因つて一女姝を見、之に期して曰く、吾十年ならずして來つて此郡を守らん。來らずんば適く所に從かすと。牧、湖州に守たるに及び、女已に人に從ふこと三年。牧因つて詩を賦して曰く、自是尋春去較遲、不須惆悵恨芳時。【五】鬢絲云云 杜牧が題禪院詩に、

紙を以て花を鑲して上に貼し、漢水を以て之に澀さ、日に曬して乃ち紅なり。

【六】梅溪 吳興統記に、梅溪一名東海堰、在烏程縣西南六十里。

【七】木瓜 和名オケ、花は紅白の二種ある。願渚泉上に木瓜堂あり、其の庭除に木

【題義】孫覺(字は莘老)が湖州に知となつた時、松江隄が常に民患をなすといふので、之を改築することになつた。時の漕使は、東坡に檄して孫莘老の設計を見にやつたから、東坡は湖州に至つた。此時は其時の作である。

【詩意】餘杭の地は、自らは是れ山水の窟である。聞けば吳興の地は更に清絶であるとか。湖中の橋林は、新に霜を著け、溪上の茗花(あしの花)は、正に雪を浮べて居る。(茗溪は一名を茗水ともいふ。東苕・西苕の二源は、吳興城中に至り、兩溪が相合して一となつて太湖に入る。岸を夾んで茗花が多く、秋時、水上に飄散すること、恰も飛雪のやうであるといふ。)願渚には多く茶を産して歲貢に充て

る。又、梅溪の木瓜は色が好くて美人の頬に勝つて居る。吳兒の造つた鱸膾は、薄くして飛散せんとする。未だ行かない先きに涎が出る。晉の謝安が此の郡に至ることを求めたのも尤ものことと思ふ。牡牧が春を尋ねることの遅いのは、應に怪しむべきである。鬢絲茶烟の感といふことがある。それは少年の頃に、嬉遊に耽つたものが、老いて淡泊な生活に餘生を送るをいふ。鬢絲は（老人を指す）禪榻（禪牀に同じ、坐禪を組む腰掛）に對するのが相應しい。奇麗を慕ひて、湖亭に水嬉を張るなどのことは、全く無用である。

鴉種麥行

鴉種麥行

霜林老鴉閒無用。
霜林老鴉閒にして用なし、
哇東拾麥哇西種。
哇東麥を拾ひ哇西に種う。
哇西種得青猗猗。
哇西種を得て青うして猗猗、
哇東已作牛尾稀。
哇東已に牛尾の稀なるを作す。
明年麥熟芒攢槩。
明年麥熟して芒は槩を攢む、
農夫未食鴉先啄。
農夫未だ食はずして鴉先づ啄む。
徐行俯仰若自矜。
徐行俯仰自ら矜るが若し、

【字解】【一】猗猗。美しく盛な
韻、詩の極風に、綠竹猗猗。【二】
攢槩。ほこさきをあつめる。攢槩と
同じ、顧延年の文に、慣々成林。
【三】鼓翅跳跟。鼓翅は羽ばたきす
る、鼓翼、鼓輪といふに同じ、跳跟は
莊子、秋水篇に、跳跟乎井幹之上。
又、晉書、諸葛長民傳に、腹中驚起
跳跟、如與人相打。跳跟といふに
同じ。【四】歷山。山東歷城縣の南
に在る。一名、舜耕山。山の上に舜

鼓翅跳跟上牛角。

鼓翅跳跟牛角に上る。

憶昔舜耕歷山鳥

憶ふ昔舜歴山に耕し鳥爲に耘る、

爲耘。

如今老鴉種麥更

如今老鴉麥を種るて更に辛勤。

辛勤。

農夫羅拜鴉飛起。

農夫は羅拜し鴉は飛起す、

勸農使者來行水。

農を勸むる使者來りて水を行る。

唐は開元十二年に、勸農使を置いて、郡邑を巡按し、戶口を安撫す。景徳三年には、詔して諸道の轉運使・副使・開封府知府及び諸道の知州・刺史・少卿監以上は、並に勸農使を兼ね。其餘の知州・知事・通判等、並に勸農事を兼ねしむ。天禧四年に、諸路の提點刑獄を改めて、勸農使副となす。

【題義】此詩も、熙寧五年十二月、湖州へ赴く道中の作である。王文誥いふ、起四句純乎古意、有以此

一起、則後幅觸手都成奇語と。

【詩意】霜林の老鴉は、閒で用がないと見え、哇の東で麥を拾つて哇の西に之を種うる。哇の西に種ゑ得て青うして美しい。そして哇の東は既に牛尾のやうに稀になつた。(牛毛といへば多きに喩ふ、北史に學者如牛毛、成者如麟角。杜甫の詩に、秦時任商鞅、法令如牛毛。) 明年になると、芒(麥芒、

麥實のさきの針の如き毛をいふ。は恰も粟を攪めたやうである。農夫が未だ食はないうちに、鴉が先づ啄んでしまふ。徐行したり、俯仰したりして自ら矜るやうである。羽撃き跳ね廻つて、牛角にさへ上る。憶ふ昔、舜帝が山東の歷山に耕したとき、象は之が爲に耕し、鳥は之が爲に耘つたといふことである。今は老鴉、麥を種ゑて更に辛き勤めをする。農夫が羅拜すると、鴉は飛び起つ。そして農を勤める使者が來つて、耕水を行つて視察をする。

送張軒民寺丞赴省試

張軒民寺丞省試に赴くを送る

龍飛甲子盡豪英

龍飛の甲子盡く豪英、

嘗喜吾猶及老成

嘗て喜ぶ吾猶ほ老成に及ぶを。

人競春蘭笑秋菊

人は春蘭を競ひて秋菊を笑ふ、

天教明月伴長庚

天は明月をして長庚に伴はしむ。

傳家各自聞詩禮

家に傳へて各自詩禮を聞く、

與子相逢亦弟兄

子と相逢ふ亦弟兄。

洗眼上林看躍馬

眼を上林に洗うて躍馬を見る、

賀詩先到古宣城

賀詩先づ到る古宣城。

【字解】

【一】寺丞 職官分紀に、太常・宗正・光祿・衛尉・太僕・鴻臚・司農・大理・太府、皆有丞。【二】省試 貢試といふに同じ、唐代、州縣で行つた官吏登用試験、唐書選舉志に、敎三州縣、學生八品子・若庶人、入四門學爲俊士、即諸州貢舉省試。【三】龍飛甲子 天聖は、仁宗即位し、改元した年號であるから、龍飛甲子と言つたのである。東京賦に、龍飛白水。白水は南陽の白水

【三】豪英

李太白の詩に、談笑盡豪英。漢の袁盎傳に、天子所與共六尺輿者、皆天下豪英也。【二】春蘭笑秋菊 楚辭、九歌に、春蘭兮秋菊。烟花錄に、煬帝曰、春蘭秋菊、各一時之芳。陳樂業いふ、蘭菊異芳、胡有二廢者。【六】長庚 太白をいふ、韓退之の詩に、東方未明大星沒、獨有太白對殘月。【七】上林 漢の苑名、以て新先輩、宴する所の京師は、瓊林苑の如きないふ。史記に、蔡澤いふ、躍馬食肉富貴四十三年足矣。【八】古宣城 今の太平府。太平寰宇記に、太平州、本宣州、當宣縣。

【題義】

熙寧五年十一月、張軒民が貢舉省試に赴くを送つた詩である。宋の陸游が老學庵筆記に、自建炎軍興、蜀士以險遠、許不就制置司、與三省試同、間有願赴三省試者、亦聽とある。

【詩意】

仁宗の即位された天聖元年は、人材が輩出して、貢試に應ずるもの、盡く豪英であつた。我々は幸に當時の老成先生を見るに及ぶことが出来た。世人は春の蘭を競ひ、秋の菊を笑つて居る。併し、天は明月をして長庚に伴はしめて居る。さて、各自は家に傳へた詩禮の教へを聞いて居る。今、子と相逢ふは、亦、弟兄である。眼を洗つて、漢の上林苑にも比すべき京師の地、新先輩が宴する處では、馬を躍らして得意なる人達を見る。それで、賀詩は先づ古宣城（今の太平府）に到るのである。（東坡の自註に、伯父與三太平州張侍讀同年、此其子。）

和致仕張郎中春晝

致仕張郎中の春晝に和す

投絨歸來萬事輕

絨を投じ歸り來つて萬事輕し、

消磨未盡祗風情

消磨して未だ盡きざるは祗風情。

【字解】

【一】致仕 官を君に納め還す義、公羊傳、宣公元年に、過而致仕。唐書、東魯傳に、魯曾許。致仕、太宗不許。【二】張郎中

舊因蕪菜求长假。新爲楊枝作短行。不禱自安緣壽骨。深藏難沒是詩名。淺斟杯酒紅生頰。細琢歌詞穩稱聲。蠅頭寫字眼能明。盛衰閱過君應笑。龍辱年來我亦平。跪履數從圯下老。逸書閒問濟南生。東風屈指無多日。只恐先春鶻鳩鳴。

蕪菜、字は子野、吳興の人、仕へて都官郎中に至る。晩年、漁釣自ら適す。【一】投、被ば被屋の被で、印の被。潘安仁の秋興賦に且散狂以歸來兮、忽投被以高風。【二】消磨、歐陽修の豊樂亭記に、刻削消磨。【三】風情、白樂天の詩に、欲送殘春、招酒伴、客中誰最有風情。【四】因蕪菜、晉書、張翰傳に、因秋風起、思吳中菘菜、蓴羹、鱸魚膾、曰、人生貴得適意、何爲羈宦數千里、以要名爵乎、遂命駕歸。【五】长假、晉書、段灼傳に、取長假還鄉里。【六】新爲楊枝、白居易の安樂堂詩に、小蠻は善く舞ふ。嘗て詩あり、櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰。白既に年高邁にして、小蠻は方に豊麗なり。因りて楊柳詞を爲りて、以て意を託す。【七】短行、樂府に、長短歌行あり。【一〇】

蠅頭、居、昔、魏の焦先も楊柳も、故に小廬を作る、形は蠅牛殻の如し、故に蠅牛廬といふ。古今註に、蠅牛、腹蟻也、熱則自隱於葉下、野人結圓舍、形如蠅牛之殼、故曰蠅舍。【一】蠅頭寫字、南史に、齊、衛王王鈞、嘗手自細書五經、置於巾箱、以備遺忘、賀玠曰、殿下自有墳索、復何須蠅頭細書、別藏巾箱中。【二】龍辱、龍榮恥辱と熟す、老子に、龍辱若驚。范仲淹、岳陽樓記に、龍辱皆忘。【三】龍辱數從圯下老、漢書に、張良嘗避下邳、圯上有二老父、至良所、直置其履圯下、顧謂良曰、孺子下取履、良愕然欲擊之、爲其老、強忍下取履、因跪進、父以足受之、笑而去、里所、復還曰、孺子可教矣。【四】濟南生、漢書、儒林傳に、伏生濟南人、故爲秦博士、孝文時、求能治尚書者、天下亡有、聞伏生治之、欲召、生年九十餘、老不能行、詔太常、使掌故往受之。秦時禁書、伏生壁藏之。【五】鶻鳩鳴、離騷經に、恐鶻鳩之先鳴兮、使百草爲之不芳。

【題義】此詩は張郎中が春畫の舊作に和したのである。詩中に、東風屈指無多日、の句があるのを見ると、當に湖州に在つた時の作であるやうに思はれる。紀昀いふ、七言長律最難、此固不失三圓穩と。又、唐宋詩醇の評にも、集中七言長律甚少、此體在唐如杜・白諸公、亦不多見、以三其傷氣也、是作、格度渾成、音調諧美、見才大無所不可也とある。【詩意】官職を辭して故山に歸れば、萬事身輕になつた思がする。ただ消して無くすことの出来ないものは、風情(面白おもむき)である。昔、晉の張翰は蕪菜の羹、鱸魚の膾を味はうとし、官を辭して歸郷したが、張郎中も蕪菜に因つて長い休暇を求め、風流自ら娛みて、楊柳詞を爲り、長短歌行を作る。別に禱らないけれども、平かに安らかであるのは、健康の賜である。又、深く藏して居るけれども、没し難いのは是れ詩名である。淺酌微醉、紅は頰に發し、細に歌詞を口吟すると、穩にして聲に稱ふ。(細琢三歌詞とは、張先が喜んで小詞を爲るをいふ。小廬な廬舎を造つて、心自ら放、蠅

頭のやうな細い文字を書いて、眼は能く明瞭である。それで古今の盛衰を閱し過して、君は應に笑ふのであらう。世の榮辱には、我も亦、年來平かである。昔、漢の張良は、下邳に遊んだ時、圯上の老人に従ひ、跪いて其の履を取つて、兵書を授かつたが、我も亦、逸書を閉に濟南の次生に問ふ。東風、指を屈すれば、最早、多日もない。只恐れるのは、春に先つて鷓鴣（鷓鴣）の鳴くことである。

【餘論】胡安定の言行録に、慶曆六年、郡守宴三六老於南園、其一爲三衛尉丞張維。張公諱は維、吳興の人で、吟咏を以て自ら娛んで出で仕へなかつた。其の子尙書都官先も亦致仕家居し、公平生愛した所の詩十首を取つて之を縑素に寫し、十詠圖と號した。張維十詠詩中、灘頭斜日鳧聲（鷓鴣）隊、枕上西風鼓角聲の如き、皆佳句である。

再用前韻寄莘老

再び前韻を用ひて莘老に寄す

君不見夷甫開三窟

君見すや夷甫三窟を開くを、

窟

不如長康號癡絕

如かず長康癡絶と號するに。

癡人自得終天年

癡人は自得して天年を終ふるも、

智士死智罪莫雪

智士は智に死して罪雪ぐ莫し。

【字解】【一】夷甫開三窟。晉書に、王衍字夷甫、居華輔、不以此爲名、而思自全之計、乃以弟澄爲荊州、族弟敦爲青州、謂曰、荊州有江漢之固、青州有負海之險、卿二人在外而吾留此、足以爲三窟矣、讀者歸之。【二】窟。晉書に、顧愷之、字長康、祖

困窮誰要卿料理
 舉頭看山笏拄頰
 野鳧翅重自不飛
 黃鶴何事兩翼垂
 泥中相從豈得久
 今我不往行恐遲
 江夏無雙應未去
 恨無文字相娛嬉

困窮誰か要す卿の料理を、
 頭を擧げて山を看笏頰を拄ふ。
 野鳧翅重くして自ら飛ばず、
 黃鶴何事ぞ兩翼垂る。
 泥中相從ふ豈久しきを得ん、
 今我往かず行く恐くは遅からん。
 江夏無雙應に未だ去らざるべし、
 恨らくは文字の相娛嬉するなきを。

經典、能文章、京師號曰天下無雙、江夏黃童。ここは借りて、黃庭堅字は魯直をいふ。【七】

【題義】此詩は、熙寧五年十一月、將に湖州に往かうとする時、孫莘老に寄せたのである。（東坡の湖州に至つたのは、十二月であつた。）紀昀いふ、語太憤激と。

【詩意】君見すや晉の王衍（字は夷甫）が少しも國家を念はないで、自全の計ばかりを思つたことを。弟澄を荊州に、族弟敦を青州に置き、以て三窟（岩屋）となすに足ると謂つたさうである。夷甫の此の態度は、顧愷之（字は長康）の癡絶と稱するに及ばない。なせといふに、癡人は自得して天年を終

へるも、智士は智に死して、其の罪を雪ぐことが出来ないからである。困窮の此際に、誰か卿の料理を要するぞ。頭を擧げ笏にて頰杖をつき、青山を看、朝來、爽氣ありと言つた。野鳧は翅が重いので自分で飛べない。黄鶴は何事ぞ兩翼が垂れる。(野鳧は自ら喩へ、黄鶴は辛老を指していふ。)泥中相従ふのでは、久しくは堪へない。(泥中は泥淖の中といふ意で、地名といふ説は非。)今、我が往かなければ、行くことは、恐くは遅くなるであらう。黄庭堅は辛老の婿で、文を能くする。未だ去らないであらうが、恨らくは文字の相娯嬉する人がないのを。(黄山谷後集にいふ、庭堅初室曰蘭溪縣君孫氏、故龍圖閣直學士孫公覺辛老之女、庭堅年十七、從舅氏李公擇於淮南、孫公憐甚少、以蘭溪一歸之。

畫魚歌

畫魚の歌

天寒水落魚在泥。
短鈎畫水如耕犁。
渚蒲披折藻荇亂。
此意豈復遺鯢鯢。
偶然信手皆虛擊。
本不辭勞幾萬一。

天寒く水落ちて魚泥に在り、
短鈎水を畫して耕犁の如し。
渚蒲披折して藻荇亂る、
此意豈亦鯢鯢を遺さんや。
偶然手に信すれば皆虛擊、
本勞を辭せず萬一を幾ふ。

【字解】(一) 畫魚 畫は劃に同じ、鈎を以て魚を畫す。今、三吳水郷に往往之あり。樂城集の自註に、吳人以三長釘一加杖頭、以杖畫水取魚、謂之畫魚。(二) 渚蒲 杜子美の詩に、渚蒲芽白水蒼青。又いふ、渚蒲隨地有。(三) 鯢鯢 鯢は鱈と同じ、鯢に二あり、鯢鯢の鯢、魚子の鯢是なり。(四) 幾萬一 後漢書、劉瑜傳に、幾萬一。

一魚中刃百魚驚。
蝦蟹奔忙誤跳擲。
漁人養魚如養雞。
插竿貫笠驚鷓鴣。
豈知白艇鬧如雨。
攪水覓魚嗟已疎。

一魚刃に中れば百魚驚き、
蝦蟹奔忙して誤つて跳擲す。
漁人魚を養ふこと雞を養ふが如し、
竿を插み笠を貫いて鷓鴣を驚かす。
豈知らんや白艇鬧して雨の如きを、
水を攪して魚を覓む嗟已に疎なり。

【題義】熙寧五年十二月、湖州に至るときの作。(東坡の自註に、湖州道中の作) 查初白いふ、以爲波瀾蒼望、無自窮其畔岸也。紀昀いふ、初白先生、推之太過と。
【詩意】天が寒く、水が退けて、魚が泥の中に在る。短い鈎で水を畫することは、恰も田を耕すときの犁(農具の一)のやうである。渚の蒲は披き折れ、水草も亂れ散つて居る。既に魚を畫する大魚も小魚も同じことで、豈また鯢鯢をば遺さうぞ。(本旨は此に在る) 偶然手に信せて水を畫すると、皆、虚撃であつた。元來、勞を厭はないし、萬一を幾うたのである。一つの魚が刃に中れば、百魚が驚く。蝦も蟹も奔るに忙はしく、誤つて跳擲する。一體、漁人の魚を養ふことは、雞を養ふがやうである。竿を插み、笠を貫いて鷓鴣(水鳥)を驚かす。魚を養ふ爲である。白艇(艇は圓い棒)が雨のやうに鬧しく下るといふことは知らなかつた。水を攪して魚を覓める、其れは既に思慮の疎であることを思

はなければならぬ。

【餘論】唐宋詩醇に、時新法盛行、故即短鈞畫水以爲喻、所言此意豈復遺三歟、與一魚中刃百魚驚者、似皆指新法之病民、王・呂(王安石・呂惠卿)輩壞法亂制、豈異乎拔三渚蒲而亂藻荇哉、其請罷條例司疏有云、造端宏大、民實驚疑、創法新奇、史皆惶惑、正與詩意相同、而其繪事如畫、筆端有神、雖寥寥短章、讀其詞、如有一千言在腕下、評して居る。

吳中田婦歎

吳中田婦の歎

今年粳稻熟苦遲。

今年の粳稻熟すること苦だ遅し、

庶見風霜來幾時。

庶くは見ん風霜來る幾時。

霜風來時雨如瀉。

霜風來る時は雨瀉ぐが如し、

杷頭出菌鎌生衣。

杷頭菌を出し鎌は衣を生ず。

眼枯淚盡雨不盡。

眼枯れ涙盡きて雨は盡きず、

忍見黃穗臥青泥。

見るに忍ぶ黃穗の青泥に臥するを。

茅苦一月隴上宿。

茅苦一月隴上に宿す、

天晴穫稻隨車歸。

天晴れ稻を穫り車に隨つて歸る。

【字解】

【一】 粳稻。うるちのいれ、史記、滑稽傳に、祭以粳稻。大觀本草に、粳與秈同、有早中晚三收、諸家獨以晚稻爲粳者非也、凡不粘者、皆爲粳。【二】 杷頭。説文に、杷、平田器とあつて、田をからすきで耕した後、更に土の塊をこなす農具。戰國策に、商人無杷頭柱縛之勢。方言に、刈鉤自關而西、或謂之鎌。【三】 出菌。柳子厚の書に、蠶能蒸出芝菌。又、杜子美の詩に、歸耕生衣臥。【四】 眼枯。杜子美の詩に、莫自使眼枯、收汝

汗流肩頰載入市。

汗流れ肩頰く載せて市に入る、

價賤乞與如糠粃。

價賤く乞與する糠粃の如し。

賣牛納稅拆屋炊。

牛を賣り稅を納れ屋を拆いて炊ぐ、

慮淺不及明年飢。

慮は淺くして明年の飢に及ばず。

官今要錢不要米。

官は今錢を要して米を要せず、

西北萬里招羌兒。

西北萬里羌兒を招く。

龔黃滿朝人更苦。

龔黃朝に満ちて人更に苦しむ、

不如却作河伯婦。

如かず却つて河伯の婦と作るに。

朝、龔黃は勃海の太守、黃霸は潁川の太守、二公は皆、民を郵みしを以て善治と稱された。【一】 河伯。河國に、河伯、姓呂、名公子、夫人姓馮、名夷。後漢書、張衡傳の註に、馮夷服八石、得水仙、爲河伯。

【題義】此詩も熙寧五年十二月の作、戲れに買收に贈り、并せて收が吳中田婦歌に和したのである。東坡の自註に、和買收韻とある。

【詩意】今年の粳稻は實ることが苦だ遅い。霜風の來るときは、雨が瀉ぐやうである。杷(馬鍬)は菌を生じ、鎌(鎌に同じ)に衣を生ず。(紀昀いふ、常景寫成奇句)眼枯れ涙は盡きても、雨は盡きない。黃穗の青泥に臥するは、まことに見るに堪へられない。茅苦に

覆はれて一月も隴(田中の高處)の上に宿つた。天晴れ稻を穫りて車に載せて歸つた。汗は流れ肩は
 頼くなつて曳いて市に入る。値段は賤いので糠や糶のやうに與へる。牛を賣り、税を納れ、屋を拆い
 て炊ぐ。前の慮が淺く、明年の飢に備へない。官は今、錢を要求して、米を要求しない。そこで、司
 馬溫公は青苗(春時、苗の青い頃、民に金を貸し、收穫の時に、元利とも返済せしめる法)及び坐倉糶
 米の害を論じて、東南錢荒而粒米狼戾、今棄其有餘、取其所無、農末皆病矣と言つた。一體、宋
 の法に據ると、米で納めるも、錢で納めるも民の便利に任せだが、王安石の新法が行はれてからは、
 官が争うて錢を取つたため、何處も米が賤くなつて、農民は米を賣る、二石で僅に一石の値を納れる
 ことが出来たのである。これは西北萬里から羌兒(羌は、支那西方の野蠻人種の稱)を招いたやう
 なものである。そして、龔遂や黃霸のやうな善く民を治める人が朝に滿つれば、人民は更に苦しむ結
 果となる。却て河伯の婦となるには如かない。(史記の滑稽傳に、魏文侯時、西門豹爲鄴令、會長老、
 問民所疾苦、長老曰、苦爲河伯娶婦、約問其故、曰、鄴三老廷掾、常歲賦斂百姓、得數百萬、
 爲河伯娶婦、當其時、巫行視人家女好者、共粉飾之、浮之河中、曰、即不爲河伯娶婦、水
 來漂沒、溺其人民。約至始禁絕之云云)新法の害を言つたのである。

【餘論】宋の買收字は耘老、烏程の人である。詩名があつて、飲酒を喜ぶ。其の屋に水閣があり、浮
 暉といふ。李公擇・蘇子瞻は之と遊び、倡酌が極めて多かつた。子瞻嘗て道場に遊んで回るとき、風
 雨に値つた。そこで、舟を泊し、浮暉閣に上り、官奴に命じて燭を乗らしめ、風雨を掃つて壁間に作

したが、後、石に墨妙亭に刻した。收は素より貧しいので、東坡は毎に之を念ひ、嘗て古木怪石を寫
 し、其の後に書して贈つた。云ふ、今日舟中霜寒、十指如懸槌、適有入致嘉酒、遂獨飲一杯、醺然
 徑醉、念買處士貧甚、無以慰其意、爲作古木怪石一紙、每遇饑時、輒一開看、不知能飽人否、
 若吳興有好事、能爲君月致三米三石酒三斗、終君之世者、便以贈之、不爾可令雙荷葉收掌、
 須添丁長、以付之也。雙荷葉は耕老の侍婢、添丁は、耕老の子である。後、東坡が去ると、耕老
 亭を作つて蘇を懷ふ。詩一卷あり、懷蘇集といふ。

和邵同年戲贈買收秀才三首 邵同年に和し、戲れに買收秀才に贈る 三首

傾蓋相歡一笑中、
 從來未省馬牛風。
 卜鄰尙可容三徑、
 投社終當作兩翁。
 古意已將蘭緝佩、
 招詞閑詠桂生叢。
 此身自斷天休問、

【字解】
 邵迎、字茂誠、高郵人。漣水燕談に、
 邵迎、官止州縣、窮死無嗣。
 買收、前漢書、鄧陽上三陵孝王書、
 烏程人、所著有懷蘇集。
 傾蓋、前漢書、鄧陽上三陵孝王書、
 の語に、有白頭如新、傾蓋如故、
 何則不知也。傾蓋は、車を駐め、
 蓋を傾けて相語ること、家語、致思篇
 にも見ゆ。
 馬牛風、左傳、傳

白髮年來漸不公

白髮年來漸不公 公ならず。

公四年に、齊侯伐楚、楚子使吳師言曰、君處北海、寡人處南海、惟

是風馬牛不相及也。疏にいふ、馬逐上風而去、牛逐下風而來、故云不相及也。又、書にいふ、馬牛其風。【七】卜。左傳、昭公三年に、非宅是卜、惟鄰是卜。白樂天が卜鄰の詩に、明月好同三徑夜、綠楊宜作兩家春。【六】蘭。蘭。離騷に、朝秋蘭兮爲佩。【七】桂。桂。劉安の招隱士章句に、桂樹叢生兮山之幽。【八】天。天。杜子美の詩に、自斷此生休問天。

【題義】此詩も、前詩と同じ時の作で、邵茂誠の詩に和して、戯れに賈收に贈つたものである。本集の邵茂誠詩集の序に、茂誠與余同登進士第、十有五年而見之於吳興孫莘老座上と見ゆ。

【詩意】君と我とは車を駐め、蓋を傾けて、愉快に相談笑する。從來久しくお互に省みなかつたことは、全く風馬牛であつて、昔、漢の杜陵の蔣詡（字は元卿）は、兖州の太守となつたが、王莽が攝に居ると、病を以て官を免じ、郷里に居り、臥して戸を出でなかつた。かくて舍中の竹下に、三徑を開いたが、惟、羊仲・求仲の二人だけが之に従つて遊んだといふことである。この故事を借りて我は鄰を卜して、尙ほ三徑を容るべしと言つたのである。結局、我等は里中の社に入つて當に兩翁となるべきであらう。古意は既に秋蘭を纫にした。招隱の詞は、閑に桂の叢を生ずるといふ桂樹叢生兮山之幽の句を詠じた。此生、天に問ふを休めよ。問うても、駄目である。杜牧の詩に、公道世間惟白色とあるが、白髮は、年來漸く公でない。

朝見新萐出舊棧

朝に見る新萐の舊棧に出づるを、

【字解】【一】新萐出。新萐。棧。棧

騷人孤憤苦思家

騷人は孤憤して苦に家を思ふ。

五噫處士大窮約

五噫の處士大だ窮約し、

三賦先生多誕誇

三賦の先生誕誇多し。

帳外鶴鳴奮有鏡

帳外鶴鳴いて奮に鏡あり、

筒中錢盡案無鮭

筒中錢盡きて案に鮭なし。

玉川何日朝金闕

玉川何れの日か金闕に朝せん、

白晝關門守夜叉

白晝門を關して夜叉を守る。

掃をして萐を生ぜしめる義である。萐はツバナ、茅の初生のもの。棧は木を斜に所る意。書説に、新を以て辛となし、萐を以て夷となすは是にあらす。杜子美の詩に、辛夷始花亦已落。【二】騷人。憂を抱ける詩人、正字通に、屈原作離騷、言遭憂也。范仲淹、岳陽樓記に、遷客騷人、多會于此。【三】孤憤。孤獨にして憤悶をいふ。韓非子に、孤憤

【詩意】買收秀才が再び娶らうとした際で、(買収老隱茗城南橫塘上、晚娶眞氏)詩中の句は、皆、夫婦の事に涉つて居る。朝に新しい萐が舊い棧(斜に所つた木)に生ずるを見る。詩人は孤憤して苦に家事を心配する。かの五噫の歌を作つた梁鴻は、太だ窮約し、三賦の作者として名高い司馬相

如も、兎角詭誇（大言をほこる）の言が多い。帳の外では鶴が鳴く、鶴は九阜に鳴いても、聲は天に聞える。窟には鏡がある。之を前に設けると、妖異と雖も、所詮本形は遁れることは出来ない。温嶠が牛渚磯で、犀角を燃やして怪物を照らしたことも、思ひ合はさる。そして此の鏡窟は、婦人の要具である。我の大竹筒中の鏡も盡きて、案に鞋がない。玉川は何れの日か金闕に朝するであらう。白晝門を關して夜叉を守る。（維摩經註に、夜叉有三種、一在地、二在虛空、三天夜叉也、地夜叉不能升空、天夜叉能飛行、佛轉法輪、地夜叉唱、空夜叉聞、空夜叉唱、四天王聞、如是乃至梵天一也。と見えて居る。）

生涯到處似橋鳥

生涯到處橋鳥に似たり

科第無心摘領鬚

科第心なく領鬚を摘む

黃帽刺船忘歲月

黃帽船を刺して歲月を忘る

白衣擔酒慰鰥孤

白衣酒を擔うて鰥孤を慰む

狙公欺病來分栗

狙公病を欺き來つて栗を分ち

水伯知饒爲出鱸

水伯饒を知りて爲に鱸を出す

莫向洞庭歌此曲

洞庭に向つて此曲を歌ふこと莫れ

【字解】 橋鳥 杜子美の詩に、橋鳥相背發、又いふ、橋鳥宿處非。又いふ、橋鳥終歲飛。此は特に橋杆上に刻みて鳥形を爲し、以て風を占ふのみ。晉令は車駕出入するとき、風の前に在るを相る。晉の傅元が相風賦に、棲神鳥於竿首、俟群風之來往とある。科第、摘、領鬚、轉退之が詩に、年年收科第、如摘領鬚。科第は試験して優劣

烟波渺渺正愁予

烟波渺渺として正に予を愁へしむ

の次第を定める意、科第をいふ。

【一】 黃帽刺船 前漢書に、鄧通以

【二】 白衣擔酒 陶淵明は嘗て九月九日

望久之、見白衣人至、乃王弘送酒使也。【三】 狙公、分栗 莊子齊物論に、狙公（さるまばし）賦乎（山栗）、日朝三而暮四、衆狙皆怒、曰、然則朝四而暮三、衆狙皆悅、名實未虧而喜怒爲用云云。【四】 水伯 山海經に、朝陽之谷神曰天吳、是爲水伯。

【五】 洞庭 湖南の境に在る、長二百里、廣百里、華容・南縣・安鄉・漢壽・沅江・湘陰の各縣之を環る。巴陵縣城、其の入江の口に當る。【六】 烟波 もやの籠めた水波、崔顥の詩に、日暮鄉關何處是、烟波江上使人愁。

【詩意】 人間の生涯は到處、風を占ふといふ橋鳥にも似て居る。年年の科第も領底の鬚を摘むやうに、心なく進んで行く。黃帽を着けた舟子は船に棹さし、幾んど年月を忘れる。世味既に斯くの如くである。白衣酒を擔うて鰥孤（鰥寡孤獨）を慰めるも一境である。昔、酒好きな陶淵明は、重陽の節に酒が無かつた時、宅邊の菊叢中で、坐して菊の花を摘んで居た。盈把久うして白衣の人が至るを望見した。それは江州の刺史王弘が酒を送るの使であつた。便ち獨で酌み、酔うて後に歸つたといふことである。更に又、世態の朝三暮四を思はせる。狙公が山栗を衆くの狙に分配したとき、朝三にして暮四と言つたら、衆狙は怒つた。朝四にして暮三と言つたら悦んだ。朝三暮四、朝四暮三、其の數はかはらないが、狙の愚なる、一は喜び、一は怒る。世間も己を是として心を勞することが多い。水伯も人間の饒る（食物を饒ぼる）ことをよく知つて居り、爲に鱸魚を出す。併し、洞庭湖に向つて此の

曲を歌つてはならない。湖光烟波は渺渺として人を愁へしめる。(屈原の九歌に、帝子降兮北渚、目眇眇兮愁余、嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下とある。帝子は堯女、(娥皇・女英の二女をいふ)舜に随つて反らず、湘水の渚に墮ち、因て湘夫人となる。渺渺は好き貌、余は屈原自らを謂ふ。堯帝の二女は、儀徳が美好で、(眇然絶異)又、帝舜に配したのに、生命を水中に没した。屈原は自ら傷む、堯・舜に遺はないで閨君に遇ふことを。亦將に身を湘流に沈めようとする。故に愁余と言つたのである。)

遊道場山何山

道場山何山に遊ぶ

道場山頂何山麓

道場山頂何山の麓

上徹雲峰下幽谷

上は雲峰に徹し下は幽谷

我從山水窟中來

我山水窟中より來る

尙愛此山看不足

尙ほ此山を愛して看れども足らず

陂湖行盡白漫漫

陂湖行くゆく盡きて白漫漫

青山忽作龍蛇盤

青山忽ち龍蛇の盤を作す

山高無風松自響

山高く風なく松自ら響く

誤認石齒號驚湍

誤つて石齒を認めて驚湍と號す

【字解】(一) 道場山 釋氏積古略に、梁、乾化二年、湖州道場山、如訥禪師卓庵于山、乘虎游行云云。湖州舊志に、吳越十郡最爲眞正寺、宋改爲壽寧寺。(二) 何山 晉の何遜が嘗て此山で讀書したといふ所から名を得た。太平寰宇記に、何口山在烏程縣南十里、昔曰何山、亦曰金華山、吳興掌故に、何山與道場山、聯接爲北一支、金華是南一支。

【一】 雲峰 謝幼度が詩に、滅跡入雲峰。江淹の詩に、平明登雲峰。

【二】 幽谷 深い谷、詩、小雅、伐木篇

山僧不放山泉出

山僧は山泉を放つて出さず

屋底清池照瑤席

屋底清池瑤席を照す

階前合抱香入雲

階前の合抱は香雲に入り

月裏僊人親手植

月裏の仙人親ら手植す

出山回望翠雲鬟

山を出でて回望すれば翠雲鬟

碧瓦朱欄縹緲間

碧瓦朱欄縹緲の間

白水田頭問行路

白水田頭に行路を問へば

小溪深處是何山

小溪深き處は是れ何山

高人讀書夜達旦

高人書を讀み夜旦に達す

至今山鶴鳴夜半

今に至るも山鶴夜半に鳴く

我今廢學不歸山

我今學を廢し山に歸らず

山中對酒空三歎

山中酒に對して空しく三歎す

左傳、昭公二十八年に、樛國人有之、魏子將受之、魏子曰、問汝女寬、曰、必諫、饋入、召之、比置食、三歎、魏子曰、置食之間、三歎、何也、曰、願以小人之心、爲君子之心、屬厭而已と。

古今體詩 遊道場山何山

に、出自幽谷、暋于喬木。(一) 賦、元稹が詩に、自投名利、占。陂湖。(二) 石齒、皮日休の詩に、三尋雲石齒。(三) 驚湍、謝靈運の詩に、頭節驚驚湍。(四) 瑤席、楚辭、九歌に、瑤席兮玉瑱。(五) 合抱、ひとかかへ、老子に、合抱之木、生於老木。(六) 翠雲鬟、美人の髪を緑の雲に喩へていふ、韋應物の詩に、高髻雲鬟宮樣粧。阿房宮賦に、綠雲之擾擾、梳曉鬟也。(七) 縹緲、李白の詩に、參差遠天際、縹緲晴霞外。白居易の詩、山在虛無縹緲間。(八) 夜達旦、前漢書に、劉向或不寐達旦。(九) 山鶴鳴、夜半、春秋說題辭に、鶴知夜半。註にいふ、鶴、水鳥也、夜半水位感、其生氣、則益喜而鳴と。(一〇) 三歎、生氣、則益喜而鳴と。

【題義】 此詩も熙寧五年十二月の作である。起首四句は總寫、下は道場を詳にして、何山を略す。更に出山回望の二語を作して、搖蕩して情に入る。何山は、只高人の讀書を細懐して、復、山を模し水を範しない。紀昀いふ、若、斷若、連、有、自在流行之妙こと。又いふ、何山只作、帶筆點染、輕便之至と。

【詩意】 吳郡には名山が多い。道場山の頂、何山の麓、上は雲峰を凌ぎ下は幽谷に入る。我は山水の窟の中から來つたが、尙ほ此の山を愛して看れども厭きない。(湖州に愛山書院あり、此句を以て名く) 陂湖は行くゆく盡きて白漫漫。青山は忽ち婉孌として龍蛇の形を作し更に蟠まつて居る。山は高いが強い風もなく松に自然の響がある。山齋の石齒を誤認しては驚湍(湍は急流)となすこともある。山僧は山泉を放つて出さない。屋底の清池は瑤席を照らして居る。階の前にある合抱の木は、雲に入つて香ばしく、月裏の仙人の手植に係る。(階前云云、桂樹をいふ) 山を出でて回望すると、翠の雲巖(美人の髪に喩ふ)は空に見るやうである。又、碧色の瓦や朱塗の欄も標榜と遙に遠い間に見られる。白水田頭に行路を問へば、小溪の深い處が何山である。高人(何谿を指す)が書を讀んで、夜、旦に達した。晉の何谿は、嘗て此山で讀書したが、後、吳興の守となつたので、其の居を以て寺となし、其山に名けた。(顏魯公が杼山碑に、寺西南有、何谿釣臺とある。谿の嘗て此に居つたことは明かである) 山に至るも、山鶴は夜半に鳴く。我は今、學を廢めて山に歸らない。山中酒に對して空しく三たび歎息するのである。(王文誥いふ、此詩用唐人轉韻、而讀去、絕無轉韻之跡、此其筆力不同故也と。)

贈孫莘老七絶

孫莘老に贈る七絶

嗟予與子久離羣。
耳冷心灰百不聞。

嗟嗟予子と久しく羣を離る、
耳冷に心灰して百聞かす。

若對青山談世事。

若し青山に對し世事を談せば、
「べし」。

當須舉白便浮君。

當に須らく白を舉げ便ち君を浮す。

【字解】 (一) 孫莘老、孫覺、字

は莘老、高郵の人、王安石に逐はれたこと、前に見ゆ。(二) 離羣、

記、檀弓に、子夏曰吾過矣、吾離羣而索居、亦已久矣。(三) 耳冷、

唐の孟弘微、宣宗に對して曰く、陛下何以不知有臣、不召用、帝怒

つて曰く、朕耳冷不知有卿と、乃ち之を黜く。(四) 心灰、莊子、齊物論に、形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎。

【一】 白、太白、杯の名、吳郡賦に、里諶巷飲、飛觴舉白。【二】 浮、罰なり、劉向說苑に、魏文侯與大夫飲酒、使公乘不仁爲

觴飲、曰、飲不盡者浮以三太白。

【題義】 此詩も熙寧五年十二月の作、熙寧中、新法が行はれると、王安石は勢を得、諸公は之を争つたが、勝たないで、皆、排斥さる。孫莘老は、先に罷められて、湖州に居る。東坡は杭州に居つたが、五年十二月、事を以て湖州に至り、莘老と會した。(東坡、杭州に任たりし日、差せられて湖州に往き、提舉の利害を相度る。湖州に知たりし孫覺と相會したのである。) 是時、莘老及び坐客と約して、如し言が時事に及ぶものは、罰杯として一大盞を科せんと言つて、此詩を作つたさうである。

【詩意】 ああ予は君と久しく別れて居る。世事を聞かぬ故に、耳根は冷然として居る。(世事の爲に、耳の熱するやうなことは無い。) 其れが爲に、心も死灰の如くである。此際、若しも青山に對して世事を談するやうなことがあれば、當に白を舉げて君を浮すべし。(白は太白とて、杯の名。浮は爾雅に罰

也と見ゆ。白の字は、青の字に對して好いが、わざと意あつてしたのではない。自然に出たのである。故に妙。坐客、時事に言及するものあらば、一大盡を罰する。(時事を指さないのは、固より軾の意であらうが、時事を言へば、不便が多く、更に説くべからず。説くも亦盡さないからである。)

天目山前淥浸裾。

天目山前淥裾を浸す。

碧瀾堂下看銜鱸。

碧瀾堂下銜鱸を看る。

作隄捍水非吾事。

隄を作り水を捍ぐは吾が事にあらず。

閒送苕溪入太湖。

閒に苕溪を送りて太湖に入る。

【字解】(一) 天目山 湖州に在る。寰宇記に、湖州安吉縣、天目山、高三萬六千丈、父老云、欲波瀾及避水災、天目海眼山爲第一。水經註に、山上有霜木、皆是數百年樹、謂之用風林。(二) 碧瀾堂 湖州

之用風林。(三) 碧瀾堂 湖州

の守護所、靈溪館中の堂名。杜牧之が宣城に佐たりし時、來つて吳興に遊び、書堂を爲る。

【詩意】天目山前の淥即ち水は、人の衣裾を浸すばかりである。湖州の守護所たる碧瀾堂の下には、舟が多く、軸轆相つづいて居る。(舟のともが後から銜むがやうに接して居る。)此度、私は運鹽河を開くために、其の奉行を命ぜられて、湖州に來つたが、隄を作り、水を防いで、水利を興すことは、我の心ではない。(此役は、己の心に不満である。不満であることを吾事に非ずと言つたのが妙處である。)

【詩意】天目山前の淥即ち水は、人の衣裾を浸すばかりである。湖州の守護所たる碧瀾堂の下には、舟が多く、軸轆相つづいて居る。(舟のともが後から銜むがやうに接して居る。)此度、私は運鹽河を開くために、其の奉行を命ぜられて、湖州に來つたが、隄を作り、水を防いで、水利を興すことは、我の心ではない。(此役は、己の心に不満である。不満であることを吾事に非ずと言つたのが妙處である。)

【詩意】天目山前の淥即ち水は、人の衣裾を浸すばかりである。湖州の守護所たる碧瀾堂の下には、舟が多く、軸轆相つづいて居る。(舟のともが後から銜むがやうに接して居る。)此度、私は運鹽河を開くために、其の奉行を命ぜられて、湖州に來つたが、隄を作り、水を防いで、水利を興すことは、我の心ではない。(此役は、己の心に不満である。不満であることを吾事に非ずと言つたのが妙處である。)

【字解】(一) 雨洗 張説の詩に、雨洗亭阜千畝餘。(二) 巖航 楚辭に、登巖航以長企兮。宋玉の高唐賦に、盤巖航。文選、謝元暉の詩に、茲嶺復巖航。(三) 雲屯 謝靈運の詩、巖高白雲屯。(四) 弁山 寰宇記に一名卞山、山石巖然如玉。卞山は峻極で、清秋爽月でなければ、其の頂を見ない。弁山と書くは、冠弁の義に取り、卞山と書くは、卞姓のものが之に居つたからだといふ。

夜來雨洗碧巖航。

夜來雨洗うて碧巖航。

浪湧雲屯遠郭寒。

浪湧き雲屯して郭を遠りて寒し。

聞有弁山何處是。

弁山ありと聞く何れの處か是なる、

爲君四面竟求看。

君が爲に四面竟に求めて看る。

【詩意】夜來、雨が巖航(鋭く尖つた山)を洗つたので、碧も滴るばかりである。浪が湧き、雲も屯し、郭を遠りて寒し。此地方に弁山ありと聞くが、何處であらう。君の爲に四方を流覽し、竟に求めて之を看る。

夜橋燈火照溪明。
欲放扁舟取次行。
暫借官奴遣吹笛。
明朝新月到三更。

夜橋燈火溪を照して明かなり、
扁舟を放ちて取次に行かんと欲す。
暫く官奴を借りて笛を吹かしむ、
明朝新月三更に到る。

漢書、淮南王傳に、令官奴入宮中。

【字解】
【一】溪、習溪をいふ、
漢字記の烏程縣水習溪條の下に、
者、四水激射之聲、蓋四水合爲一
溪也、曰習溪、曰前溪、曰餘不溪、
曰習溪也。
【二】取次、白樂天の詩
に、醉把花枝取次吟。
【三】官奴

【詩意】夜橋の燈火は、若溪を照らして明かである。扁舟を流に投つて、つぎつぎに行かうとする。暫く官奴を借りて笛を吹かしめるが、(東坡の詩は、官妓をいふに似たり)明朝の新月は迎へて三更(夜の十二時)に至る。

三年京國厭藜蒿。

三年京國藜蒿に厭き、

長羨淮魚壓楚糟。

長へに羨む淮魚の楚糟を壓するを。

今日駱駝橋下泊。

今日駱駝橋下に泊し、

恣看修網出銀刀。

恣に看る修網の銀刀を出すを。

淮魚日登網。【一】駱駝橋、湖州舊志に、橋跨習溪上。又、名迎春。橋は唐、垂拱元年に造る。形が駱駝の背に似たるより之を名く。劉禹錫の詩に、駱駝橋上颯風起、關雎杯中若下春。【二】出銀刀、杜子美の詩に、出網銀刀亂。

【字解】
【一】淮魚、書の禹貢に、
淮夷與珠璣魚。邵氏聞見錄に、至和
間、皇后好食精淮白魚、呂文靖公夫
人、敬以十區爲獻。公悵然曰、
玉食所無之物、人臣家安得有二十
區也。梅聖俞詩に、頭尾接清淮。

【詩意】三年京國に在つて藜蒿(あかざとよもぎ、粗食の義)に厭いた我は、常に淮魚の楚糟(糟は粕、荆俗十月一日に糟糟を食ふ)を壓して居るを羨ましく思ふ。今日、駱駝橋下に泊し、長い網の中から銀刀の出るのを十分に看る。

烏程霜稻襲人香。

烏程の霜稻人を襲うて香し、

釀作春風雪水光。

春風を醸して作して雪水光る。

時復中之徐邈聖。

時に復之に中てらる徐邈の聖、

無多酌我次公狂。

多く我に酌むなれ次公は狂せり。

【字解】
【一】烏程、寰宇記に、
古烏程氏居此、能釀酒、故以名縣、
而又指酒爲烏程。張景陽の七命に
乃有荆南烏程豫北竹葉。章昭吳錄
に、烏程下若酒有酒名。輿地志に、若
溪在長興縣南、溪南曰上若、北曰

下若、村人取下若水釀酒、醇美勝雲陽、若溪亦作若溪、蓋長興故屬烏程也。【二】雪水、烏程縣の東南一里にある。凡そ四水合して一溪となる。尙ほ前の天目山詩の註を見よ。【三】時復中之、魏志に、文帝問徐邈曰、頗復中聖人否、對曰、昔子反歸於穀陽、御叔謂於飲酒、臣嗜同二子、不能自懲、時復中之。【四】徐邈聖、三國魏志に、徐邈爲尙書郎、禁酒、邈私飲沈醉、校尉趙達問邈事、邈曰、中聖人、達白之太祖、太祖甚怒、鮮于輔曰、醉客謂酒清者爲聖人、濁者爲賢人、邈性修慎、偶醉言耳。【五】無多酌我次公狂、前漢、蓋寬饒傳に、字次公、爲司隸校尉、平恩侯許伯入第、丞相、御史、將軍、中二千石、皆賀、寬饒東鄉特坐、許伯自酌曰、蓋君後至、寬饒曰、無多酌我、我乃酒狂、丞相、御史、將軍、皆賀、寬饒曰、何必酒也。

【詩意】烏程の霜稻(霜を経て熟した稻)で醸した美酒は、芳烈人を襲ひ、春風を作して雪水も爲に光を添へる。(習溪は、湖州府城に在る。雪とは衆流の合集を意味する。或はいふ、四水が蕩激の時、奮然として聲あるより名くと。)時に復、徐邈の所謂聖(清酒をいふ)に中てらる。我に多く酒を酌ん

で飲ませてはならない。蓋次公を真似るではないが、酒狂するを恐れるからである。

去年臘日訪孤山。去年臘日孤山を訪ひ、

曾借僧窓半日閑。曾て借る僧窓半日の閑。

不爲思歸對妻子。歸て妻子に對するを思ふが爲ならず、

道人有約徑須還。道人約あれば徑に須らく還るべし。

【字解】(一)臘日。臘は陰曆十

二月の祭の名、冬至より後の三度目の戌の日に行ふ。杜甫の詩に、臘日前年暖尚遙、今年臘日凍全消。(二)孤山。浙江の杭州西湖に在る。一峯聳立、湖山勝地となす。故に亦、孤

【詩意】去年の十二月臘祭の日に孤山を訪うた。それは官に到る三日目であつた。其の僧窓を借りて半日の閑を偷み得た。今、歸るのは歸つて妻子に對するを思ふが爲ではない。道人約あれば、直に須らく還るべきが爲めである。(前詩にある臘日不歸對妻子云云二句の意を用ふ。蓋し是時、將に杭州に歸らうとして居つたのである。)

莘老葺天慶觀小園有亭北向道士山宗說乞名與詩。

莘老の葺ける天慶觀小園に亭あり北に向ふ、道士山宗說、名と詩とを乞ふ

春風欲動北風微。春風動かんと欲して北風微、

歸雁亭邊送雁歸。歸雁亭邊雁の歸るを送る。

蜀客南游家最遠。蜀客南游家最も遠く、

吳山寒盡雪先晞。吳山寒盡きて雪先づ晞く。

扁舟去後花絮亂。扁舟去つて後花絮亂れ、

五馬來時賓從非。五馬來る時賓從非なり。

惟有道人應不忘。惟道人あつて應に忘れざるべし、

抱琴無語立斜暉。琴を抱いて語るなくして斜暉に立つ。

となり、常に五馬を以て自ら隨へ、五馬坊・五馬亭を立つ。漢の制によると、太守は驕馬、其の秩中二千石を加ふる者あれば、乃ち驢を右にす、故に五馬を太守の美稱とする。【一】賓從。左傳、襄公三十一年、賓從有代。【二】斜暉。夕暮の光、暉暉・夕暉皆同じ。徐陵の句に岸水帶斜暉。

【題義】此詩も、熙寧五年十二月の作である。東坡は天慶觀の小園に至つた。園に孫莘老の葺ける亭があつて北に向つて居る。道士山宗說が亭の名と詩とを乞うたから、爲に歸雁亭と題して、此詩を添へたのである。

【詩意】春風が暖く動かうとしたので、冬の風が微になつた。此時、歸雁亭邊に雁の歸るを送る。

【字解】(一)天慶觀。湖州舊志に、天慶觀在二府治北、梁大同二年建、名元風觀、唐改龍興、宋祥符二年、改天慶。(二)歸雁亭。吳興亭故に、歸雁亭、孫莘老作道士乞名、東坡以歸雁名之、蓋自漢思歸之義。(三)花絮亂。梁簡文帝の詩に、花絮時隨鳥。【四】五馬。太守の美稱、南齊、柳元伯の子五人、皆郡を領し、五馬亭に參差たり。故に殷文圭いふ、柳氏亭邊參差五馬と。又、謝靈運、永嘉の太守

(月令に、季冬、雁北郷とある。東坡の詩は、此の意に取る。)蜀客(東坡自ら稱す)は南に遊んで、家が最も遠く、吳山は寒さも盡きて、雪が先づ啼く。(紀昀いふ、風調自在。)扁舟去つて後、花架が亂れる。さて、他日太守が來られるとき、賓從の人人は、異つて居るであらうが、ただ道人だけは、應に昔を忘れないであらう。そして相變らず、琴を抱いて無言のまままで、夕陽に立つて居られるであらう。(他年當に湖を乞ふべきをいふ。結意は此から生出する。)

至秀州贈錢端公安道竝寄其弟惠山老

秀州に至り、錢端公安道に贈り、竝に其の弟惠山老に寄す

鴛鴦湖邊月如水。

鴛鴦湖邊月水の如し、

孤舟夜榜鴛鴦起。

孤舟夜榜して鴛鴦起る。

平明繫纜石橋亭。

平明、纜を繫ぐ石橋亭、

慙愧冒寒髯御史。

慙愧寒を冒す髯御史。

結交最晚情獨厚。

交を結ぶ最も晩きも情獨厚し、

論心無數今有幾。

心を論ずる無數今幾か有る。

寂寞抱關歎蕭生。

寂寞關を抱いて蕭生を歎す、

【字解】(一)秀州、五季のとき、吳越が置く。今の浙江嘉興府、江蘇嘉善江府、皆其の境。(二)錢端公安道、錢頊字は安道、無錫の人。知烏程縣より召されて、御史裏行となる。唐の時、御史裏行を端公と稱す。(三)鴛鴦湖、南湖と名く、府城の南に在る。其の禽に鴛鴦が多いから、故に名く。一説に、南湖の相麗く、鴛鴦の如きよりいふト。五代

耆老執戟哀揚子。

耆老戟を執りて揚子を哀しむ。

怪君顏采却秀發。

怪しむ君顏采却て秀發、

無乃遷謫反便美。

乃ち遷謫反て便ち美なる無からんや。

天公欲困無奈何。

天公困ましめんと欲す奈何ともする、

世人共抑眞疎矣。

世人共に抑ふるは眞に疎なり。「なし、

毘陵高山錫爲骨。

毘陵高山錫を骨となす、

陸子遺味泉冰齒。

陸子味を遺る泉冰齒。

賢哉仲氏早拂衣。

賢なるかな仲氏早く衣を拂ふ、

占斷此山長洗耳。

此山を占斷して長へに耳を洗ふ。

山頭望湖光潑眼。

山頭湖を望めば光眼を潑し、

山下濯足波生指。

山下足を濯へば波指に生ず。

倘容逸少問金堂。

倘容逸少金堂を問ひ、

記與嵇康留石髓。

嵇康と石髓を留めしを記す。

成・哀・平間、并・賢皆爲三公、權傾人主、所薦莫不拔擢、而雄三世不徙官、及苻璽位、雄以耆老久次、轉爲大夫。黃門古今體詩 至秀州贈錢端公安道竝寄其弟惠山老

の時、湖東に側雨樓がある。【一】結交、史記、荆軻傳に、太子曰、願因先生得結交於荆軻。【二】論心、荀子に、相形不如此論心。【三】抱關、蕭生、前漢、蕭望之の傳に、霍光秉政、丙吉薦王仲翁與蕭望之等數人、皆召見、先是上官桀與霍主謀殺光、光既誅桀等、後出入自備、吏民當見者露索、(裸體として搜索する。)去刀兵、兩吏挾持、望之獨不肯聽、自引出闕曰、不願見、於是乎除用望之、三歲間、而仲翁至光祿大夫、望之以射策甲科爲郎署小苑東門候、仲翁出入傳呼甚寵、願謂望之曰、不肖碌碌反抱關爲、望之曰、各從其志。【七】哀揚子、前漢、揚雄傳贊に、爲郎給事黃門、與王莽、劉歆、竝、哀帝之初、又與董賢、同官、當

郭は門戸を守るを掌る、故に鞍を執る。潘岳の詩に、執鞍執揚。【一】秀發、楚辭、遠遊章句の序文に、文采秀發。晉書、慕容超載記に、精采秀發。【二】運調、蘇頌の詩に、舊史使運調。【三】便美、史記、匈奴傳に、不如運階之便美。【四】昆陵高山、爲、昆陵は常州、高山は惠山。韻語陽秋に、汝州之治、諸井、皆以夾錫錢、鑄之、每井、率數十千、同其故、一老兵曰、此邦爲、風沙、沙入井中、人飲之、即成瘵、夾錫錢、所以治沙土也、因思無錫、惠山泉清甘、甲於二浙者、以有錫也。元和郡縣志に、常州晉陵郡、漢曰昆陵、晉元帝時、避諱改晉陵。【五】冰前、包信の劉章師に贈る詩に、曉激瑣香、冰前寒。【六】洗耳、晉書、孫楚曰、所以枕流、欲洗其耳。【七】逸少、王羲之字は逸少、草隸は古今の冠たり。官を去り、東土の人士と山水、釣の樂を養み、又、道士許邁と共に服食す。【八】金堂、許邁、晉、王羲之に書を遺つていふ、自山陰南至臨安、多有金堂玉室、無人芝草、左元放（左慈字は元放）之徒在焉、漢末諸得道者、皆在焉と、羲之之が傳を爲る。【九】留石髓、仙經に、石髓を服すれば、壽、天に齊し。晉書、嵇康遇王烈、共入山、烈嘗得石髓、如飴、即自服、中、餘半與康、凝而爲石、烈歎曰、叔夜（嵇康字は叔夜）志趣非常而不遇、命也。神仙傳に、烈攜歸與叔夜、已成青石、烈私語弟子曰、叔夜未合得道故也。

【題義】熙寧五年十二月の作、秀州に至つて錢顛に贈り、並に其弟惠山老に寄す。惠山老は、即ち錢道人である。

【詩意】鴛鴦湖邊を照す月は、水のやうに澄んで居る。月に乗じて孤舟を夜中に榜いだため、榜は棹の意、湖中の鴛鴦を驚かした。夜もしらしらと明るくなる。纜を石橋亭に繋ぐ。かく寒を冒して鴛御史に對しては慙愧に堪へない。（錢安道は、鶯があつて御史であるから鴛御史といふ。東坡は嘗て安道に遇つて小酌した。）交を結ぶ最も晩きも、情は獨厚い。心を論ずる無數なるも、今は幾かある。寂寞として關を抱いた漢の蕭望之のことが思ひ出されて其の不遇を歎息する。三世に奉仕しても官を徒さねなく、耆老久次といふお情で、やつと大夫となり、黃門郎となつて鞍を執つた揚雄も、亦哀しく

思はれてならない。さて、不遇である君が憔悴しないで、容貌風采の秀發する所を見ると、或は運調といふことが反て快よいことでもなからうかと思議に思ふ。天公が困しましめやうとすれば、人力では之を如何ともすることが出来ないものである。世の人が運命を抑へやうとするのは、もともと無理である。昆陵（常州）も高山（惠山）も、泉の清く甘いことは、二浙に甲であるのは、錫があるからである。陸羽も（陸子は陸羽、字を鴻漸といふ。性、茶を嗜み、茶經三篇を著す。）此の清泉に味を遣れた。それに就いて思ふのは、弟君の惠山老である。（仲氏は弟をいふ、詩經に、仲氏吹簫。）早く衣を拂つて此山を占斷し、長へに耳を洗うて世外に超然たることである。山頭から湖を望めば、湖光が眼を灑（ちらす）する。山下で足を濯へば、波が指に生ずる。倘容して王羲之は仙人の居る金堂玉室を問うて、例の嵇康と石髓（仙人は石髓を服す）を留めたことを記す。

秀州報本禪院鄉僧文長老方丈

秀州報本禪院鄉僧文長老方丈

萬里家山一夢中、
萬里の家山一夢の中、
吳音漸已變兒童、
吳音漸く已に兒童を變ず。
每逢蜀叟談終日、
蜀叟に逢ふ毎に談日を終へ、
便覺峨眉翠掃空、
便ち覺ゆ峨眉の翠空を掃ふを。

【字解】【一】報本禪院、本覺寺碑記に、橋李（今の浙江嘉興縣）西郭二十七里外、有空翠亭遺址、唐宣宗時、僧某來自臨海、宿亭下、感異人夢、結庵以居、事闕、額報本禪院、宋劉僧文及主之、請建焉。

師已忘言眞得道。師已に言を忘れ眞に道を得。
 我餘搜句百無功。我れ句を搜るを餘せば百も功なし。
 明年採藥天台去。明年、藥を採て天台に去り、
 更欲題詩滿浙東。更に詩を題して浙東に滿しめんと欲す。

高一萬八千丈、周回五百里、在台州天台縣。

【一】浙東 元和郡縣志に、浙東觀察使管州七、越、婺、衢、處、溫、台、明。

【題義】此詩は、鄉談を聞いて、故國を思うたのである。紀昀いふ、三四常意寫來警動と。宋の周必大（字は子充、一字洪道、廬陵の人、自ら平園老叟と號す、著書八十一種、卒して文忠と諡す。）吳郡諸山録に、早行至本覺寺、登岸即古檣李也、舊號小長蘆、東坡過此爲文長老賦詩と見ゆ。即ち此詩である。

【詩意】久しく故郷を離れて居つて、萬里家山を夢む。賀知章は嘗て少小にして家を離れ、老大にして回る。郷音改まるなく鬢毛摧くと言つたが、今は我は吳國の言葉づかひ、漸く已に見童を變じたのである。蜀叟文長老に逢ふ毎に一日中話をする。峨眉山（嘉州に在る）の翠色が虚空を掃ふことなども念頭に浮ぶ。師（僧文長老を指す。）已に意を得て、言を忘る。眞に道がある。我は終日、詩句を搜ることの外には、何も能はない。明年は藥を採らんために天台山に行くつもりであるから、更に詩を題して浙東に題しようとする。（杜子美の詩に、更欲題詩滿青竹。）

王復秀才所居雙槍 二首 王復秀才が居る所の雙槍 二首

吳王池館徧重城。吳王池館の徧重城。

閒草幽花不記名。閒草幽花名を記せず。

青蓋一歸無覓處。青蓋一たび歸りて覓むる處なし、

只留雙槍待昇平。只雙槍を留めて昇平を待つ。

【字解】【一】王復 錢謙之の、居る所は、杭州候潮門外に在り。
 【二】秀才 秀才の二字は、始めて管子に見ゆ。虞に至つて始めて科目の稱となる。宋の時は、凡そ應舉のもの、皆、秀才と稱す。
 【三】吳王 錢謙之を指す、字は吳美、杭州臨安の人で、吳越王第一世である。錢の太祖、位に即き、錢を吳越王に封す、錢笑つて曰く、吾、豈、孫仲謀たるを失はんやと。
 【四】青蓋 青蓋車ないふ、青色のおほひある車、古、天子又は皇太子の乘用である。吳志、三嗣主傳に、青蓋入洛陽。

【題義】此の二首は熙寧五年十二月の作、候潮門を出で、王復の園居に過ぎつて、其の植うる所の雙槍を觀て、此詩を賦したのである。

【詩意】吳王錢謙之が池館である徧重城は、閒草が生じ、幽花が開いて居るが、其の名を知らない。青蓋が一たび歸つて覓める所がない。ただ二つの雙槍を此地に留めて昇平の世を待つのみである。（晉書の陳訓傳に據るに、吳の孫皓の時、錢塘の湖開く。或はいふ、天下當太平、青蓋入洛陽と。皓は以て訓に問ふ。訓曰く、臣止能く氣を望む。湖の開塞に達する能はずと。退いて其の友に告げて曰く、青蓋入洛、將に與榭榭の事あらんとすし。尋で吳が亡びた。榭は棺のことである。古の國君などは凡そ三重の棺を用ゐる、一番外なるを榭、（是は預め墓穴に入れてある。）其の次を棺とし、一番内

なるを概とする。(厚さは柳八寸、棺六寸、櫨四寸)別に概の字がある。棺の別名で、棺に屍の入りたるを概といふ。さて輿と概とは、古へ國君が敵國に攻め落され、自ら出でて降るときは式で、不吉の字面である。自ら死罪を期し、必ず殺される覺悟で、預め概を作り、臣子をして之を輿して、己の後に隨從せしめる。(謝罪の極である)又、衝壁とは、降参しようとする諸侯が己の口に壁をくはへることである。これは、たとひ、降参にもせよ、矢張、一種の會見に外ならないから、會見の例にならひて、壁を執りて進物としようと思ふ。併し、兩手を縛られて居るから、已むなく口に衝むのである。

凜然相對敢相欺

凜然として相對して敢て相欺く、

直幹凌空未要奇

直幹空を凌いで未だ奇を要せず。

根到九泉無曲處

根は九泉に到つて曲處なし、

世間惟有螿龍知

世間惟有螿龍の知るあり。

【字解】(一) 九泉、地下をいふ、

阮瑀が詩に、冥冥九泉室。燕の太子

丹は恨を懷いて九泉に入り、龍蛇の

壁に鼻へて、身を存したと傳ふ。(二)

螿龍、螿は蟲類が土中などにかくれ

る。易蒙辭に、龍蛇之蟄、以存身也。

【詩意】古楡は凜然(勢のりりしく引きしまる貌)として相對して敢て相欺く。真直な幹は空を凌いで(一本に凌雲・臨空などに作る)居るが、奇を要しては居ない。又、其の根は深く地下に入つて曲れる處がない。廣い世間に、ただ螿龍が知つて居るのみである。(楡を詠じて、其の世に知らるるなきを嘆じ、以て自ら況べたのである。東坡は熙寧の間に於て、王安石と新法を論じて慚はず、しばしば斥逐された。其の御史の獄に繋がれたとき、時の相は此の詩を進呈していふ、末句に、不臣の意がある。神宗曰く、詩人の詞、安んぞ此の如く論すべけんや、彼自ら楡を詠するのみ、何ぞ朕が事に預らうぞと。時相は語が塞がつたといふことである。)

【餘論】續通鑑に、中丞李定・御史舒亶論劾、自熙寧以來、作爲文章、怨謗君父、王珪(字は禹玉)復舉劾詠楡詩曰、根到九泉無曲處、世間惟有螿龍知、今、陛下飛龍在天、軾欲求之地下之螿龍、不臣孰甚焉、帝曰、彼自詠楡、爾預朕事。また、王定國が聞見近錄に、王和父嘗言、蘇子瞻在黃州、上數欲用之、王禹玉(王珪)輒曰、軾嘗有以此心、惟有螿龍知之句、陛下龍飛在天、而不敬乃反求知螿龍乎、章子厚曰、龍者、非獨人君、人臣亦皆可言龍也、上曰、自古稱龍者多矣、如荀子八龍、孔明臥龍、豈人君也、及退、子厚詰之曰、相公乃欲覆人家族、邪、禹玉曰、此舒亶言爾、子厚曰、亶之唾、其亦可食乎と見ゆ。胡荅溪いふ、東坡、御史の獄に在るとき、獄吏問うて曰く、楡の詩に、根到九泉無曲處、世間惟有螿龍知、譏諷する無きありやと。東坡答へて曰く、王安石が詩に、天下蒼生望霖雨、不知龍向此中蟠、とある、此龍なりと。獄吏は之が爲に一笑了さうである。(王文誥いふ、王安石不知龍向此中蟠句、公所本也、其後鞠案、即舉王安石以對、と。)

宋叔達家聽琵琶

宋叔達の家に琵琶を聴く

數絃已品龍香撥

數絃已に品にす龍香の撥

半面猶遮鳳尾槽

半面猶は遮る鳳尾の槽

新曲從翻玉連鐐

新曲は從つて翻す玉連鐐

舊聲終愛鬱輪袍

舊聲終に愛す鬱輪の袍

夢回只記歸舟字

夢回つて只記す歸舟の字

賦罷雙垂紫錦條

賦し罷んで雙び垂る紫錦條

何異烏孫送公主

何ぞ異らん烏孫に公主を送るに

碧天無際雁行高

碧天際なく雁行高し

以東坡管領湖山、宜有高唱、而此卷管策之作、却不甚多、豈更事樂心之故耶

東坡湖山を管領するを以て、宜しく高唱するあるべし。而して此卷管策の作、却て甚しく多からず、豈更事樂心に樂へるの故なるか。

輪邊 白樂天が琵琶行に、猶抱琵琶半遮面。

有金縷紅文、盛成雙鳳。明皇雜錄には、白秀貞に作る。

死世莫傳、玉連鐐入黃泉。

離自彈、主問何曲、曰鬱輪袍也。主大愛之、是年遂爲舉首。

【字解】(一) 宋叔達 宋道字は叔達、河南の人。少うして孤、力學して進士甲科に上る。弟、勉と同榜、賢士大夫と遊び、善く詩歌を爲る。

【二】 琵琶 手を以て琵琶する彈き方より名を得。手を前に推すを琵といひ、後に引くを琶といふ。長さ三尺五寸は、天地人と五行とに法り、四絃は四時に法る。其の起原を詳にしないが、漢代胡地に起つたものであらう。釋名に、琵琶本出於胡中馬上所鼓也。

【三】 數絃 論衡に、數絃之聲。【四】 龍香撥 貴妃外傳に、貴妃琵琶以龍香板爲撥。楊貴妃の琵琶は温覺檀を以て槽となし、龍香板を以て撥となす。

【五】 半面 輪邊 白樂天が琵琶行に、猶抱琵琶半遮面。揚貴妃外傳に、寺人白季貞使蜀還、進木温潤如玉、光耀可鑑、有金縷紅文、盛成雙鳳。

【六】 玉連鐐 曲の名、歐陽脩沈博士歌に、杜彬琵琶皮作絃、自從彬死世莫傳、玉連鐐入黃泉。

【七】 鬱輪袍 廣林記に、王維微時、爲岐王所知、將應舉、王令作琵琶新曲、引至公主家、離自彈、主問何曲、曰鬱輪袍也。主大愛之、是年遂爲舉首。

【八】 烏孫送公主 傅元琵琶賦序に、故老云、漢遣烏孫公主嫁昆彌、念其行道思慕、使工人知音者裁琴、筑、瑟、篋、篋之屬、作馬上之樂、以方語目之、故云琵琶、取易傳於外國也。公主、天子が女を諸侯に嫁する時、同姓の諸侯又は三公をして之を主らしめるから、公主といふ。

【題義】 宋叔達の家で琵琶を聴いたことを作つたものであるが、紀昀いふ、三四寓意と。

【詩意】 琵琶に龍香の撥を加へると、數絃の聲に、已に長短緩急がある。調を緩うして高く彈じ、節を急にして促に搗つ。鳳尾の槽で半面を遮る。新曲は玉連鐐に従ひ、舊聲は鬱輪袍を愛する。夢は回つて、只記憶するは、歸舟の二字である。賦し罷んで雙び垂る紫錦條。烏孫の國に公主(天子の女)を送るに異らない。碧天は際なく、雁行は高い。(紀昀いふ、結得無味、亦無力と。)

入北亭、命酌曰、兼與公求得佐酒者、頗善楚舞(くだらごと)、須臾引一女子至、李生視之、上有一朱字、云、天際誰歸舟、雲間辨江樹。李生其年住汴、陸長源以女嫁之、既婚、頗類比亭子所觀者、復解楚舞、果有朱書字、視之、天際之詩兩句也。

【一】 紫錦條 周靈震が詩に、西園蹴鞠醉葡萄、北里琵琶紫錦條。又、張說が琵琶賦にも見ゆ。

【二】 烏孫送公主 傅元琵琶賦序に、故老云、漢遣烏孫公主嫁昆彌、念其行道思慕、使工人知音者裁琴、筑、瑟、篋、篋之屬、作馬上之樂、以方語目之、故云琵琶、取易傳於外國也。公主、天子が女を諸侯に嫁する時、同姓の諸侯又は三公をして之を主らしめるから、公主といふ。

【題義】 宋叔達の家で琵琶を聴いたことを作つたものであるが、紀昀いふ、三四寓意と。

【詩意】 琵琶に龍香の撥を加へると、數絃の聲に、已に長短緩急がある。調を緩うして高く彈じ、節を急にして促に搗つ。鳳尾の槽で半面を遮る。新曲は玉連鐐に従ひ、舊聲は鬱輪袍を愛する。夢は回つて、只記憶するは、歸舟の二字である。賦し罷んで雙び垂る紫錦條。烏孫の國に公主(天子の女)を送るに異らない。碧天は際なく、雁行は高い。(紀昀いふ、結得無味、亦無力と。)

蘇東坡詩集 卷九

古今體詩 六十二首

元日次韻張先子野見和七夕寄莘老之作

元日、張先子野が七夕に莘老に寄するの作に和せらるるに次韻す

得句牛女夕轉頭參尾中

句を得る牛女の夕、頭を轉す參尾の中。

青春先入睡白髮不遺窮

青春先づ睡に入り、白髮窮を遺れず。

酒社我爲敵詩壇子有功

酒社我敵となり、詩壇に子は功あり。

縮頭先夏鼈實腹鄙秋蟲

頭を縮むる夏鼈に先だち、腹に實して秋蟲を鄙しむ。

莫唱裙垂綠無人臉斷紅

裙垂綠を唱ふる莫れ、人の臉の斷紅なるなし。

舊交懷賀老新進謝終童

舊交賀老を懷ひ、新進終童を謝す。

袍鶴雙雙瑞腰犀一一通

袍鶴雙雙瑞、腰犀一一通す。

小蠻知在否試問嘒嘒翁

小蠻知りぬ在りや否や、試みに問ふ嘒嘒翁に。

【字解】

〔一〕張先子野、吳興志に、張子野、烏程人、康定（仁宗の年號）進士、仕至都官郎中、致仕、年八十九卒云云。齊東野語

古今體詩 元日次韻張先子野見和七夕寄莘老之作

に、是時有兩豎先、俱字子野、其一、博州人、天壽（仁宗の年號）三年進士、歐陽公爲作墓志、其一、湖州人、天壽八年進士、宋史不立傳、故其家世不詳。【二】華老、孫覺、字伯華、官龍圖學士たり、前に出づ。【三】牛女、御覽に、周處の風土記を引き、七月七日、河鼓（牽牛星の異名）、織女二星、當會、守夜者、見天漢中、奕奕白氣、光耀五色、以此爲徵應也と見ゆ。【四】參尾中、禮記、月令篇に、孟春之月、昏參中、且尾中。孟春の月は、昏には參星南方の中央に在り、且には尾星南方の中央に在る。參星も尾星も二十八宿の一。【五】詩壇、劉仙倫が詩に、卻憐南園詩壇家。杜牧の詩に、今代風嚴將、誰登李杜壇。【六】縮頭先夏龍、王川子が月飲の詩に、北方寒龜被蛇縛、藏頭入殼如入獄。又いふ、寒龜夏龍一種味、且當以肉充其腹。腹は肉のあつもの。【七】秋蟲、唐文粹に、羅隱が秋蟲賦序を載せていふ、秋蟲蜘蛛也、致身羅網間、實腹亦羅網間。【八】驗隔紅、元稹が鶯鶯傳に、雙臉斷紅而已。陳子良が詩に、柳葉來眉上、桃花落臉紅。【九】憶賀老、李太白が憶賀老詩に、稽山無賀老。【一〇】終童、前漢の終軍傳に、年十八選爲博士弟子、後爲諫大夫、死時年二十餘、故世謂之終童。【一一】抱鶴雙雙瑞、陸龜蒙の詩に、寒鴉驚起一雙雙。樂天の詩に、魚佩羣鱗光照地、鶴銜瑞帶勢冲天。又いふ、魚龍白金隨步履、鶴衛紅綾繞身飛。【一二】腰犀、漢、西域傳贊に明珠文甲通犀翠羽之珍。【一三】小蠻、白樂天が愛妓の名、舞を善くす、樂天の詩に、楊柳小蠻腰。【一四】嘔噀翁、白樂天をいふ。雲溪友議に、李林宗、字直木、嘗謂白爲嘔噀翁云云。張子野に妾がある。故に樂天を以て之に比する。唐の賀家（字は友封）性温雅にして、多く論を持すること能はず。士友言議の際、吻動して發せず。白樂天等目して、嘔噀翁となす。

【題義】此詩は、熙寧六年正月（東坡三十八歳の時）の作である。紀昀いふ、四句意欲弄弄姿、轉似荆公一鳥不鳴之句。王荆公が鍾山の詩は、澗水無聲逸竹流、竹西花草露春柔、茅簷相對坐終日、一鳥不啼山更幽といふのである。これは梁の王籍の鳥啼山更幽を反したもので、王籍の詩意は、山の閑静を破つて、鳥が啼いたから、噪がしかるべきに一段と閑静になつたといふ意である。荆公は王籍の本意を取つて而も反した語句を用ひて居る。それで蕪苑扈言に、一鳥不鳴山更幽、有何趣味、宋人

可笑、大槩如此と評して居る。紀昀又いふ、五句爲敵字不妄、若作無敵、又與東坡不飲不令合と。【詩意】例の七夕の詩に和して、詩句を得、頭を參星・尾星の方に轉ずる。（南方を望む意）青春の事先づ睡に入り、白髪となつても、窮するを遣れない。酒社（酒宴の集り）には我は敵となつたが、詩壇（詩を作る仲間）には、君の功があらはれた。頭を縮めることは、夏の鼈に先だち、（鼈よりも優る意）腹を實すことも、蜘蛛を鄙しめる程である。舞餘裙帶綠雙垂といふは、永叔の詞だが、其をば唱へることなけれ、現に人の臉の斷紅となれるものが少くないからである。かくて舊交を回想して賀老を懐ひ、新進の俊秀である終童をば謝する。身に佩べる抱鶴・魚袋・瑞帶などは、歩に随つて躍る。そして腰犀は、一要處に通ずる、犀といふ獸の角の中心に細い穴があつて通せる状態は、人の心の相通するによく似て居る。又、因にいふが、白樂天の愛する舞妓小蠻は、現に健在なりや否や、試に嘔噀翁と言はれた白樂天にお尋ね申さう。（張子野に妾があるから、樂天を以て之に比したのである。）

正月九日有美堂飲醉歸徑睡五鼓方醒不復
能眠起閱文書得鮮于子駿所寄雜興作古意
一首答之

正月九日、有美堂に飲む、酔ひて歸り、徑に睡る、五鼓方に醒む、復眠ること能はず、起ちて文書を閲して、鮮于子駿が寄せし所の雜興を得、古意一首

を作りて之に答ふ

衆人事紛擾志士獨悄悄

衆人は紛擾を事とし、志士は獨悄悄

何意琵琶絃常遭腰鼓鬧

何の意ぞ琵琶の絃、常に腰鼓の鬧しきに遭ふ。

三杯忘萬慮醒後還皎皎

三杯萬慮を忘れ、醒後還皎皎

有如轆轤索已脫重縈繞

轆轤の索の如きあり、已に重縈繞を脱す。

家人自約飭始慕陳婦孝

家人自ら約飭し、始は陳婦の孝を慕ふ。

可憐原巨先放蕩今誰弔

憐むべし原巨先、放蕩今誰か弔する。

平生嗜羊炙識味肯輕飽

平生羊炙を嗜む、味を識る肯て輕しく飽かんや。

烹蛇啖蛙蛤頗訝能稍稍

蛇を烹て蛙蛤を啖ひ、頗る訝る能く稍稍

憂來自不寐起視天漢渺

憂へ來つて自ら寐せず、起て視る天漢の渺たるを。

闌干玉繩低耿耿太白曉

闌干玉繩低れ、耿耿たり太白の曉

【半解】有美堂 杭州園圃に、有美堂在郡城吳山。西湖遊覽志餘に有美堂在鳳凰山之頂、左江右湖、舉陳目下。【一】

五鼓 五更・五夜に同じ、午前四時をいふ。一夜を甲・乙・丙・丁・戊に分つ。甲夜は今の午後八時、乙夜は十時、丙夜は十二時、丁夜は午前二時、戊夜は四時。【二】鮮于子駿 宋史に、鮮于侁、字子駿、閬州人、作詩平淡潤粹、尤長於楚詞、蘇軾讀之九誦、謂近屈

原・宋玉、自以爲不可及也。【三】紛擾 後漢書、朱浮傳に、交易紛擾。【四】悄悄 悄悄といふに同じ、憂へる貌、詩の靡風、柏

舟に、憂心悄悄。【五】腰鼓鬧 古樂府、共戲樂に、腰鼓飾各相鼓。【六】醒後還皎皎 韓退之の詩に、數杯醜醜醉、皎皎萬

慮醒還新。【七】轆轤 廣韻に、轆轤、圓轉木也。【八】家人自約飭 云云 漢書に、原涉字巨先、或讀涉曰、子本吏二千石之世、

結髮自修以行、喪推財、禮讓爲名正、復、饋取仇、猶不失仁義、何故自放縱爲輕俠之徒乎、涉應曰、子獨不見家人寡婦、耶、

自約敷之時、豈乃慕宋伯姬及陳孝婦、豈爲盜賊所汚、遂行淫佚、知其非禮、然不能自還、吾猶此矣。【九】烹蛇啖蛙蛤 蛇蛤、

韓退之が南食詩に、我來嘗鮑鮑、自宜味南菜、惟蛇膏所饒、實俾口眼揀。又、答柳柳州食蝦蟆詩に、強號爲蛙蛤、於實

無所較、余初不下喉、云云。【一〇】龍精 龍精は漸く進む貌、戰國策に、精精食之。【一一】玉繩 星の名、玉衡の北に

在る、張衡の賦に、上飛圓而仰眺、正觀瑤光與玉繩。

【題義】此詩も前詩と同じく、熙寧六年正月の作である。(東坡が子駿の詩に答へた時は、子駿は利州

に在つた) 庚溪詩話に、嘉祐初、龍圖閣直學士、尙書吏郎中梅公儀守杭、上特製詩寵賜、其首章

曰、地有吳山美、東南第一州、梅既到杭、遂建堂山上、名曰有美、歐陽修爲記とある。有美堂に

飲み、酔うて歸り、夜起きて此一首が出来たのである。紀昀いふ、入手直插兩喻、筆力奇峭と。又

いふ、烹蛇二句、比勉強從時。又いふ結處少落、窠臼と。窠臼とは、常を蹈み、故を襲ぐの謂であ

る。

【詩意】衆人は交易紛擾を事とし、志士は獨悄悄(しほしほと憂へる)として居る。琵琶の絃聲が

常に腰鼓の鬧しし戲樂に遭ふやうなもので、これは、そもそも何の意ぞ。酒を呼ぶ三杯、暫く酔ひて、

憂を忘れるも、醒めると、復、心頭に萬慮が新になる。恰も轆轤の索のやうで、而も今は已に縈繞を

脱する。家人が自ら約飭(つづまやかに、いましめる)する時は、始は陳婦の孝を慕つて居る。併し、

境遇が思想を變へる。昔、漢に原涉といふ人があつた。或人、涉を讒つて、君は吏であつた日は、自ら修めて仁義を失はなかつたが、何故に今はかく放縱にして輕俠の徒となつたのかと言つたとき、涉は應へて、子は家人寡婦を見ないか、約働の時には、意では宋の伯姬や陳の孝婦などの行を慕つて居たが、一旦盜賊に身を汚されてからは、遂に淫佚を行つて非禮を知りつつも、自ら還ることの出來ないものがある、之と同じである、と言つたさうである。原巨先の放蕩をば、今、誰か弔する。平生羊の炙り物を嗜み、其の美味を知つて居るが、肯て輕しくは飽食しない。蛇を烹たり、蛙蛤を啖つたりする。最初は、喉を下らなかつたが、近頃は亦よく稍稍蠶食する。憂へ來つて寝ても寐られない。起きて大空を仰いで天の河の渺渺たるを視る。闌干（闌干と同じ）に當つて玉繩星が低れて居る。丁度、曉に向はうとした時分で、太白星が耿耿として大空に懸つて居る。

次韻答章傳道見贈

次韻して章傳道の贈られしに答ふ

竝生天地宇。同閱古今宙。
視下則有高。無前孰爲後。
達人千鈞弩。一弛難再彀。
下士沐猴冠。已繫猶跳踉。

竝に生ず天地の宇、同じく閱す古今の宙。
下を視れば則ち高きあり、前なく孰か後を爲さん。
達人は千鈞の弩、一たび弛めば再び彀き難し。
下士は沐猴の冠、已に繫いで猶ほ跳踉す。

欲將駒過隙。坐待石穿溜。
君看漢唐主。宮殿悲麥秀。
而況彼區區。何異壹醉富。
鷄鵠非所養。俯仰眩金奏。
獨體有餘樂。不博南面后。
嗟我昔少年。守道貧非疚。
自從出求仕。役物恐見囿。
馬融既依梁。班固亦事竇。
效贖豈不欲。頑質謝鑄鏤。
仄聞長者言。婢直非養壽。
吐面慎勿拭。出勝當俯就。
居然成懶廢。敢復齒豪右。
子如照海珠。網目疎見漏。
宏材乏近用。巧舞困短袖。

駒を將りて隙を過らんと欲し、坐して石を穿つ溜を待つ。
君看よ漢唐の主、宮殿麥秀を悲む。
而るを況んや彼の區區、何ぞ壹醉の富めるに異らんや。
鷄鵠養ふ所にあらず、俯仰金奏に眩す。
獨體餘樂あり、南面の后に博へず。
嗟我昔少年、道を守りて貧しきも疚しきにあらず。
出でて仕を求めしより、物に役して囿せらるるを恐る。
馬融は既に梁に依り、班固亦竇に事ふ。
贖に效ふ豈欲せざらんや、頑質鑄鏤を謝す。
仄に聞く長者の言、婢直壽を養ふにあらず。就くべし。
面に吐くも慎んで拭ふこと勿れ、勝に出づる當に俯して。
居然懶廢を成す、敢て復豪右に齒せん。
子は海を照す珠の如きも、網目疎にして漏るるを見る。
宏材は近用に乏しく、巧舞は短袖に困む。

坐令傾國容臨老見邂逅
吾衰信久矣書絕十年舊
門前可羅雀感子煩屢叩
願言歌緇衣子粲還予授

坐に國を傾むくる容をして、老に臨んで邂逅を見しむ。
吾が衰ふること信に久し、書絶ゆ十年の舊しき、
門前雀を羅にすべし、子の屢叩くを煩はさるるに感じ、
願くは言に緇衣を歌はん、子の粲たる子が授を還さん。

【字解】【一】章傳道 章傳字は傳道、閩の人、吳郡文粹に、蘇子美が答詩内の二句を載せていふ、南園章其氏、傳名字傳道と。
【二】天地字、古今山 尸子に、四方上下曰字、往古來今曰宙。此の語は、淮南子にも見ゆ。【三】達人 左傳、昭公七年に、吾聞
將有達者、曰、孔丘、聖人之後也。又いふ、聖人有明德者、若不富世、其後必有達人。晉康が絶交の書に、柳下惠、東方朔、
楚人也。賈誼が屬鳥賦に、達人觀兮、物亡不可。【四】千鈞弩 南史、宋の高祖紀に、軍中多萬鈞、神弩所至、莫不摧陷。
戰國策に、猶以千鈞之弩潰也。唐の范傳正が文に、千鈞之弩、一發不中云云。【五】一弛一振 禮記、雜記篇に、張而
不弛、文武非能也、弛而不張、文武非爲也、一張一弛、文武之道也。穀は、廣雅に、穀、張也と。【六】沐猴冠 楚の人は、獸
を沐猴といふ。漢書、項籍傳に、韓生曰、人謂楚人沐猴而冠、果然。【七】將駒過隙 莊子、知北遊に、人生天地之間、若白駒
之過隙、忽然而已。【八】石穿罅 漢、枚乘の傳に、太山之謂穿石、漸靡使之然也。【九】悲壽秀 史記、宋の世家に、箕子
朝周、過故殷虛、感宮室毀壞生禾黍、乃作麥秀之詩曰、麥秀漸漸兮、禾黍油油、彼狡僞兮、不與我好兮。【一〇】壹醉當
詩の小雅、小宛に、彼昏不知、壹醉日富。箋にいふ、無知之人、飲酒一醉、自謂日益富也と。【一一】鷗鷺 海鳥の名、書、爰居
に作る。左傳、文公二年、臧文仲不知者三、其一祀爰居。莊子の至樂篇に、海鳥(其名を爰居といふ)止於魯郊、魯侯御(迎へる)
而觴之于廟、奏九韶以爲樂、具太牢以爲膳、鳥乃眩視憂悲、不敢食一粟、不敢飲一杯、三日而死此、以己養愛鳥也、非以
鳥養愛鳥也。【一二】倘有餘榮 云云 莊子の至樂篇に、莊子之楚、見空桐、斲以爲楫、而問之、夜半、倘有見夢曰、死
無君於上、無臣於下、亦無四時之事、從然(從容の意)以天地爲春秋、雖南面王樂、不能過也と。【一三】貧非疾 莊

子、讓王篇に、原憲應子貢曰、意聞之、無財謂之貧、學而不能行、謂之病、今憲貧也、非病也。【一四】恐見圓 莊子、
齊物論に、方且爲物役、徐無鬼に、皆聞於物、聞は籠罩の意。【一五】馬融既依 馬融字は季重、後漢の大儒。鄧太后の朝に臨み
し時、融は風痺を以て禁錮に遭ふ。其後、鄧氏に怒り、敢て復、勢家に忤はなす。遂に鸞翼の爲に草して李固を奏す。又、大將軍西
第の頌を作る。【一六】班固亦事 班固字は孟堅、扶風の人。永元の初、大將軍竇憲に従つて匈奴を討ち、功があつた。憲が敗れる
に及び、固、先づ坐して、官を免ぜられ、既にして獄に繋がれて死んだ。【一七】效嘆 莊子、天運篇に、西施病心而顰其里、其
里之隣人、見而美之、歸亦捧心而顰其里。【一八】頑質 後漢書、橋元傳に、特以頑質見納君子。【一九】銷鋒 張華の賦に、
不煩銷鋒之銷鋒。【二〇】仄閑長者言 司馬遷が任安に答ふる書に、僕雖能驚、亦側聞長者遺風矣。【二一】辨直 剛直にしても
とる。離騷に、鼓桴直以忘身兮、終然歎乎羽之野。後漢書に、辨直之風、于斯行矣。【二二】雙壽 史記、老子傳に、以其修
道而美壽也。【二三】吐而慎勿拭 唐書、婁師德の傳に、其弟之官、教之耐事、弟曰、人有唾面、漱之乃已、師德曰、未也、
漱之、是適其怒、正使自乾耳。【二四】居然 其の儘、坐して動かない。晉書に、居然是出羣之器。【二五】豪右 右は右族、後
漢書、羊祜傳に、帝拜祜河南尹、禁制豪右、京師傾之。左思の詩に、豪右僧尼陳、張衡が四愁の詩序に、豪右兼井之家。【二六】巧
細目疎 唐書の狄仁傑傳に、可謂滄海遺珠矣。前漢志に、網漏吞舟之魚。【二七】近用 後漢書に、器博者無近用。【二八】巧
舞困短袖 史記に、韓非曰、長袖善舞。梁簡文帝の詩に、工歌巧舞入人意。【二九】傾國容 前漢、外戚傳に、李延年
歌曰、北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國。【三〇】邂逅 詩、鄘風に、邂逅相遇、道我願兮と見えて、思ひが
けなくめぐり合ふこと。毛傳にいふ、解悅之貌と。【三一】子粲還子授 詩、鄘風、緇衣に、緇衣之宜兮、敝子又改爲兮、適子之
館兮、還子授子之樂兮。樂は眞白に搗いた米。

古今體詩 次韻答章傳道見贈

【題義】章傳道は、一老者である。東坡に稍卑うして時宜に適ふやうにと勸める。東坡は、爾の如く
自ら貶すと、終に俗に諧はないから、爲さないのであると言つた。此詩の歸宿する所は此意である。
紀昀いふ、鋒銜太露、而縱橫之氣、自爲可愛、と。

【詩意】共に天地の宇に生じ、同じく古今の宙を閱する。下を視るのは、己が高きに居るからである。後を爲すといふのも、前がある爲めで、前なくば誰か後を爲さうぞ。達人（達者といふに同じ、道理に通達した人）が、千鈞の弩も、一たび弛める（弦を落す）と、再び發き難い。低級の人は、沐猴に冠を著けたやうなもので、已に頭上に繫いで、なほ跳騾する、（跳ははねる、騾は走る意）一方に駒を將ゐて戸隙を過ぎらうとし、他方に於て、坐して溜の石を穿つのを待つて居る。併し、榮枯は移る世の中であるから、漢や唐の人君が堂堂たる宮殿も、いつしか毀壞して、禾黍を生じ、麥秀の詩を作つて、之を悲しむやうになつた。まして、世の區區たる輩の生涯は、彼の飲酒一醉、酒の氣に乗じ、おごり氣が出でて、大分限の量見となるのと異ならない。さて、鷓鴣（海鳥）は、人を養ふ道で養ふべき所のものでない。昔、海鳥が魯郊に止まつたとき、魯侯は迎へて之を廟に薦し、舜の樂を奏したり、太牢を具へたりすると、鳥は乃ち眩視憂悲し、敢て一欄を食はず、敢て一杯を飲まず、三日にして死んだといふことである。己を養ふ養ひ方で鳥を養はうとしたからである。故に海鳥の俯したり、仰いだりして、金奏に眩するの無理はない。又、かの獨體にも、餘樂があつて、南面の君の樂にも易へられない。莊子が楚に之き、途中に獨體を見る。鞭を以て打ち、之を枕にして臥す。夜半に獨體曰く、死せば上に君なく、下に臣がない。また四時の事もなく、從容として天地と壽命を同うす。其の樂たる、南面の王と雖も之に過ぎないと言つたさうである。ああ、我も昔は少年、道を守つて貧に居るも、心の中は疚しくはない。然るに出でて仕を求めてからは、物に役され、圍されることを恐れた。昔馬

融は、梁冀に依つたので、正直の士に羞とされた。又、班固の寶憲に從つたことも、感服しない。梁冀、寶憲は、竝に是れ漢時の人、時君が不明であるに因つて、驟に顯位に躋つたが、驕暴であつて、威福を竊み、事を用ゐた。そして馬融・班固の兩儒は、竝に之に依託した。東坡は當時の執政大臣を詆毀して、我は班固・馬融が苟容依附に效ふことが出来ない。頑質の我は鑄鑿（彫刻する）することを謝すると言つたのである。側に聞けば、長者の言は、剛直にして理に戻つて居る。故に天壽を養ふものでない。唐の婁師徳は、其弟の赴任するとき、誠めて、人有睡面、潔之、是違其怒、正使自乾一耳と言つたさうである。韓信を學んで胯下に出づる、當に伏して就くべきである。もとの儘に動かさないで、やがて傾廢をする。敢てまた豪強のものに竝ぶことをしない。子は海を照らす珠の如きも、網の目が疎いために漏れたに違ひない。宏材は近用に乏しい。長袖は善く舞ふ。故に巧舞は、短袖に苦む。坐に美人をして老に臨んで思ひがけもなく相遇はしめる。余の衰へたのも久しい。音書も絶え、十年の舊しき、人の出入稀となつて、門前に雀の網を置くことが出来た。子が屢訪問されたのに感じ、願くは言に詩の細衣の章、即ち細衣の宜しき、敵れなば又改爲せん、子の館に適き、還らば予子に榮を授けん、を歌はう。榮は眞白の米で、飲食の中で、最も貴い所から、馳走の意に用ゐる。子の榮たる予に授を還すことであらう。（寄せた詩の返しがあることと信ずる。）

法惠寺横翠閣

法惠寺横翠閣

【字解】法惠寺 杭州圓

朝見吳山橫。

朝に吳山の横を見、

暮見吳山縱。

暮に吳山の縦を見る。

吳山故多態。

吳山は故態多く、

轉折爲君容。

轉折して君の爲に容くる。

幽人起朱閣。

幽人朱閣を起し、

空洞更無物。

空洞更に物なし。

惟有千步岡。

惟千歩の岡あり、

東西作簾額。

東西に簾額を作す。

春來故國歸無期。

春來りて故國歸るに期なく、

人言秋悲春更悲。

人は秋を悲しといふも春は更に悲し。

已泛平湖思濯錦。

已に平湖に泛びて濯錦を思ひ、

更看橫翠憶峨眉。

更に横翠を見て峨眉を憶ふ。

雕欄能得幾時好。

雕欄能く幾時の好きを得る、

不獨憑欄人易老。

獨欄に憑る人の老い易きのみならず。

に、法惠寺在大井巷、吳越王錢氏

建、舊額吳慶寺、治平二年改賜今

額。臨安志には、西林法惠院、乾德

元年吳越王建、舊名吳慶寺、詳符

中、改今額。西湖遊覽志に、自清

波門折而南爲方家橋、橋畔舊有

法惠院、慶曆間、法言作西軒於此。

【三】吳山、城中に在る。吳の人が

子胥を山上に祠る。因つて胥山と名

く。【四】幽人、易の履卦に、履

道坦坦、幽人貞吉。【五】朱閣、雕

欄が詩に、元雲籠朱閣。【六】空

洞更無物、晉書に、王導嘗枕周顛

膝而指其腹曰、卿此中、何所有

也、答曰、此中空洞無物、然足容

卿腹數百人、導亦不以爲忤。【七】

濯錦、李賀の詩に、彩雲濯錦著霜

痕。【八】峨眉、成都の濯錦江を

いふ。吳國考に、錦江在成都府城南、

一名汶江、織錦濯錦此則鮮麗、其地

百年興廢更堪哀。

百年の興廢更に哀しむに堪へたり、

懸知草莽化池臺。

懸に知る草莽も池臺に化するを。

遊人尋我舊遊處。

遊人我が舊遊の處を尋ね、

但覓吳山橫處來。

但吳山の横はる處を覓めて來る。

賢示現處、屋皆以板爲之。【一】懸欄、ほりものしたる欄干、李後主の詞に、雕欄玉砌應猶在。【二】憑欄、韓偓の詩に、紫泥封後洞憑欄。【三】懸知、詩人常用の語、懸は度る意。懸知居經緯、懸知訝此心、懸知獨有子雲才、懸知的有千年覽、懸知此地是神仙など、用例が多い。

【題義】法惠寺の横翠閣に登臨し、吳山が縦横の奇なるを説く。百年興廢云は、雍門周が所謂曲池

既已平、高臺亦已傾の意である。紀昀いふ、短峭而難以曼聲、使人愴然易感と。(曼聲は長い聲、

列子に曼聲長歌の字面あり。)

【詩意】朝に吳山の横面を見、暮に吳山の縦面を見る。縦も横も亦、奇である。吳山は元來、姿態が

多く、轉折して君の爲に容つくる。(紀昀いふ、起得峭拔と。峭拔とは、用筆が高く拔んでて俗を絶つ

こと。)幽人(世を避けて居る人)が此の勝地に横翠閣を起した。閣は空洞で更に物がなない。惟千歩の

岡があつて、東西に簾額を作して居る。春になつても、故國に歸へる期がないから、人は秋を悲しと

いふも、我には春が更に悲しい。已に平湖に泛んで、成都の濯錦江を思ひ、此の横翠閣を看ては嘉州

の峨眉山を憶ふ。(東坡は蜀の人であるから、故にいふ。)雕刻をした美しい欄干も、能く幾時の好看を

得るであらう。獨、欄干に憑る人の老い易いばかりでなく、百年興廢の跡に想到すると、更に哀しいものがある。遙に度つて知る草莽の地も、いつしか立派な池臺と化して、遊覽の人も我が舊遊んだ處を尋ねて、但、吳山の横はる所を覓め來ることであらう。(詩醇の評に、清麗芋眠、神韻欲絶と見え居る。芋眠とは草の深く茂れる貌で、陸機の賦にも、清麗芋眠とある。)

祥符寺九曲觀燈

祥符寺九曲觀燈

紗籠擎燭迎門入。

紗籠燭を擎けて門に迎へて入る、

銀葉燒香見客邀。

銀葉香を燒いて客を邀ふるを見る。

金鼎轉丹光吐夜。

金鼎丹を轉じて光夜に吐き、

寶珠穿蟻鬧連朝。

寶珠蟻を穿ちて鬧しきこと朝に連る。

波飜焰裏元相激。

波飜裏に翻つて元相激し、

魚舞湯中不畏焦。

魚は湯中に舞ひて焦るるを畏れず。

明日酒醒空想像。

明日酒醒め空しく想像すれば、

清吟半逐夢魂銷。

清吟半は夢魂を逐うて銷す。

【字解】(一) 祥符寺九曲 杭州

圓經に、大中祥符寺在城北。臨安志

に、錢塘門外有九曲路、又有九曲

法濟院、九曲寶嚴院。(二) 紗籠

李賀の詩に、燭光高懸照紗籠。白

樂天の詩に、紗籠歌殘燭。(三)

銀葉燒香 諸香名譜に、燒香餅子一

枚以灰蓋、或用一薄銀葉子尤妙、

置香在上、常令烟得所。香譜に、

燒時以雲母銀葉襯之。(四) 金鼎 江淹の別賦に、鍊金鼎而方鑿。抱朴子に、黃帝九鼎神丹經に、第九鼎之丹服之、三日得仙。(五) 寶珠穿蟻 小説載、有以九曲寶珠欲穿之而不穿、問之孔子、孔子教以蠶脂於線、使蟻通焉。唐、楊海が蟻穿九曲珠賦に

蟻爲質兮微渺、珠有礙而虛圓、苟一縷之是繫、雖九曲而可穿。【六】 魚舞湯中 云云 琉璃瑤中、魚を其の中に置く、其の後、燈を點するに、魚は遊泳して畏れなかつた。

【題義】 此詩は、熙寧六年正月の作。九曲法濟院で、法の燈籠を觀た感想を述べたのである。

【詩意】 祥符寺に至ると、紗で製した燈籠の燭を擎けて、衆子を門に迎へる。そして案内する。又、銀葉に香を燒いて客を邀へるのを見る。仙術に用ゐる金鼎で、例の丹藥を鍊ると、其の光が夜に吐き、寶珠を蟻が穿つて鬧しきことが朝まで連る。波は儀裏に翻へつて、元相激し、魚は湯中に舞つて焦れることも畏れない。昔、三國の時に、方術の士があつて、藥を魚に傳け、沸鼎の中に投じた所、魚は徘徊して死ななかつたさうである。明日酒が醒めて、空しく想像すると、清吟は半は夢魂を逐うて銷えて行く。

【餘論】 正月十五日を上元といふ、昔は上元張燈の風習がある。史記、樂書に、漢家祀太一、以昏時祠到明とある。今人の正月望日、夜遊觀燈は其の遺事である。事類全書に、唐太宗の時、三元夜を禁せず、上元には乾元門に御し、中元、下元は東華門に御す。そして上元の游觀が、獨盛である。又、通鑑、唐の僖宗紀に、胡三省註に、道書以正月十五日爲上元、七月十五日爲中元、十月十五日爲下元とある。

上元過祥符僧可久房蕭然無燈火

上元に祥符の僧可久の房に過る、蕭然として燈火なし

古今體詩 祥符寺九曲觀燈 上元過祥符僧可久房蕭然無燈火

門前歌舞鬪分朋。

門前歌舞分朋を鬪はす、

一室清風冷若冰。

一室清風冷なること氷の若し。

不把琉璃閒照佛。

琉璃を把つて閒に佛を照らさず、

始知無盡本無燈。

始めて知る無盡は本燈なきを。

多往就見、時有饋之米者、所取、不過數升、以瓶貯之、凡上、日取二三合食之。【三】開分朋、庚信が春の賦に、分朋入射堂。舊唐書の中宗紀に、自芳林門入集於梨園球場、分朋拔河。拔河は、古は之を牽釣といふ、今の拉繩の戲である。【四】冷若氷、一本に欲氷に作る。【五】無盡本無燈、維摩經に、法門名無盡燈、譬如一燈然百千燈。

【題義】熙寧六年の上元に祥符寺に詣で、僧可久の僧房に過つて、上元の張燈を觀ようとしたが、蕭然として燈火がないので、此詩が出来たのである。武林梵志に、法師可久、錢塘錢氏子、喜爲古律詩。東坡の郡に監たりしとき、日に師と詩友となる。西湖の祥符に居る。東坡は、元夕、九曲に燈を觀ようとして、從者を去り、獨行いて師の室に入ったが、了に燈火もなく、但、蘆菊の餘香を聞くのみ。歎仰して詩を留めたといふことである。

【詩意】お寺の門前では歌ひつ舞ひつ分朋を鬪はして居る。併し僧房に入ると、一室の清風は、冷かなること氷の如くであり、蕭然として燈火を見ない。そして師は琉璃を把つて閒に佛を照らさうともしない。始めて無盡は、本、無燈といふ言葉の意味が解つた。

正月二十一日病後述古遊往城外尋春

正月二十一日病後、述古遊へて城外へ往き、春を尋ぬ

屋上山禽苦喚人。

屋上の山禽、苦に人を喚び、

檻前冰沼忽生鱗。

檻前の冰沼忽ち鱗を生ず。

老來厭伴紅裙醉。

老い來つて紅裙に伴ひて酔ふことを厭ひ、

病起空驚白髮新。

病より起て空しく驚く白髮の新なるに。

臥聽使君鳴鼓角。

臥して使君の鼓角を鳴すを聴き、

試呼稚子整冠巾。

試みに稚子を呼んで冠巾を整へしむ。

曲欄幽榭終寒窘。

曲欄幽榭に終に寒窘せん、

一看郊原浩蕩春。

一看す郊原浩蕩の春。

使君鳴鼓角、使君は刺史をいふ、漢の世、太守を府君、刺史を使君といふことは、前にも述べた。晉書に、王述爲會稽、以母喪、居郡境、職之代述、止一巾、述每聞角聲、謂職之當候、已、如此者累年而職之竟不顧。後漢の公孫瓚言ふ、鼓角鳴於地中。太守の出づる、鼓角を鳴らすを得。【七】稚子整冠巾、杜子美の詩に、稚子戲成作釣釣。又いふ、笑倩傍人爲整冠。韓退之の詩に、我欲收斂加冠巾。【八】曲欄、白樂天の詩に、獨上危樓凭曲欄。【九】幽榭、鄭谷の詩に、幽榭名園臨紫陌。【10】郊原浩蕩春、杜子美の古柏行に、崔嵬枝幹郊原古。浩蕩は廣く大なること。

【字解】【一】述古、陳襄、字は述古、學者稱して古靈先生といふ、前に出づ。【二】生鱗、郭景純が遊仙詩に、閩閩西南來、碧波湧鱗起。註にいふ、徒爲圓風、水波湧然如魚鱗之起也。【三】紅裙醉、韓退之の詩に、不解文字飲、惟能紅裙。杜甫の詩に、越女紅裙滿、無厭醉嬌愁。紅裙は妓女の稱。【四】白髮新、李白の寄遠詩に、朱顏彫落盡、白髮一何新。【五】臥聽、晉書の蘇超傳に、帳中臥聽之。【六】

古今體詩 正月二十一日病後述古遊往城外尋春

【題義】此詩も熙寧六年正月の作、二十一日陳述古が、病後の東坡を邀へて城外へ春を尋ねたので、此詩がある。述古は、東坡が寄せられた詩に和していふ、郊原芳意動游人、湖上晴波見躍鱗、閒逐牙旗千騎遠、暗驚梅萼萬枝新、尋僧每拂題詩壁、邀客仍將漉酒巾、寄語文園何所苦、且來相伴一行春と。

【詩意】春が来て、屋上の山禽は、苦に人を喚んで居り、欄干の前にある氷つた沼も、水面に忽ち鱗を生ずる。(氷が解けて、波の起ること、魚の鱗の如きをいふ。)老いては、最早、紅裙に伴つて酔ふことなどは、厭である。併し病より起きて我が白髪の新なるにも驚いた。臥して鼓角の鳴るのを聞いたから、使君の出かけられたことが分つた。だから、子供を呼んで冠巾を整へしめたのである。かくては終に曲つた欄干や、幽な樹に、寂しくも窘しむことであらう。それで、郊原浩蕩の春色を一看了譯である。(紀昀いふ、二語寫出胸次)

有以官法酒見餉者因用前韻求述古爲移廚

飲湖上

官法酒を以て餉らるる者あり、因て前韻を用ひ述古に求め、爲に廚を移して湖上に飲む

喜逢門外白衣人

門外白衣の人に逢ふを喜び、

【字解】【一】官法酒 周禮に、

欲膾湖中赤玉鱗

湖中赤玉の鱗を膾にせんと欲す。

遊舫已粧吳榜穩

遊舫已に粧ふ吳榜の穩なるを、

舞衫初試越羅新

舞衫初めて試む越羅新なるを。

欲將漁釣追黃帽

漁釣を將て黃帽を追はんと欲し、

未要靴刀抹絳巾

未だ靴刀絳巾を抹するを要せず。

芳意十分強半在

芳意十分強半在り、

爲君先踏水邊春

君が爲に先踏む水邊の春。

【一】赤玉鱗 卓氏漢林に、赤玉鱗、魚也と見ゆ。【二】吳榜 晉の張載傳に、吳榜越船、不能無水而浮。楚辭の王註に、吳榜、船棹也。【三】越羅 李賀の詩に、越羅衫袂迎春風。杜子美の詩に、越羅綉錦金粟尺。【四】黃帽 黃冠といふに同じ、黃冠は田夫の服。禮記の郊特牲に、黃衣黃冠而祭。又、道士の冠をもいふ。【五】絳巾 唐の制、戎服を以て見えるものは、左に刀を握り、右に弓矢を屬し、帽首袴腰(帽首は、鉢巻、袴腰は股引と靴)を着ける。絳巾を抹するものを紅抹額といふ、乃ち帽首の謂である。韓退之の文に紅抹首髻握刀。また、元和聖德詩の註に、禹會塗山之夕、大風雷震、有甲兵千餘人、其不被甲者、以紅抹額、抹其額、自此遂爲軍容之服。【六】芳意 韓退之の詩に、芳意銷呈瑞。

【題義】此詩も前詩と同じ時の作。官法酒を餉つたものがあつたから、陳襄に約して廚を湖上に移して宴を開いたのである。

【詩意】門の外に白衣の人が酒を送つて來たのを喜ぶ。酒を助ける肴に湖中の紅魚を膾(細く切つた

酒正爲公酒。註にいふ、以公事作酒と。史記、叔孫通傳に、置法酒。【一】移廚 鄭谷詩に、花鶯移廚送晚香。【二】白衣 僊僕の衣、前にも出づ。野客叢書に、漢、官吏著皂草、其給使使役者著白。續晉陽秋に、陶潛九日無酒、出雞邊、俄望、久之見白衣人至、乃王弘送酒使也。江州の刺史王弘の使者が白衣を着て、酒を送り來つたことをい

生の肉)にしようとする。遊舫(畫舫ともいふ)には既に吳榜(船の棹)の穩かなるを備へつけた。舞衫(舞ひの衣)は、初て越羅の新しいものを試みる。漁釣をなして田夫とならうと欲するから、未だ靴を穿ち、刀を握り絳巾を抹するなど軍容の服を嚴めしくする必要も見ない。春意は十分であるから、君の爲に先登して水邊の春を尋ねやうと思ふ。

飲湖上初晴後雨 二首

湖上に飲む、初は晴れ後は雨ふる 二首

朝曦迎客豔重岡

朝曦客を迎へて重岡に豔なり、

晚雨留人入醉郷

晚雨人を留めて醉郷に入らしむ。

此意自佳君不會

此の意自ら佳なれども君會せず、

一杯當屬水仙王

一杯當に水仙王に屬すべし。

【字解】(一) 湖上 西湖の上、西湖は杭州の城西に在る。周圍三十里、其の源は、武林泉より出づ。唐より以來、東南遊賞の勝地となる。

(二) 朝曦 朝旭・朝暁、皆同じ。李德裕の詩に、含三暉於夕暈、故零

【題義】此詩も熙寧六年正月二十一日の作で、西湖の上に飲み、初は晴れ、後に雨降り、山色が空

【詩意】朝日は客を歡び迎へて、重れる岡に、うるはしい光彩を放つた。又、晚雨は人を留めて醉郷の

【題義】此詩も熙寧六年正月二十一日の作で、西湖の上に飲み、初は晴れ、後に雨降り、山色が空

【詩意】朝日は客を歡び迎へて、重れる岡に、うるはしい光彩を放つた。又、晚雨は人を留めて醉郷の

別天地に入らしめた。(醉之郷去中國、不知其幾千里也、其土曠然無涯、無丘陵阪險、其氣和平一揆、無晦朔寒暑、其俗大同、無邑居聚落、其人甚清、無愛憎喜怒、吸風飲露、不食五穀、其寢于子、其行徐徐、與鳥獸魚鱉雜處、不知有舟車器械之用、昔者黃帝氏嘗獲游其都、歸而杳然喪其天下、以爲結繩之政已薄矣、降及堯舜、作爲千鍾百壺之飲、因姑射神人以假道、蓋至其邊鄙、終身太平、禹湯立法、禮繁樂雜、數十代與醉郷隔、其臣義和奔甲子而逃、冀臻其郷、失路而道天、故天下遂不事、至乎末孫桀紂、怒而昇其糟丘、階級千仞、南向而望、卒不見醉郷、武王得志于世、乃命公旦立酒人氏之職、典司五齊、拓土七千里、僅與醉郷達焉、三十年刑措不用、下逮幽厲、迄乎秦漢、巴國喪亂、遂與醉郷絕、而臣下之愛道者、往往竊至焉、阮嗣宗・陶淵明等十數人、竝游于醉郷、沒身不返、死葬其壤、中國以爲酒仙云、嗟乎醉郷氏之俗、豈古華胥氏之國乎、何其淳寂也如是、余將游焉、故爲之記。此の意は自ら佳であるが、君には解らないやうである。一杯當に水仙王に酌むべきであらう。

水光激豔晴方好

水光激豔として晴れて方に好く、

山色空濛雨亦奇

山色空濛として雨も亦奇なり。

欲把西湖比西子

西湖を把つて西子に比せんと欲すれば、

淡粧濃抹總相宜

淡粧濃抹總て相宜し。

【字解】(一) 激豔 水の満ちて動く貌。文選、海賦に、激湍激豔。

(二) 空濛 ぼんやりと暗き貌。文選、謝元暉の詩に、空濛如薄霧。

(三) 西子 吳王夫差に寵愛せられたる美人西施をいふ。養字記に、施、

其姓也、會稽諸暨縣有西施家、句踐得諸暨縣、以獻吳王。【】淡粧濃抹、淡粧は、薄化粧のこと。濃抹は濃く化粧する、抹は塗抹の意。

【詩意】杭州西湖の上に飲み、晴雨共に景色の佳いことを、西施の薄化粧も、厚化粧も、其の風姿兩ながら宜しきに比したのである。水光の激濺として晴れて偏に好いのは、是れ濃抹。(方の字を一本に偏の字に作る)山色の空濛として雨にも亦奇なるは、是れ淡粧。(空濛を一本に朦朧に作る)西湖を西子に比すれば、淡粧濃抹兩ながら相宜し。(欲の字を一本に若に作り、總の字を兩に作る。西子を以て西湖に比するは工巧と謂ふべきである。)

【餘論】東坡の句に、只有西湖似西子。又いふ、西湖真西子と。王文誥いふ、此是名篇、可謂前無古人、後無來者。公凡西湖詩、皆加意出色、變盡方法、然皆在錢塘集中、其後帥杭、勞心裁賑、已無復此種傑構云云、と。廣輿記、浙江、杭州府の條に、府城西周三十里、漢時、金牛見湖中、人言明聖之瑞、舊稱明聖湖、蘇軾守郡上言、西湖有不可廢者五、乃築長堤、以便行者、堤上有六橋、云自紹興建都、君臣相競嬉游於此、金主亮聞而羨焉、卒起投鞭渡江之志、論者以西湖爲尤物破國、比之西施、亦稍過矣と見ゆ。又、舊西湖に十景ありと稱す曰く、平湖秋月、蘇隄春曉、斷橋殘雪、雷峯落照、南屏晚鐘、鞠院風荷、花港觀魚、柳浪聞鶯、三潭印月、兩峯捕雲。

往富陽新城李節推先行三日留風水洞見待

富陽新城に往き、李節推先づ行く、三日風水洞に留り待たる

春山礫礫鳴春禽。

春山礫礫として春禽鳴く、

此間不可無我吟。

此間に我が吟なかるべからず。

路長漫漫傍江浦。

路は長く漫漫として江浦に傍ふ、

此間不可無君語。

此間に君が語なかるべからず。

金鯽池邊不見君。

金鯽池邊君を見ず、

追君直過定山邨。

君を追うて直に過ぐ定山の邨。

路人皆言君未遠。

路人皆言ふ君未だ遠からず、

騎馬少年清且婉。

騎馬少年清にして且つ婉と。

風巖水穴舊聞名。

風巖水穴舊名を聞く、

只隔山溪夜不行。

只山溪を隔てて夜行かず。

溪橋曉溜浮梅萼。

溪橋曉に溜りて梅萼を浮ぶ、

知君繫馬巖花落。

知る君馬を繫いで巖花の落ちたるを。

出城三日尙透遲。

城を出でて三日尙は透遲、

妻孥怪罵歸何時。

妻孥怪罵す歸るは何れの時ぞと。

【字解】【】富陽新城 前漢地理志に、秦分三十六郡、富春屬會稽、漢哀帝封河間孝王慶子元、爲富春侯、晉武帝、太元中、改曰富陽、古蹟考に、富陽城、唐、咸通中、縣令趙勣所築。【】李節推 李節推のこと。宋史、職官志に、軍府幕職有節度推官。臨安志に、節度推官廳、在府前、近民坊焉。【】風水洞 浙江杭縣の南二十里に在る。洞極めて大、水流洄れず、立夏清風自ら生じ、立秋則ち止む。故に名く。【】礫礫 鳥の聲、礫礫の字面は、皮日休の詩に、礫礫如蝦蟇。蘇轍が除日の詩に、爆竹聲礫礫などあるが、東坡のここに用ゐたは格礫の意である。格礫は、鷓鴣の鳴く聲。本草に、鷓鴣生江南、形似母雞、鳴聲如日行不得也、奇哥。【】金鯽池 開化寺、六和塔の金魚池は

古今體詩 往富陽新城李節推先行三日留風水洞見待

世上小兒誇疾走。世上の小兒は疾走に誇る、
如君相待今安有。如し君相待たば今安くに有る。

寺後に在り。山園で、水底に金魚
が多い。東坡詩話に、蘇頌、蘇子美六
和塔詩、松橋待金魚、竟日獨留留、

初不啻此語、及俸(佐貳の官)錢、乃知寺後池中有此魚如金色。【六】定山、杭州園經に、定山在錢塘舊治之西南四十
七里。臨安志に、定山、高七十五丈、周廻七里一百二步、山下居民數百家。【七】清且純、詩の節風、野有蔓草、篇に、有美一
人、清揚婉兮。眼の清くして眉の揚りたるをいふ。【八】紫馬巖花落、杜子美の詩に、紫馬巖林花動。【九】蓬蓬、一本に蓬蓬に作
る。斜に行く貌。淮南子に、河邊蓬、故能遠。【一〇】疾走、爾雅の疏に、迅疾走也とある。

【題義】熙寧六年正月二十七日、東坡は杭州に在つて部を行き、風水洞に遊んだとき、本州の節度
推官李億が先づ行き、風水洞に留つて、東坡の到るを待つて居つた。此詩は此時の作である。紀昀い
ふ、磊磊落落、起法絶佳と。又いふ、一結索然と。

【詩意】春の山には磔磔と鳥が鳴いて居る。之を聞けば、我は一詩なかるべからず。道路は長く、漫
漫として江浦に傍うて居る。此間には、君の一語がなかるべからずと思ふ。六和塔の金魚池の邊にも
君の姿を見なかつたから、直に追かけて定山郷に至つた。路人に尋ねると、皆いふ、君は未だ遠くは
行かない。馬に騎つて居る少年で、清にして且つ婉(美好をいふ)である。風水洞の風水洞は、
舊から名高い。(臨安志に據ると、風水洞は、楊村の慈巖院に在つて、舊名は恩徳院であつた。白居易
の遊恩徳寺詩に、雲水埋藏恩徳洞、管樞東縛使君身とある。)只、山溪を隔てて居るので、夜分は行
くことが出来ない。溪に架けた橋は、曉に水が溜りて梅萼を浮べて居る。君が馬を繫いで巖花の落ち

たのであることが知れた。城を出てから三日も経たが、尙ほ斜に逶迤として行く。妻孥は怪み罵つ
て、家に歸るは何時であらうぞと言つた。(王文誥いふ、歸何時、乃未歸之詞也、歸何遲、乃已歸之
詞也、詩雖三代爲設想、必既未歸、自應作歸何時、今既定時字韻、則上句之尙逶迤、應仍作遲
遲と。)世上の小兒は疾走に誇る。(世人の小人が多く急進を務むるを譏つたのである。)如し今、君が
相待たば、今何處にあるか。(王文誥いふ、憂然便往奇絶と。)

風水洞二首和李節推 風水洞二首、李節推に和す

風轉鳴空穴、泉幽瀉石門。
虛心聞地籟、妄意覓桃源。
過客詩難好、居僧語不繁。
歸瓶得冰雪、清冷慰文園。

【字解】【一】風水洞、前詩の字解に詳なり。長慶三年、秋九月、白樂天來遊し、泉石竹木を觀て詩を留む。【二】地籟、籟は聲
の出る所、莊子、齊物論に、南郭子綦調類成子游、曰、汝聞人籟而未知地籟也。【三】妄意、莊子、胠篋篇に、妄意室中之藏、衆
也。【四】桃源、陶淵明の桃花源記に、晉太元中、武陵人捕魚爲業、緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花林、林盡水源、便得一
山、其中往來種作、男女衣著、悉如外人、自云、先世避秦來此、停數日辭去、及郡下、謂太守說如此、即遣人隨其往、遂
逢、不復得路。【五】過客、旅人といふ。李白の春夜宴桃李園序に、光陰者、百代之過客。【六】歸瓶、寺から歸る意、師の意

に入り、佛法を傳授することを入室漏瓶といふ。【七】清冷 梁武帝の淨業賦に、心清冷其若水。王褒賦に朝露清冷、而潤其側。守。【八】慰文園 漢書に、司馬相如嘗有消渴疾、拜爲孝文園令。消渴とは咽喉がかわいて流動物を飲しがり、小便の通じない病、今の糖尿病の類。

【題義】前詩に連続した詩である。東坡が定山村に至つて、李泌を見、風水洞の諸詩に和したのである。後、同年八月の望に湖を觀て詩を作り、又、再び風水洞に遊んで詩を作つた。東坡の風水洞の詩は前後五首の筈であるが、今は、李泌留待一首及び和泌二首があるのみ。

【詩意】風が吹き濟り、轉じて空穴に入つて聲がある。泉は曲かに流れて、やがて石門に瀉ぎ去る。心を虚うして地籟を聞き、妄意（でたらめな心）を以て桃花源の理想郷を覚める。莊子に人籟・地籟・天籟の説明がある。人籟は笙簧の類、地籟は衆竅（多くの穴）より生ずる聲、そして萬物をして心あらしめるは天籟の力である。地籟は形があつて受け、天籟は形がなくして生ずる。ここは此の地籟の字面を用いたのである。さて、虚心、空穴の聲を聞いて、妄に桃源の郷を覚める。過客の我は詩を好くし難く、居僧は寡言である。我來つて道を問ふ、餘話なし、雲は青天に在り、水は瓶に在りて、寺から歸るとき、冰雪を得たが清らかに冷しい。こんなに清冷であればかの消渴の疾で苦しんだといふ孝文園の令であつた司馬相如を慰めることが出來やうと思ふ。

山前乳水隔塵凡

山前の乳水塵凡を隔つ、

【字解】(一) 乳水 述異記に、

山上仙風舞檜杉

山上の仙風檜杉を舞はす。

細細龍鱗生亂石

細細龍鱗亂石を生じ、

團團羊角轉空巖

團團羊角空巖に轉ず。

馮夷窟宅非梁棟

馮夷の窟宅は梁棟にあらず、

御寇車輿謝轡銜

御寇の車輿は轡銜を謝す。

世事漸艱吾欲去

世事漸く艱吾去らんと欲す、

永隨二子脫譏讒

永く二子に隨つて譏讒を脱かれん。

武陵源在吳中山、無他木、盡生桃李、俗呼桃李源、源上有石洞、洞中有乳水。【一】塵凡 塵世と同じ、元の賈師泰（字は泰甫）の詩に、龍宮自與塵凡隔。【二】仙風 沈約の風の賦に、羽客之仙風。李白の大馬賦序に、有仙風遺骨、可與神遊八極之表。【三】細細 新書に、龍之神也、能與細細、能與互互。【四】羊角 風をいふ、莊子の逍遙遊篇に、搏扶搖羊角而上者九萬里。淮南子に、扶搖摠抱羊角而上。摠抱は抱き持つ意。許慎の註にいふ、扶、舉也、搖、動也、扶搖如羊角、轉如曲梁。【五】馮夷窟宅云云 馮夷は河の神、莊子に、馮夷得之、以遊大河。楚辭に、魚鱗屋兮龍堂、紫貝闕兮朱宮。【六】御寇車輿 列禦寇の乗る車をいふ。列子、黃帝駕に、列子師老商子、友伯高子、盡二子之道、乘風而歸。莊子逍遙遊に、列子御風而行、泠然善也。【七】轡銜 轡は手綱、銜はくつわ。楚辭に、無轡銜而自載。

【詩意】山の前の石洞中に乳水があつて、塵の世と隔つて居る。又、山上、羽客の仙風は檜や杉を吹き舞はして居る。(紀昀いふ、風水二字、分疏勻稱、但、語皆不工と。)龍神は、よく細細、又、よく巨巨で、變幻測られない。かくて龍鱗が細細として亂石を生ずる。(亂石の龍鱗の如きを形容す)既にして、團團と遠く近く仙風が空巖に轉轉して行く。水神の窟宅は、所謂龍堂、朱宮で、梁もなく、棟も

ない。又、列子は風に御して行く、冷然として善く、手綱も、銜も不必要である。今や世事は漸く艱難ならんとするから、我は去つて隱遁しようと思ふ。そして永く二子（馮夷と列子。或はいふ、老商子と伯高子と）に随つて讒讒を脱れようと思ふ。（要するに、東坡が風水洞に遊んでいふやう、世事が日に非であるから、吾は去らうとする。以爲らく、（新法を行ふの後）小人は争ひ進んで、各、讒毀を務める。かくて國事が日に益々艱難となつて来た。我は（東坡自らいふ）以て世の人に合ふことが難かしく、又以て世の人を容れることも出来ない。故に決然官を棄てて、隱居の地を卜するのである。）

獨遊富陽普照寺

獨富陽普照寺に遊ぶ

富春眞古邑、此寺亦唐餘。

富春は眞に古邑、此寺も亦唐の餘。

鶴老依喬木、龍歸護賜書。

鶴は老いて喬木に依り、龍は歸つて賜書を護す。

連筒春水遠、出谷晚鐘疎。

連筒春水遠く、谷を出でて晚鐘疎なり。

欲繼江湖韻、何人爲起予。

江湖の韻を繼がんと欲す、何人か爲に予を起す。

【字解】【一】富陽、漢の富春縣、明、清、皆、浙江、杭州府に屬し、今は浙江錢塘道に屬す。【二】普照寺、國經に、淨明院、在縣北五里、唐朝舊寺號普照、後廢、石晉天福七年重建、治平二年、改賜今額。【三】喬木、年を経た高い木、詩の小雅、伐木篇に、出、自、幽、谷、遷、于、喬、木。【四】賜書、漢書の敘に、傳家有賜書。臨安志に、淨明寺枕高山、名曰舒壁、山傍有龍潭、澗水橫流、上有橋亭、有御書閣。【五】連筒、笥をいふ、杜子美の詩に、連筒灌小園。

【題義】此詩は熙寧六年正月、富陽の普照に遊んで作つたのである。李白の詩に、天台國清寺、天下爲四絕、今爲普照遊、到來復何別とあるは、此詩の第二句と正に合して居る。紀昀いふ、此種詩、寺寺可題、何必普照、人人可題、何必東坡と。

【詩意】今の富陽は、漢の富春縣で、眞に古邑である。富陽に在る普照寺も、唐朝からの舊寺である。鶴は老いて喬木に依り、龍は歸つて賜書を護する。（普照寺には、御書閣があるからいふ。）笥は遠く春水を送り、谷を出ると、晚鐘の聲が疎である。江湖の詩韻を繼がうと思ふが、さて何人が予を起すであらうか。（昔、宋之間が江南の靈隱寺に遊んだとき、夜月澄明、獨、廊下を行き、因て吟じて曰く、鸞嶺鬱岩峩（山の高い貌）、龍宮鎖寂寥と、沈思すること久しうして就らなかつた。時に老僧があつて、大禪牀に坐して曰く、何ぞ吟ずることの苦しき、何ぞ、樓觀滄海日、門對浙江潮と道はざる。宋は其の警策（活躍せしめるに足る主要の短句）を歎じ、明日になつて、之を尋ねた所、復、寺僧を見なかつた。知るものいふ、此れ駱賓王であると。此詩は此故事に據つたのである。）

自普照遊二庵

普照より二庵に遊ぶ

長松吟風晚雨細。

長松風に吟じ晚雨細かなり、

東庵半掩西庵閉。

東庵半ば掩うて西庵閉づ。

山行盡日不逢人。

山行盡日人に逢はず、

古今體詩 獨遊富陽普照寺 自普照遊二庵

【字解】【一】二庵、富陽縣國經に、延壽院在縣北四里、院前有東西二庵。臨安志に、大明院在縣北四里、四峰環繞、前知連壁、俗呼二庵。即東坡所謂東西二庵是也。【二】東庵、香ばしいこと。李義山の詩。

衰衰野梅香入袂。 衰衰に野梅香袂に入る。

居僧笑我戀清景。 居僧笑ふ我が清景を戀ふるを、

自厭山深出無計。 自ら山の深きを厭ひて出づる計なし。

我雖愛山亦自笑。 我は山を愛すと雖も亦自ら笑ふ、

獨往神傷後難繼。 獨往神傷まば後難繼し。

不如西湖飲美酒。 如かず西湖に美酒を飲まんには、

紅杏碧桃香覆髻。 紅杏碧桃香鬘を覆ふ。

作詩寄謝探薇翁。 詩を作つて寄せ謝す探薇翁、

本不避人那避世。 本人を避けず那ぞ世を避けん。

【題義】 前詩と同時の作である。劈頭の二句は全題で、已に餘景なく、以後は都て議論に入る。往の字は、是れ通篇の詩眼。

【詩意】 長い松は風に吹かれて高く吟じて居り、晩雨も細かに降りしきるは、普照院の光景である。院の前に二つの庵がある。東の庵は半ば掩はれ、西の庵は閉ぢて居る。山を行いて盡日人に逢はない。併し香の好い野梅の移り香が袂にある。山僧は我が（東坡）清景を戀ふるを笑ひ、其の身は山の

深きを厭つて居る。而も山を出づる計がない。我は山を愛するが、亦自ら笑ふ。それは獨往いて、精神が傷むと、後に繼ぎ難いからである。それで、西湖に美酒を飲むに越したことはない。紅の杏、碧の桃、移り香は鬘を覆うて居る。ここに詩を作つて遠方より探薇翁に寄せ謝する、本、人を避けない我である。何で此の世の中をば避けようぞ。

【餘論】 紀昀いふ、幽獨神傷、全用杜句、作獨往非是と。王文誥は之を駁して、今屢復此詩、必如獨往字、始與下句緊接、若用幽獨、則前後脫氣矣、紀氏專主查註、故失於細究耳。周益公、嘗言凡墨蹟石刻與集本互異、恐集本、乃後所改定、不可輕動、其說最當云云と言つて居る。

富陽妙庭觀董雙成故宅發地得丹鼎覆以銅

盤承以琉璃盆盆既破碎丹亦爲人爭奪持去

今獨盤鼎在耳 二首

富陽の妙庭觀は董雙成の故宅、地を發いて丹鼎を得、覆ふに銅盤を以てし、承くるに琉璃盆を以てす、盆は既に破碎せられ、丹も亦、人の爲に爭奪持ち去らる、今、獨、盤鼎あるのみ 二首

人去山空鶴不歸。 人去つて山空しく鶴歸らず、
丹亡鼎在世徒悲。 丹は亡し鼎在つて世徒に悲しむ。

【字解】 【二】 妙庭觀、富陽國縣に、妙庭觀在二縣西十五里。應安本に、妙庭觀、舊號二明眞、治平二年、

可憐九轉功成後、
却把飛昇乞內芝。

憐むべし九轉功成るの後、
却つて飛昇を把つて内芝を乞ふ。

改題今韻。一、人去。重變成をいふ。變成は古の女仙で、西王母の侍女。もと杭州の人。相傳ふ丹を宅

中に煉る。丹成りて道を得、自ら玉童を吹き、鶴に駕して昇僊す。邑人、橋を立てて之を望む。因つて名けて望仙橋といふ。【三】九轉功成。仙經に、九轉丹金液の事を載す。抱朴子の金丹篇に、丹九轉九轉、第一丹名丹華、第二名神符、第三名神丹、第四名還丹、第五名餌丹、第六名煉丹、第七名柔丹、第八名伏丹、第九名寒丹。【四】内芝。宣靈志に、河中永樂縣道源院、唐文宗時、道士鄧太元鎮丹於藥院中、丹成、疑轉功未完、留貯院內、人共掌之、太元觀化、其徒周悟先主院事、蒲人侯道寧事悟先、以供給使、一旦味爽、衆晨起、道源房中無所見、謂留一首云、結裏大還丹、多年色不移、前曾靈喫卻、今日碧空飛、慚愧深珍重、珍重鄧天師、他年復得藥、留書與内芝。其下列詞詞稱、去年七月一日、蒙神君、賜姓李、名内芝、配住上清善道院。【題義】此の二首も、前詩と同じ時の作。世に傳ふ、妙庭觀は董雙成の故宅で、宋、仁宗の天聖中、道士朱去非といふもの、地を發いて丹鼎・銅盤・琉璃盆を得と。今は獨、盤・鼎が存するのみで、此詩が出来たのである。

【詩意】昔の仙人は郷里に歸ると、多くは化して鶴となつた。丁令威の如きは、其れである。續搜神記に、遼東の城門に華表柱あり。白鶴ありて其の上に乗る。詩を言ふ、有鳥有鳥丁令威、去家千年今來歸、城郭如故人民非、何不學仙塚累累と。又、神仙傳に、蘇仙君（名は耽）は桂陽の人なり。數十の白鶴ありて、門に降る。遂に雲漢に昇つて去る。後に白鶴に騎つて來り、郡城東北の樓上に至る人あり。或人、彈を挾んで之を彈せしに、鶴は、爪を以て樓上の板を握み、漆を以て書していふ、城郭是人民非、三有甲子一來歸、吾是蘇仙君、彈我何爲、と。何れも塵に歸つて鶴となつた。女仙童

雙成は鶴に化して昇僊したまま歸らない。丹を煉つたといふ鼎はあるも、丹、其のものはない。世の人は徒に悲しむのである。憐むべきは金丹を煉り、九轉の功が成つた後、却つて飛昇を把つて内芝を乞うたことである。

琉璃擊碎走金丹。

琉璃擊碎して金丹を走らす、

無復神光發舊壇。

復神光の舊壇に發するなし。

時有世人來舐鼎。

時に世人の來りて鼎を舐るあり、

欲隨雞犬事劉安。

雞犬に隨ひて劉安に事へんと欲す。

【字解】一、琉璃。紺色の寶玉、佛說七寶の一。七寶は七珍ともいふ。七寶に就いては諸經、其の舉ぐる所を異にするも、普通に、金・銀・琉璃・玻璃・珊瑚・瑪瑙・琥珀をいふ。二、神光發舊壇。漢書の禮樂志に、夜常有神光集於祠壇。

【詩意】琉璃盆を破砕し、金丹を走らしたので、復、神光の舊壇に發することがない。時たま、世人が來つて鼎を舐ることがある。雞犬に隨つて劉安に事へやうと欲するのであらう。（神仙傳に、漢の淮南王安は、道術を愛す。八公ありて門に詣る。皆、鬚眉皓白。王に丹經三十六卷を授く。後、白日に天に升る。去る時に臨み、藥器を中庭に置き、餘藥、庭中に在り。雞犬之を舐啄（なめたり、ついはんだりする）し、盡く天に升るを得。故に雞鳴天上、犬吠雲中といふことが見えて居る。此詩の結局は、此の故事に據つたものである。）

新城道中 二首

新城道中 二首

東風知我欲山行。東風我が山行せんと欲するを知り、

吹斷簷間積雨聲。吹き断ゆ簷間積雨の聲。

嶺上晴雲披絮帽。嶺上の晴雲絮帽を披き、

樹頭初日挂銅鉦。樹頭の初日銅鉦を挂く。

野桃含笑竹籬短。野桃笑を含んで竹籬短く、

溪柳自搖沙水清。溪柳自ら搖いて沙水清し。

西崦人家應最樂。西崦の人家應に最も樂むべし、

煮芹燒筍餉春耕。芹を煮筍を燒いて春耕に餉す。

【字解】(一) 新城。新城縣圖經に、晉三十二年、吳大帝、黃武五年、置東安郡、新城屬焉。唐高宗、永淳元年、分富春西境置新城。上縣、清初仍之。距杭州之西南一百三十三里。(二) 東風。春の風、臘の月令に、孟春之月、東風解凍。(三) 簷間積雨聲。杜市の詩に、野雲低渡水、簷雨細隨風。(四) 晴雲如絮帽。轉退之の詩に、晴雲如絮。杜牧の詩に、晴雲似絮惹低空。頭上の巾を絮絮となす。漢、周勃傳に、勃下廷尉、太后以絮絮。

【題義】此の二詩は、熙寧六年二月の作。首のは富陽の早發を敘し、次のは行いて新城に至るを敘す。早發の時、微雨初霽れ、道に西崦の餉耕に逢ひ、欣然として此作があつた。亭午(正午の時)馬を溪邊に策せし時、次の詩にある細雨足時茶戸喜、亂山深處長官清の句が出来た。時に晁君成が令となつて、官清民樂の實があつたから之を美めたのである。

【詩意】春風は我が山行しようとするを知つたものと見え、簷に滴たる積雨の聲を吹き断つた。嶺上の晴れた雲は、絮帽を披いたやうであり、樹上の初日は銅を挂けたやうである。野の梅は笑を含んで、竹の籬も短く、溪上の柳も自ら動いて沙水も清い。赤谷西崦の人家は、鳥雀が茅茨に依り、藩籬は松菊を帯び、最も樂しむべきである。行いて半道に及ぶ時、村人は芹を煮筍を燒いて春耕に餉して居つた。

身世悠悠我此行。身世悠悠たり我が此の行、
溪邊委轡聽溪聲。溪邊轡を委てて溪聲を聴く。
散材畏見搜林斧。散材林を搜る斧を見んことを畏れ、
疲馬思聞卷旆鉦。疲馬旆を卷く鉦を聞かんことを思ふ。
細雨足時茶戸喜。細雨足る時茶戸喜び、
亂山深處長官清。亂山深き處長官清し。
人間岐路知多少。人間の岐路知りぬ多少ぞ、
試向桑田問耦耕。試みに桑田に向つて耦耕に問はん。

【字解】(一) 悠悠。行く鳥、詩の小雅、黍苗篇に、悠悠南行。又、間暇ある貌。左思の吳都賦に、悠悠旆旆。(二) 委轡。管子に、奔馬之委轡。後漢書、崔實傳に、駁委其轡。(三) 散材。散木といふに同じ。陸游の詩に、社稷終然幸散材。莊子、人間世篇に、以爲舟則沈、以爲棺槨則速腐、以爲器則速毀云云、是不材之木也、無所可用。(四) 耦耕。管子、管子建の七略に、耦

林深險、探海窮。【三】卷之九 王融の曲水詩序に、披霞卷之悠悠之施。【四】岐路 えたみち、岐嶺といふに同じ。列子、說符篇に、岐路之中、又有岐路。【五】桑田 神仙傳に、已見三東海三爲三桑田。【六】耦耕 陶潛の詩に、商歌非三吾事、依在耦耕。【詩意】身世悠悠たるかな、我が此度の旅行は至つて暢氣である。溪邊に轡を棄てて溪聲を聞く。我は元來役に立たない人間で、木に譬ふれば散材である。それで、林を捜る斧を見んことを畏れる。疲れた馬は、旆を巻く鉦を聞いて退却せんことを思ふ。(時既に亭午、山行漸く疲れて、行役を慨いたのである。)細雨が十分に濕つて、茶戸が喜び、亂山の深い處、長官は清く、住民は樂しむ。(王文誥いふ、一聯明以美見、用三官清民樂一作骨、係三美見之詞、本屬三常語、忽將三戶喜三脫去民樂、脫胎隨地點染云云と。脱胎とは、他の作意を取つて、其の形式をかへる義。參同契に、作丹之時、脱胎入口、功成之後、脱胎出殼とある。)人間の岐路極めて多く、岐路に又岐路があつて、遂に亡羊。試みに桑田に向つて耦耕(兩人ならび耕す)の人に問はうと思ふ。

山邨五絶

山邨五絶

竹籬茅屋趁谿斜。 竹籬茅屋谿に趁いて斜なり、
春入山邨處處花。 春は山邨に入る處處の花。
無象太平還有象。 象なき太平還た象あり、
孤烟起處是人家。 孤烟の起る處是れ人家。

【字解】【一】竹籬 杜甫の詩に、茅舍竹籬短。【二】茅屋 宋書、魏松之傳に、起茅屋數間、妻子恆苦饑寒。屈原の卜居に、茅茨草茅以力耕乎。【三】處處花 韓退之の詩に、種桃處處惟開花。【四】無象太平云云 舊唐書、牛僧孺傳に、

文宗曰、天下何由太平、卿等有重意於此乎、牛僧孺奏曰、太平無象、今雖未及至理、亦謂小康、若別求太平、非臣等所及。【題義】此詩は熙寧六年二月の作、朝廷の新法青苗・助役等の不便を識つたのである。紀昀いふ、五首語多露骨、不爲佳作と。王文誥いふ、五絶並佳、第一首、還有象、亦帶諷意と。【詩意】竹の籬や茅葺の屋が、谿間に趁いて斜に點點して居る。山村にも春が來たと見えて、處處に花が咲いて居る。太平象なしといふも、現に象がある。即ち炊烟の起る處是れ人家である。

烟雨濛濛雞犬聲

烟雨濛濛として雞犬の聲あり、

有生何處不安生。 有生何れの處にか生を安んぜざらん。
但令黃犢無人佩。 但黃犢をして人の佩ふるなからしむ、
布穀何勞也勸耕。 布穀何ぞ勞せん也た耕を勸むるを。

【字解】【一】烟雨濛濛 杜牧之の江南春詩に、南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中。煙は烟に同じ。王昌齡の詩に、玉清壇上雨濛濛。【二】黃犢無人佩 漢書に、龔遂爲三潯海太守、民有持刀劍者、使買牛、買牛、賣刀買牛、何爲帶牛佩犢。犢は牛子。【三】布穀 鳥の名、俗に催耕鳥といふ。

【詩意】煙りて降る雨が濛濛としてをぐらく、雞や犬の聲が聞える。既に生あるもの、何れの處にか、其の生を安んずることが出来なからう。ただ黃犢を人が佩ぶることのないやうにしたいものである。(黃犢を生産に向けたいとの意)さうなると、かの布穀即ち催耕鳥が耕すことを勸める手數も要らなくなるであらう。(是時、私鹽を販ぐもの、多く刀仗を帯びた。故に前漢の龔遂が事を取り、謂らく、但、鹽法を將て寬平にし、人をして刀劍を帯びないで、牛を買ひ犢を買はしめるときは、自ら勸督を勞

しない。以て朝廷の鹽法が太だ峻烈で不便なることを譏諷したのである。東坡が餘杭に在つた時、森民が兵仗を以て私鹽を護送することが、たびたびであつた。吏民が敢て近かなつたのは、彼等は常に數百人も輩をなして居つたからである。

老翁七十自腰鎌。

老翁七十自腰鎌を腰にす、

慚愧春山筍蕨甜。

慚愧す春山筍蕨の甜きを。

豈是聞韶解忘味。

豈是れ韶を聞いて解く味を忘るるな!

邇來三月食無鹽。

邇來三月食に鹽なし。

「らんや、

【三】聞韶、韶、遠而爲に、子在齊聞韶三月、不知肉味、曰、不圖爲樂之至於斯也。

【詩意】七十の老翁が自ら鎌を腰にするのは、其身も亦、東薪の中にあるが如きものである。飢を充たす爲に春山の筍や蕨を探りて、之を甜いとして居る。まことに慚愧する次第である。昔、孔子は齊に在した時、韶(舜の樂)の樂を聞いて學ぶこと三月の久しきに至り、心がここに一となつて、肉の味の旨いことをも忘れたといふが、今は是れ韶を聞いて味を忘れるのではない。邇來三月、食に鹽がない。(要するに此の詩の主意は、山中の人は饑えて貧しく、食物もない。年老いても猶ほ筍蕨を採つて饑に充てる。時に鹽法が太だ峻烈であつて、僻遠の人に至つては鹽食がなく、動もすれば數月を苦しむ。昔の聖人は、能く韶樂を聞いて味を忘れたが、山中の小民は、豈能く淡きを食うて樂しまんや。

亦以て鹽法の太だ峻なるを譏つたのである。王文話いふ、私販法重而官鹽貴、則民之貧而懦者、或不食鹽、往在浙中、見山谷之人有數月食無鹽者。

杖藜裹飯去忽忽。

杖藜飯を裹んで去つて忽忽、

過眼青錢轉手空。

眼を過ぐる青錢手を轉すれば空し。

贏得兒童語音好。

贏ち得たり兒童語音好きを、

一年強半在城中。

一年の強半は城中に在り。

【字解】杖藜、あかざの杖、

莊子、讓王篇に、原憲杖藜而應門。晉書に、文帝以滸母老、贈藜杖一枝。【二】裹飯、莊子、大宗師に、子與曰、子桑殆病矣、裹飯而往食之。【三】忽忽、忽或は思に作る、

【詩意】藜の杖を曳き、飯を裹んで去る、上から貸し與へられた青苗錢も、一時の融通で、忽ち目を過ぎ去つて、少しも手許には留まらない。即ち手を轉らせば、空しくなつてしまふ。(東坡の奏狀に、毎見散青苗錢、則縣中酒庫暴增、鄉民有徒手而歸者、可爲流涕云云とあるは、此の七字の註脚といふべきである。)更に青苗法、助役法の弊害を言ふと、百姓は青苗錢を得て、一時は便で

あるが、城中に於いて之を浮費し、又、郷村の子弟は、此を以て多く城市に在つて、但、城中の語音を學び得るのみである。教育の爲にも宜しくない。

【餘論】宋の元豐二年、東坡は徐より湖に徙り、事不便、民をば、敢て言はない。詩を以て託諷する。其の國に益あらんことを庶ふのである。中丞李定等いふ、軾侮慢、蓋陛下發、以本業貧民、則曰、贏得兒童語音好、一等強半在城中、其他觸物即事、應口無非以詆謗爲主と。東坡は遂に坐貶された。

竊祿忘歸我自羞。

祿を竊んで歸るを忘れ我自ら羞づ、

豐年底事汝憂愁。

豐年なるに底事ぞ汝憂愁する。

不須更待飛鷹墮。

須みず更に飛鷹の墮つるを待つを、

方念平生馬少游。

方に念ふべし平生の馬少游を。

【字解】【一】底事 何事といふに同じ。唐人の時に多く用ふ。白樂天の時に、古往今來底事無。【二】特飛鷹墮 後漢の馬援傳に、援擊交趾、謂官屬曰、吾從弟少游常哀吾愆愆有大志、曰、士生一世、但取西里間、勇未減時、下潦上霧、毒氣蒸蒸、仰視飛鷹點點（墮ちる貌）墮水中、臥念少游平生時語、何可得也。【詩意】我は固より其の器でなく、空しく祿を竊んで、田に歸へるを忘れて居る。深く自ら羞むるのである。今年は豐年であるのに、何ぞ汝は憂愁するぞ。（東坡は時政の弊に因つて、弟子由と組を解いて田に歸るを約す。我は東坡自ら謂ひ、汝は子由をいふ。）昔、馬援の交趾を征するや、浪泊西里の間

に在り、下潦上霧、仰いて飛鷹を視るに、點點として水中に墮ちた。其の時、從弟少游の言つた話を念つたが、後の祭である。故に豐年の今日此頃、官遊して飛鷹の墮ちる境に入る必要を見ないであらう。方に平生の馬少游の言葉を念ふべきである。

癸丑春分後雪

癸丑春分後の雪

雪入春分省見稀。

雪は春分に入つて省見稀に、

半開桃李不勝威。

半開の桃李威に勝へず。

應慚落地梅花識。

應に慚べし地に落つる梅花の識る」を、

却作漫天柳絮飛。

却て天に漫りて柳絮の飛ぶを作す。

不分東君專節物。

東君節物を專にするを分たす、

故將新巧發陰機。

故らに新巧を將て陰機を發す。

從今造物尤難料。

今より造物尤も料り難し、

更暖須留御臘衣。

更に暖めて須く御臘衣を留むべし。

【字解】【一】癸丑 神宗の熙寧六年（皇紀一七三三年、西曆一〇七三年）東坡の三十八歳の時。【二】春分 二十四氣の一、春の中にして晝夜平分の時、（今の三月廿一日頃。）周禮、典瑞の註に、天子嘗春分朝日、秋分夕月。【三】省見 漢書、東方朔傳に、未得省見。又、何武傳に、未嘗省見。註にいふ、言不爲所披識。【四】落地梅花 建康文の雪朝詩に、落梅飛四注、翻、舞舞三。又、梅花賦に、梅花特早、偏能識春。【五】漫天柳絮飛 韓退之が晚春詩に、楊花榆莢無才思、惟解漫天作雪飛。【六】不分東君 杜子美の時に、不分桃花紅似錦。東君は春の神、王初の立春後詩に、東君珂珮響珊珊。【七】節物 文選の陸士衡の時に、脚履感節物。節物は、時節に應じて生ずる品物。晉書の陸機傳

に、幽閑感節物、我行已水久。【八】新巧、晉、王羲之傳に、制殊非新巧。【九】發陰機、退韓之が辛卯年雪の時に、倉倉陳三原
教、疎解弄陰機。【一〇】造物、造物者ないう、莊子、大宗師に、儼然大造物者。【一一】御風衣、御風衣、風月を塞ぐ意で、防表衣
ないう。御は製と同じ。毛詩にも、亦以御冬と見ゆ。

【題義】此詩は熙寧六年二月十日の作である。樂城集(子由の詩集)に、次韻子瞻二月十日雪一に作
るは、此詩の次韻である。

【詩意】春分に入つては、雪も願みられない。半開の桃や李は、雪の威に勝へないが、梅はさうでな
い。雪は應に地に落ちる梅花の識るを慚すべきであらう。(蘇子卿の梅花落の詞にも、祇言花似雪、
不悟有香來とある。)そして却て空に漫つて柳絮の飛ぶを作すのである。(昔、晉の謝安が嘗て内集し
たとき、雪が驟に下つた。安曰く、何に似たるぞと。安の兄の子、郎はいふ、鹽を空中に散すれば、
差擬すべしと。王凝之の妻謝氏(字は道韞)いふ、未だ若かず柳絮の風に因つて起るには、と。此の
詩は、此の故事に據つたのである。それで古詩にも似梅花落地、如柳絮因風とある。)何れにして
も、春の神が時節の品物を專にして居ることを分明にしないで、故に新巧を將て消極の機を發して、
時ならぬ雪を降らす。今後も造物者の心は、尤も料り難いから、更に暖めて須らく御風衣を留むべき
である。

湖上夜歸

湖上夜歸

我飲不盡器、半酣味尤長。
籃輿湖上歸、春風吹面涼。
行到孤山西、夜色已蒼蒼。
清吟雜夢寐、得句旋已忘。
尚記梨花村、依依聞暗香。
入城定何時、賓客半在亡。
睡眠忽驚覺、繁燈鬧河塘。
市人拍手笑、狀如失林聲。
始悟山野姿、異趣難自強。
人生安爲樂、吾策殊未良。

我飲んで器を盡さず、半酣味ひ尤も長す。
籃輿湖上より歸り、春風面を吹いて涼し。
行いて孤山の西に到り、夜色已に蒼蒼。
清吟夢寐を雜へ、句を得旋つて已に忘る。
尚ほ記す梨花の村、依依として暗香を聞く。
城に入る定めて何れの時ぞ、賓客半は在亡。
睡眠忽ち驚覺し、繁燈河塘鬧し。
市人手を拍ちて笑ふ、狀林を失へる塵の如し。
始て悟る山野の姿、異趣自ら強ふる難きを。
人生安するを樂みとなす、吾が策殊に未だ良からず。

【字解】【一】我飲不盡器、東坡志林に、吾少時望見酒盡而醉、今亦能三蕉葉。【二】籃輿、竹輿といふに同じ。同じく東坡
の詩に、籃輿置紙筆、得句輕千乘。【三】春風吹面涼、杜子美の詩に、步響風吹面。吹面、一本に灑面に作る。【四】孤山
孤嶼とも灑嶼ともいふ。浙江、杭州、西湖に在ること前にも述べた。【五】依依、詩、小雅に、楊柳依依。【六】暗香、何處からと
なく來る香。許渾の詩に、高竹動疎翠、早應飄暗香。【七】在亡、漢書、爰盎傳に、且觀急人所時有一旦叩門、不以親爲解、
不以在亡爲辭、天下所望、獨季心劇孟。【八】繁燈、說文、繁傳註に、嬰左右繁顯也。【九】河塘、沙河塘は杭州の街名。西湖

游覽志に、沙河塘、宋時居民甚盛、碧瓦紅樓、歌管不絕。此塘は餘杭門内に在る。其の門外を以て裏河となす。【一〇】失林壁法苑珠林に、失林窮虎。【一一】異題 一本に、異種に作る。【一二】安爲樂 樂の書に、安身爲樂、無憂爲福。一説に、安當レ作レ要と。

【題義】此詩も前詩と同じく、熙寧六年二月の作で、東坡が客と湖上に飲み、孤山より夜歸つて城に入つたとき、河塘を過ぎ、繁燈爛然の状を詩にしたのである。紀昀いふ、句句摹神、真而不俚と。【詩意】我は若い時分には、酒盃を見ただけでも、酔うた位であるから、酒量は至つて少い。併し、好物で、半酔半醒の味が尤も宜しいと思ふ。一日、客と湖上で飲み、籃輿に乗つて歸つた。春風は酔顔を吹いて涼しい。行いて孤山の西に至つた時分は、夜色が已に蒼蒼であつた。清吟も、夢寐を離れて居たので、折角、好い句を得ても、旋つて已に忘れてしまつた。(紀昀いふ、二句神來。)尙ほ記憶にあるは梨花の村で、依依(たどたどしく)として何處となく花の香が来る。さて確に城中に入るは、何れの時であらうぞ。賓客も半は散じてしまひ、睡眠忽ち驚覺(驚いて顧る)し、繁き燈火は沙河塘に賑かである。市人は手を拍ちて愁ふ。其の状は、林を失つた麋のやうである。我が山野の姿は、異趣を以て之を強ふことは無理といふことが解つた。人生は要するに安んずる所あるを樂しむとする。之に反して吾がこれまでの策は殊に良くはなかつた。(王文誥いふ、自謂山野之狀、本不合作官人、故城市以三其不類而笑也。全用此意作結、亦自慨之詞と。)

曾元恕游龍山呂穆仲不至

曾元恕龍山に遊ぶ、呂穆仲に至らず

青春不覺老朱顏、
強半銷磨簿領間。
愁客倦吟花似酒、
佳人休唱日銜山。
共知寒食明朝過、
且赴僧窗半日閒。
命駕呂安邀不至、
浴沂曾點暮方還。

【字解】【一】曾元恕 東坡と同じく、鳳凰山靈化洞に遊んだ人。宋の袁宏が豫陽漫志に、熙寧六年、同游龍安石屋洞、題名云云。【二】龍山 臨安志に、龍山在嘉會門外、去城十里、一名臥龍山。山上に天眞禪寺や、靈化洞がある。【三】呂穆仲 時に杭州察推であつた。宋史の職官志に、軍府幕職有觀察防禦團練推官。【四】青春 陳元帝墓表に、春日青春。【五】陽春 九春。何晏の賦に、結實商秋、敷華青春。【六】強半 過半といふに同じ、同じく東坡の詩に、贏得兒童語音好、一年強半在城中。【七】日銜山 李太白の烏棲曲に、吳歌楚舞歎未畢、青山欲銜牛邊日。【八】寒食 荆楚歲時記に、去冬至一百五日、即有疾風甚雨、謂之寒食。【九】半日閒 李涉が題鶴林寺詩に、終日昏昏醉夢間、忽聞春盡強登山、因過竹院逢僧話、又得浮生半日閒。【一〇】命駕呂安 晉書に、呂安服嵇康高致、每相思、輒千里命駕、康友而善之。【一一】浴沂曾點 論語先進篇に、曾點曰、其春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。沂水は魯城の南に在る。

【題義】此詩も熙寧六年二月の作。曾孝章と龍山靈化洞に遊んだが、約束した呂穆仲が來なかつた。

日暮に追つて曾氏は其の險を畏れたので、中途で還つた。其の後、穆仲が至つたから、遂に同じく靈化洞に遊び、徧く幽勝を歴て還り、此詩が出来たのである。

【詩意】青春の時分は、朱顔のやがて老ゆるをも覺えないで、一年の過半は、帳簿を記す俗務の間に銷磨（消磨と同じ、へらしてなくす）してしまふ。愁のある客は、花似酒の曲を吟するを倦むやうである。（紀昀いふ、此似用杜曲花光濃似酒語と。）佳人も、かの日は山を衝むといふ烏棲曲を唱へることを休めるがよからう。明朝になると寒食の日が過ぎた譯であるから、暫く僧意に赴いて浮世半日の閒を得ようと思ふ。駕を命する呂安は、邀へたけれども來ない。それで沂水に浴した曾點も、暮方になつて還つた。（呂穆仲、期して至らず、故にいふ。）

寒食未明至湖上太守未來兩縣令先在

寒食の未明湖上に至る、太守未だ來らず、兩縣令先づ在り

城頭月落尙啼鳥 城頭月落もて尙は啼く鳥

烏榜紅舷早滿湖 烏榜紅舷早く湖に滿つ

鼓吹未容迎五馬 鼓吹未だ五馬を迎ふることを容さざらん

水雲先已颺雙鳧 水雲先づ已に雙鳧を颺ぐ

映山黃帽螭頭舫 山に映する黃帽螭頭の舫

【字解】 〇 寒食 解は前詩に在り。冬至より一百五日に當る節。晉、介子推が焚死せし日なるより、後人、寒食す。鄒中記に、冷食三日、作乾粥一食之。 〇 太守 陳襄をいふ。字は述古、學者、古靈先生と稱すること、前に出づ。 〇 兩

夾道青烟鵲尾爐 道を夾さむ青烟鵲尾の爐

老病逢春只思睡 老病春に逢うて只睡らんことを思ひ

獨求僧榻寄須臾 獨僧榻を求めて須臾を寄す

曰仁和。周那字は開祖、時に錢若の令たり、徐瞻は仁和の令たり。臨安志にも、仁和縣令、北宋時有徐瞻。 〇 鵲尾爐 遊湖の船。 〇 鼓吹 鼓を打ち笛を吹き鳴らす。古樂府に漢明帝樂四品を載す、三に曰く、黃門鼓吹樂、之を天子宴羣臣に用ふ。 〇 五馬 太守をいふ、宋の程大昌の演繁露に、太守五馬莫不知的據、古樂府五馬立踴躍、即其來已久、或言、詩有良馬五之、侯國事也、漢有三騮馬、車止用四馬、而鄭玄註詩曰、周禮、州長建旗、漢太守比州長、法御五馬、則太守之用五馬、後漢已然矣、若其制之所始、則未有知者云云。王文誥いふ、其始出於左、騮馬之別、至漢加秩、則增馬也、南史に、柳元策兄弟五人、並爲太守、亦有五馬之稱。 〇 水雲 王昌齡の詩に、日暮兼葭空水雲。 〇 雙鳧 周那、徐瞻の二縣令をいふ。 〇 螭頭舫 白樂天の杭州詩に、小航船亦畫龍頭。 〇 鵲尾爐 海錄碎事に、珠林を引いていふ、香爐有柄鵲尾爐。法苑珠林に、費崇先、吳興人、少尤信佛法、每聽經、常以鵲尾香置膝前。杜陵集に載す、陶貞白有金鵲尾香爐。 〇 寄須臾 柳子厚の詩に、且寄須臾間。

【題義】 前詩と同じ時の作、寒食の日の未明に、東坡は湖上に至つたが、太守陳襄はまだ來ない。錢塘縣令の周那と仁和縣令の徐瞻とは先づ居た。これは其の時の詩である。

【詩意】 城頭の月は、西山に落ちたが、鳥は尙ほ啼いて居る。遊湖の船である烏榜紅舷は、早や湖上に満ちて居る。（王文誥いふ、此二句定是詞體、必非詩體、宋人有謂公詞似詩者、當由此詞一率誤と。）鼓を打ち笛を鳴らして、太守陳述古を迎へないうちに、日暮水雲、先づ已に雙鳧を揚げて、

兩縣令の周邠と徐疇とが先づ在る。山に映する黃帽は畫龍頭の小航船である。道を夾さむ青煙は鶴尾の香爐である。老病の此身は、春に逢うて、只、睡らんことを思ひ、獨、僧榻（榻は臥榻、狹く長くして低き牀。）を求めて、須臾を寄する。（王文誥いふ、一結平澹、公往往不脱此意、故能晚年肆力於陶。）

次韻孫莘老見贈時莘老移廬州因以別之

孫莘老贈らるるに次韻す、時に莘老廬州に移る、因つて以て之に別る

鐘錘一手賦形殊。鐘錘一手なるも形を賦する殊なり、造化無心敢望渠。造化は無心敢て渠を望まんや。我本疎頑固當爾。我本疎頑固より當に爾るべし、子猶淪洛況其餘。子猶は淪洛況んや其餘をや。龔黃側畔難言政。龔黃の側畔、政を言ひ難く、羅趙前頭且眩書。羅趙の前頭且つ眩書。惟有陽關一杯酒。惟有陽關一杯の酒あり、慙慙重唱贈離居。慙慙重ねて唱へて離居に贈る。

【字解】(一)孫莘老 孫覺、字は莘老、龍圖學士であつたが、王安石の爲めに逐はれたことは、前に述べた。(二)鐘錘 莊子の大宗師篇に、皆在鐘錘之間耳。鐘錘は、鍛へる器。(三)賦形 文天祥の正氣歌に、鑄然賦形とある。賦は配する意。(四)造化 同じく莊子の大宗師篇に、以天地爲一大鑪、以造化爲一大冶。天地を以て一大鑪とし、造化を以て一大鍛冶と

する意。(五)疎頑 疎愚といふに同じ、頑は分別のないこと、柳宗元の詩に、步登最高寺、蕭散任疎頑、後漢書、曹世叔妻傳に、吾性疎頑。(六)固當 固當、爾邪。(七)淪洛 ちよぶれる。柳宗元の詩、乃今形喪淪洛。白樂天の琵琶行に、聞是天涯淪落人。(八)況其餘 後漢書、崔實傳に、況其餘哉。(九)龔黃 龔遂と黃霸。龔遂は山陽の人で、前漢、宣帝の時、渤海の太守となる。黃霸字は次公、同じく宣帝の時、潁川の太守となる。俱に前漢循吏傳に見ゆ。(一〇)側畔 杜荀鶴の詩に、驛樓夜柳側、蘇郭輕烟畔。劉禹錫の詩に、比舟側畔千帆過、病樹前頭萬木春。(一一)陽關 一杯酒 唐、王維の送元二使安西詩に、渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人。陽關は、涼州敦煌郡、今の甘肅、安西、敦煌縣である。(一二)離居 李白代寄情人楚詞體云、使青鳥二分寄書、恨獨宿二分離居。

【題義】此詩も、熙寧六年二月の作、孫莘老が贈つて来た詩の韻に次し、又、莘老の移つて廬州に知たるを送つた別れの詩ある。紀昀いふ、次句宋人野調、三四江西句法と。

【詩意】大自然の鍛器は、一手なるも、流形を賦することは千差萬別である。造化は無心で作用する。故に命を賦することが異つて居ても、敢て彼を怨望しない。我は元來、疎愚であるから、今日の不遇は當然である。君の如き立派な人物にして、なほ淪落するのであるから、其餘は推して知るべきである。龔遂や黃霸は、前漢宣帝の時の循吏である。其の側畔では政事を言ひ難い。羅趙の前頭で、目がまばゆき程の筆跡である。（東坡の自註にいふ、莘老見稱政事與書、而莘老書至不工と。宋の葛立方の韻語陽秋に、世之言惡札者、必曰羅趙、東坡蓋識之也。）惟、陽關送別の曲、故人の勸める一杯の酒がある。慙慙に三疊して之を唱へ、離居の人に贈るのである。

贈別

別を贈る

青鳥街巾久欲飛、青鳥巾を街んで久しく飛ばんと欲す、

黃鶯別主更悲啼、黃鶯主に別れて更に悲啼す。

慇懃莫忘分攜處、慇懃に忘るること莫れ分攜の處

湖水東邊鳳嶺西、湖水の東邊鳳嶺の西。

漢武故事を引き、七月七日、上於承

【字解】(一) 青鳥 太平廣記に、

【(二) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(三) 鳳嶺 鳴く聲の

【(四) 悲啼 鳴く聲の

【(五) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(六) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(七) 去街 紅巾、(八) 悲啼 鳴く聲の

【(九) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(十) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(十一) 鳳嶺 鳴く聲の

【(十二) 悲啼 鳴く聲の

【(十三) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(十四) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(十五) 去街 紅巾、(十六) 悲啼 鳴く聲の

【(十七) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(十八) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(十九) 鳳嶺 鳴く聲の

【(二十) 悲啼 鳴く聲の

【(二十一) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(二十二) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(二十三) 去街 紅巾、(二十四) 悲啼 鳴く聲の

【(二十五) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(二十六) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(二十七) 鳳嶺 鳴く聲の

【(二十八) 悲啼 鳴く聲の

【(二十九) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(三十) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(三十一) 去街 紅巾、(三十二) 悲啼 鳴く聲の

【(三十三) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(三十四) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(三十五) 鳳嶺 鳴く聲の

【(三十六) 悲啼 鳴く聲の

【(三十七) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(三十八) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(三十九) 去街 紅巾、(四十) 悲啼 鳴く聲の

【(四十一) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(四十二) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(四十三) 鳳嶺 鳴く聲の

【(四十四) 悲啼 鳴く聲の

【(四十五) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(四十六) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(四十七) 去街 紅巾、(四十八) 悲啼 鳴く聲の

【(四十九) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(五十) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(五十一) 鳳嶺 鳴く聲の

【(五十二) 悲啼 鳴く聲の

【(五十三) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(五十四) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

贈別

別を贈る

青鳥街巾久欲飛、青鳥巾を街んで久しく飛ばんと欲す、

黃鶯別主更悲啼、黃鶯主に別れて更に悲啼す。

慇懃莫忘分攜處、慇懃に忘るること莫れ分攜の處

湖水東邊鳳嶺西、湖水の東邊鳳嶺の西。

漢武故事を引き、七月七日、上於承

【字解】(一) 青鳥 太平廣記に、

【(二) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(三) 鳳嶺 鳴く聲の

【(四) 悲啼 鳴く聲の

【(五) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(六) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(七) 去街 紅巾、(八) 悲啼 鳴く聲の

【(九) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(十) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(十一) 鳳嶺 鳴く聲の

【(十二) 悲啼 鳴く聲の

【(十三) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(十四) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(十五) 去街 紅巾、(十六) 悲啼 鳴く聲の

【(十七) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(十八) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(十九) 鳳嶺 鳴く聲の

【(二十) 悲啼 鳴く聲の

【(二十一) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(二十二) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(二十三) 去街 紅巾、(二十四) 悲啼 鳴く聲の

【(二十五) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(二十六) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(二十七) 鳳嶺 鳴く聲の

【(二十八) 悲啼 鳴く聲の

【(二十九) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(三十) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(三十一) 去街 紅巾、(三十二) 悲啼 鳴く聲の

【(三十三) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(三十四) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(三十五) 鳳嶺 鳴く聲の

【(三十六) 悲啼 鳴く聲の

【(三十七) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(三十八) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(三十九) 去街 紅巾、(四十) 悲啼 鳴く聲の

【(四十一) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(四十二) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(四十三) 鳳嶺 鳴く聲の

【(四十四) 悲啼 鳴く聲の

【(四十五) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(四十六) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(四十七) 去街 紅巾、(四十八) 悲啼 鳴く聲の

【(四十九) 黃鶯 委曲の貌、李白の詩に、惜

【(五十) 青鳥 太平廣記に、漢武故事を引き、七月七日、上於承

【(五十一) 鳳嶺 鳴く聲の

【(五十二) 悲啼 鳴く聲の

【(五十三) 分攜 李義山の詩に、湖中展翠有二分攜

【(五十四) 慇懃 委曲の貌、李白の詩に、惜

次韻代留別

次韻して留別に代ふ

絳蠟燒殘玉翠飛、絳蠟燒殘して玉翠飛び、

離歌唱徹萬行啼、離歌唱へ徹す萬行の啼。

他年一舸鴟夷去、他年一舸にて鴟夷去らば、

應記儂家舊姓西、應に記すべし儂家が舊西を姓とせし

情。萬行。【一】一舸、舟也。鴟夷、既に船を佐けて、吳を誦ほし、復、西施を得て、之と與に去り、舟に乗じて海に浮び、姓名

を變じて、自ら鴟夷子皮といふ。杜牧之の詩に、西子下、結髮、一舸逐、鴟夷。【二】儂、我と同じ、韓退之の詩に、鯢魚大、子船、牙

服、飾、殺、儂、とある。【三】舊姓、西、一本に、舊住、西に作る。呂氏童蒙訓に、東坡詩を載せて、應記儂家舊姓西とある。舊住西は、

傳寫の誤であらう。舊字記に、西施、施、其姓也、所居在、西、故有、東家施、西家施。

【題義】説文に遠曰、離近曰、別と見ゆ。丈夫非、無、無、涙、不、灑、離、別、間、醉、中、快、を、分、ち、て、行、く、人、が、居

る人に別を告げる。送別の詩に次韻して留別の詩を作つたのである。紀昀いふ、語有、三、情、韻、と。

【詩意】祖道の宴が開かれ、蠟燭の赤い光も、燒き散らして、盃も飛び交はす。離歌唱へ徹して、萬

行の啼は、衣を沾す。張文潛の詩に、亭亭畫舸繫、春潭、只待、行人、酒、半、酣、不、管、烟、波、與、風、雨、載、將、離

古今體詩 贈別 次韻代留別

七〇七

【字解】(一) 絳蠟 皮日休の詩

に、西施不、及、燒、殘、蠟。【二】玉翠

獻酬の禮に用ゐる玉の蓋。夏に醜と

いひ、殷に翠といひ、周に爵といふ。

王融の詩に、玉翠把、泉、珠。【三】

離歌 古詞に、辨、酒、唱、離、歌。

【四】萬行啼 沈佺期の詩に、沾、衣

情。萬行。【一】一舸、舟也。鴟夷、既に船を佐けて、吳を誦ほし、復、西施を得て、之と與に去り、舟に乗じて海に浮び、姓名

を變じて、自ら鴟夷子皮といふ。杜牧之の詩に、西子下、結髮、一舸逐、鴟夷。【二】儂、我と同じ、韓退之の詩に、鯢魚大、子船、牙

服、飾、殺、儂、とある。【三】舊姓、西、一本に、舊住、西に作る。呂氏童蒙訓に、東坡詩を載せて、應記儂家舊姓西とある。舊住西は、

傳寫の誤であらう。舊字記に、西施、施、其姓也、所居在、西、故有、東家施、西家施。

【題義】説文に遠曰、離近曰、別と見ゆ。丈夫非、無、無、涙、不、灑、離、別、間、醉、中、快、を、分、ち、て、行、く、人、が、居

る人に別を告げる。送別の詩に次韻して留別の詩を作つたのである。紀昀いふ、語有、三、情、韻、と。

【詩意】祖道の宴が開かれ、蠟燭の赤い光も、燒き散らして、盃も飛び交はす。離歌唱へ徹して、萬

行の啼は、衣を沾す。張文潛の詩に、亭亭畫舸繫、春潭、只待、行人、酒、半、酣、不、管、烟、波、與、風、雨、載、將、離

古今體詩 贈別 次韻代留別

七〇七

恨過江南とあるが、他年、一柯駒夷子皮（范蠡をいふ）を逐うて去らば、應に我家は、舊と西を姓とせるを記憶すべきである。西施も我家も均しく西を姓とする。何ぞ其の新舊を問はうぞ。

月兔茶

月兔茶

環非環玦非玦

環とするも環にあらず玦とするも玦にあらず

中有迷離玉兔兒

中に迷離玉兔兒あり。

一似佳人裙上月

一に佳人裙上の月に似たり、

月圓還缺缺還圓

月は圓にして還缺けて缺けて還圓なり。

此月一缺圓何年

此の月一たび缺ければ圓なるは何れ

君不見鬪茶公子

君見ずや鬪茶公子小圓を鬪はすに忍

不忍鬪小圓

びず、の年ぞ、

上有雙銜綬帶雙

上に雙銜綬帶の雙飛鸞あり。

飛鸞

を比べて勝負をするをいふ。歐陽修に鬪茶歌あり。【七】雙銜綬帶 唐制によると、圖書に、雙銜綬帶・雁銜威儀の別あり。唐書、車服志に、賜節度使雙銜綬帶、謂其有成儀也。又、抱撲の制、三品以上以雙銜瑞草、雁銜綬帶。茶譜に、宣州宣城縣有。

茶山、東曰、鬪茶、其茶最勝、形如小方餅、橫鋪、若芽其上、太守薦之京師、題曰鬪茶。杜牧之の詩に、山實東吳地、茶稱瑞草魁。

【題義】月兔茶は、涪州より産する所のもの、月中の兔（傅咸の文に、月中何有、白兔搗藥とある。）から起つた名であるから、此詩も着想をここに取つたのである。併し、紀昀は此詩を評して、東坡乃有、此惡札と言つて居る。

【詩意】月兔茶の状を言ふと、環と見るも、環ではない。玦とするも玦でもない。中に玉兔の模糊たるがある。それは全く佳人が裙（裳の裾）の上の月に似て居る。月は圓かにして、また缺けて、缺けては、また圓である。此月が一たび缺けると、圓かなるは何れの年ぞ。君見ずや鬪茶を好む公子達の小圓を鬪はすに忍びないことを。それは茶の上に雙銜綬帶の雙飛鸞の形があるからである。

薄命佳人

薄命佳人

雙頰凝酥髮抹漆

雙頰は凝酥髮は漆を抹す、

眼光入簾珠的皦

眼光簾に入つて珠的皦。

故將白練作仙衣

故白練を將て仙衣を作らんとす、

不許紅膏汗天質

許さず紅膏の天質を汗すを。

吳音嬌軟帶兒癡

吳音嬌軟兒癡を帯ぶ、

古今體詩 月兔茶 薄命佳人

七〇九

【字解】【一】薄命 列子の力命篇に、北宮子、厚於德、薄於命、汝厚於命、薄於德。王昌齡の詩に、薄命命久尋思、夢見君王一覺後。白樂天が慶園妾の詩に、顔色如花命如葉、命如葉薄、將奈何。【二】凝酥、こり固まつた酥酪（乳製の食品）。白樂天の詩に、圓圓一箇冷、作。

無限閒愁總未知。無限の閒愁總て未だ知らず。

自古佳人多命薄。古より佳人は多く命薄し、

閉門春盡楊花落。門を閉ち春盡き楊花落つ。

【詩意】兩頰(面旁)は、凝り固つた乳酪のやうに、色が白くて麗はしい。又、髪の毛は、漆を塗つたやうで光澤がある。そして眼のはつきりとして塵を射るは、珠の的の如くである。もと白練で仙衣を作らうとする。紅膏を粉飾して天然の素質を汚すことを許さない。吳音は、なまめきて柔かに、そして兒癩を帯びて居る。それで無限の閒愁も、總て知らないで居る。昔から、佳人と言はれるものは、多く薄命である。門を閉ちて、外に出でない間に、春は盡きて、楊の花も落ちてしまふ。(王文治いふ、詠ニ尼童一確極と。)

【題義】宋の周輝が著した清波雜志に、輝在建業、於老尼處、得東坡元祐間綾帕子上所書薄命佳人詩、尼時年八十餘矣とある。佳人薄命といふのが此詩の骨子である。紀昀いふ、題鄙甚、詩却不失古格と。

【詩意】兩頰(面旁)は、凝り固つた乳酪のやうに、色が白くて麗はしい。又、髪の毛は、漆を塗つたやうで光澤がある。そして眼のはつきりとして塵を射るは、珠の的の如くである。もと白練で仙衣を作らうとする。紅膏を粉飾して天然の素質を汚すことを許さない。吳音は、なまめきて柔かに、そして兒癩を帯びて居る。それで無限の閒愁も、總て知らないで居る。昔から、佳人と言はれるものは、多く薄命である。門を閉ちて、外に出でない間に、春は盡きて、楊の花も落ちてしまふ。(王文治いふ、詠ニ尼童一確極と。)

吉祥寺花將落而述古不至

今歲東風巧剪裁

含情只待使君來

對花無信花應恨

直恐明年便不開

【題義】此詩は、熙寧六年三月の作である。東坡が杭州に居つた時、陳襄(字は述古、學者、古靈先生と稱す)と共に吉祥寺の牡丹を賞しようとして約した。花が將に落ちようとするのに、述古は來ないから、此詩を爲つて之に寄せたのである。

【詩意】今歲は春風が巧に花を剪り裁ちて、殊に美しい。情を含んで誰をか待たうとする。ただ使君(刺史をいふ)即ち陳述古君の來車を待つて居るのみ。然るに、人が花に對して信なくば、花はまさに人を恨むであらう。直に恐れるのは、明年には、花も慍んで開かないことである。

述古聞之明日即至坐上復用前韻同賦

仙衣不用剪刀裁

仙衣用ぬす剪刀の裁することを、

古今體詩 吉祥寺花將落而述古不至 述古聞之明日即至坐上復用前韻同賦

【字解】(一) 吉祥寺花 吉祥寺の牡丹をいふ。(二) 剪裁 花の美しきにいふ、實知章が柳の詩に、不知細葉誰裁出、二月春風似剪刀。徐凝の詩に、珠蕊瓊花開二剪裁。(三) 含情 王粲が詩に、含情欲待誰。

【字解】(一) 吉祥寺花 吉祥寺の牡丹をいふ。(二) 剪裁 花の美しきにいふ、實知章が柳の詩に、不知細葉誰裁出、二月春風似剪刀。徐凝の詩に、珠蕊瓊花開二剪裁。(三) 含情 王粲が詩に、含情欲待誰。

國色初酣卯酒來。國色初めて卯酒を酣にして來る。

太守問花花有語。太守花に問ふに花語あり。

爲君零落爲君開。君が爲に零落し君が爲に開くと。

高麗の詩に、仙人衣裳素二刀尺。宋之問の詩に、今年春色好、應被二刀尺。【一】國色。牡丹の異名。唐の玄宗、内殿に牡丹を賞し、亦顧る詩を好み、後修己に問つて曰く、今の京邑の詩、誰か首出となす。修己曰く、李正封が詩に、天香夜染衣、國色初酣酒。又、王建が詩に、國色朝酣酒、天香夜染衣。【二】卯酒。朝飲む酒。白居易の詩に、心頭卯酒未消時。大異外傳に、上召太真妃子、妃子時卯醉未醒。【三】零落。草木の枯れ凋む。楚辭に、惟草木之零落兮。

【題義】述古は東坡の寄せた詩を見て、明日至る。東坡は復、前詩の韻を用ゐて、賦したのが此詩である。

【詩意】牡丹は仙花である。仙人の衣は、無縫の衣であるから、剪刀などで裁つことはいらぬ。又、牡丹の色は、恰も朝酒を飲んで酣なる時のやうである。(二句は牡丹を形容す) 太守が花に問ふと、花は君が爲めに零落(草の枯れるを零といひ、木の枯れるを落といふ)し、又、君が爲めに開くと語つた。(東坡は時に太守であつた。)

李鈴轄坐上分題戴花 李鈴轄の坐上戴花を分題す

二八佳人細馬歌 二八の佳人細馬歌す、
十千美酒渭城歌 十千の美酒渭城の歌。

【字解】【一】李鈴轄。鈴轄は職名で、宋史職官志に、總管、鈴轄司、掌軍旅、屯戍、警防、守禦之政令、或一

簾前柳絮驚春晚 簾前の柳絮春晚に驚き、

頭上花枝奈老何 頭上の花枝老を奈何せん。

露溼醉巾香掩冉 露は醉巾を溼して香掩冉、

月明歸路影婆娑 月は歸路に明かにして影婆娑。

綠珠吹笛何時見 綠珠の吹笛何れの時か見ん、

欲把斜紅插皂羅 斜紅を把つて皂羅に插まんと欲す。

州一路、有、兼二路三路者。【一】分題。滄浪詩話に、古人分題、或各賦一物、如云、送某人分題得某物也、或曰探題。【二】二八佳人。十六人の美人をいふ、宋玉の招魂に、二八侍宿、二八齊容など見ゆ。十六人の女樂をして侍宿せしめること、十六人の美女一齊に起ちて容を盡へることである。【三】細馬。李太白對酒歌に、葡萄酒金叵羅(酒壺)、吳姬十五細馬歌。賦は馬走るをいふ。唐六典に、凡馬有左右監、以別其粗良、細馬之監稱左、粗馬之監稱右、細馬謂馬之良者。【四】十千美酒。曹植の詩に、歸來宴平樂、美酒斗十千。【五】渭城歌。王維の詩に、渭城朝雨裊輕塵、客舍青青柳色新。【六】柳絮。前にも出づ。晉書、王凝之妻謝道韞の傳に、謝安嘗內集、俄而雪驟下、安曰、何所似也、安兄子朗曰、撒鹽空中、差可擬、道韞曰、未若柳絮因風起。【七】香掩冉。鮑照の樂府に、須臾掩冉零落銷。掩冉は、風が物を吹き散らす貌。【八】綠珠。晉書に、石崇の妓綠珠は香く笛を吹く。【九】斜紅。梁、簡文帝の詩に、分妝開淺暈、猶餘傳斜紅。【一〇】插皂羅。宋史の輿服志に、簪花謂之簪戴、大羅花以紅黃銀紅三色、樂枝以雜色、羅大羅花以紅銀紅二色、又重戴、唐士人多尙之、蓋古大戴帽之遺制、以皂羅爲之。

【題義】李鈴轄が詩會の席上で、題を探り分ち取つて出來たのが、此詩である。紀昀いふ、氣味頗似玉溪一と。玉溪は唐の李商隱(字は義山)をいふ。商隱の詩は怪詭を以て一格をなし、西峴體と稱する。

【詩意】年の若い佳人が良い馬に騎つて走る。美酒十千、渭城の朝雨、輕塵を養し、客舎青杏として柳色新なりで、簾前に柳の絮（柳の實が熟して、亂れ飛ぶ）の散るのを見ては、春の晩るるに驚いた。頭上の花枝、插さうとするも、老を奈何せん。露は醉巾を濕して香も銷え失せる。月は明に歸路を照らして影が婆娑として舞ふ。（婆娑は舞ふ貌）かの綠珠の吹く笛を何れの時にか見るであらう。斜紅を以て皂羅帽に插さまうとする。

於潛令刁同年野翁亭

山翁不出山。

溪翁長在溪。

不如野翁來往溪

山間。

上友麋鹿下鸞鷲。

問翁何所樂。

三年不去煩推擠。

翁言此間亦有樂。

山翁は山を出でず、
溪翁は長に溪に在り。

如かず野翁の溪山の間に來往せん

には、

【字解】【一】於潛 杭州七縣の

一、一統志に、浙江杭州府於潛縣、

在府城西一百七十里。【二】刁同

年 刁瑞字は景沔、熙寧中、於潛の

令となる。後、蘇軾と共に浮溪の上

に朝らる。同年とは、同じ年に、進

士の試験に及第したもの。（蘇軾補に

俱捷、謂之同年）或はいふ、刁約、

字は景純と。非なり。刁約は令とは

ならないし、年紀も及第も俱に東坡

の先輩である。刁約は、宋、仁宗の

非絲非竹非蛾眉。
山人醉後鐵冠落。
溪女笑時銀櫛低。
我來觀政問風謠。
皆云吠犬足生鱗。
但恐此翁一旦捨

絲にあらず竹にあらず蛾眉にあらず。
山人醉後に鐵冠落ち、
溪女笑ふ時銀櫛低る。
我來つて政を觀て風謠を問ふ、
皆いふ吠犬足を鱗を生ず。
但恐る此の翁一旦此を捨て去らば、

長使山人索寞溪

女啼。

長く山人をして索寞たらしめ溪女をし

て啼かしめんことを。

て曰く、劉侯提不置、謝令推不去。【七】非絲非竹云云 左太神の詩に、何必絲與竹、山水有清音。【八】蛾眉 蛾は蠶、眉の細く長く曲れる蠶の如き意。詩の蠶風、顧人驚に、櫛首蛾眉。李白の詩に、美人捲朱簾、獨坐翠蛾眉。【九】鐵冠 天目山の唐道士常に鐵冠を冠す。一統志に、杭州府天目山、在臨安縣西五十里。元和志に、天目有兩峰、峰頂各一池、左右相對。【一〇】銀櫛 於潛の婦女、皆大銀櫛を挿む、長さ尺許、之を蓬香といふ。【一一】問風謠 觀政のこと、書經に見ゆ。後漢書、羊續が傳に、探問風謠。同じく、李邵が傳に、和帝即位、分遣使者、皆微服單行、各至州縣、觀探風謠。【一二】足生鱗 鱗は長さ毛、後漢の岑彭傳に、岑彭爲魏郡太守、與人歌之曰、我有三足鱗、岑君過之、吠犬不驚、足下生鱗、含哺鼓腹、焉知凶災。云云。【一三】索寞 ものまびしい貌。寂寞。蕭索皆同じ。蘇軾の詩に、臺上詩懷尤索寞。方岳の詩に、太陽無光天索寞。

文心雕龍に、崇英子氣。

【題義】此詩は、熙寧六年三月、(東坡の三十八歳の時)部を行き、於潛縣で刁璠の野翁亭に題したものである。紀昀いふ、野氣太重、似三晚唐人七古下調と。

【詩意】山翁は常に山中に住んで外へは出ない。溪翁は長く溪に在つて他を知らない。(共に偏つて居る)野翁は然らず、溪にも下り、山にも上る。毎に溪山の間に来往して上は麋鹿の遊ぶを見て之を友とし、下は溪上鳧鷖の悠游たるを樂しむ。溪と山との遊びを并せ爲すによつて野翁亭と名けたのである。(亭に名くる義を敍す)野翁亭の主人(刁氏を指す)に問ふ、何の樂しむ所ぞ。三年も去らない。人が推擠して煩はしくすすめても、決して外に徙らない。(此に住居せらる)翁いふ、此の溪山の間(山に上り、溪に下つて來往し遊ぶ處)亦、自ら樂がある。それは、絲(琴・瑟の類)でもなく、竹(簫・笛の類)でもなく、蛾眉(美婦人をいふ)でもない。即ち管絃美色の樂にあらずして、山水の間に、一種の眞樂がある。山に上れば、山人酒を酌んで、酔後には、頭上の鐵冠を落しても、容を理めないで、放逸して樂む。溪に下れば、溪の女は、笑語して頭に挿む銀櫛を低れて、相和樂するを見る。(これを樂んで三年までも去らないといふ意)我(東坡)於潛に來つて、其地政治の善惡を觀察する。其地風俗の厚薄を吟味する。(謠ふ所の詞を以て民の喜樂と憂患とを辨へ、令尹の治を察する。)於潛の人民は皆いふ、今の令を迎へてから、縣中は治平で、盜賊の戒もない。故に里の犬なども驚き咎めて走ることがないから、足に驚を生じたのであると。刁氏が於潛を治めることは實に和平である。

但、恐らくは、此人一旦此縣を捨て去りはしまいかと。若し然うなると、山人や溪女をして恃む所を失つて索寞として愁ひ啼かしめることになる。

於潛女

於潛の女

青裙縞袂於潛女

青裙縞袂於潛の女

兩足如霜不穿屨

兩足は霜の如くにして屨を穿かず。

簪沙鬢髮絲穿杼

簪沙たる鬢髮絲杼を穿つ、

蓬沓障前走風雨

蓬沓前を障つて風雨に走る。

老滌宮粧傳父祖

老滌宮粧父祖を傳ふ、

至今遺民悲故主

今に至るまで遺民故主を悲しむ。

苕溪楊柳初飛絮

苕溪の楊柳初めて絮を飛ばし、

照溪畫眉渡谿去

溪を照す畫眉谿を渡つて去る。

逢郎樵歸相媚嫵

郎樵の歸るに逢うて相媚嫵す、

不信姬姜有齊魯

信せず姬姜の齊魯を有つを。

【字解】一、於潛、杭州七縣の一であることは、前に述べた。縣の西に碧山あり、因て名く。潛、習字は水なし、雨に至つて水を加ふ。武德七年、潛州を置き、八年、廢して縣となす。二、兩足如霜、李太白の越女詞に、疑(草履)上足如霜、不著鴉頭履。同じく李太白の詩に、一雙金齒履、兩足白如霜。

三、簪沙、韓偓之の月娘の詩に、赤鳥司南方、尾秃翅簪沙。簪は註に角上裝也と見ゆ。四、絲穿杼、杼は當に杼に作るべし。説文に、杼持之者、絲穿杼、言髮如絲之穿杼也。五、蓬沓、東坡の自註に、於潛女、挿大銀櫛尺許、謂之蓬沓。

【六】走風雨、杜子美の詩に、稚子無憂走風雨。【七】老滌、吳王濞をいふ、こゝは吳越王錢氏を指す。杜牧之の詩に、老滌即

山傳、後庭千娘用。【一】傳父祖。晉書、陸機傳に、我父祖名播四方、事不知耶。杜子美詩、塞上得三阮生、遺繼先父祖。【二】召溪。名勝志に、召溪、源出天目山、東流臨於潛界。【三】畫眉。眉を削り、嫩黛を以て假眉を畫く。漢書、張敖傳に、爲畫眉。畫くことの巧拙によつて、顔容を改め、妍媸をなす、柳眉、蛾眉、遠山眉などの目がある。【四】細柳。細し柳と同じ、天好問の詩に、妍花紅粉妝、意態工細態。舊唐書に、太宗大笑曰、人言觀畫勢動曉、我但覺其態細耳。【五】姪女。齊女、姜姓、魯女、姬姓。

【題義】於潛縣の女を賦したのである。紀昀いふ、老溲の二句、横五中間、殊無頭緒一と。

【詩意】於潛縣の女の身形をいふと、青い裾(下裳)に、白い袂(袖は白絹)を着けて居る。兩足は霜のやうであつて、履を穿かない。突張つた鬢髪は、恰も絲が杆(横絲を通はす具)を穿つがやうである。於潛の女は、蓬杏とて大銀櫛の尺許なるを前に挿んで風雨に走る。吳越王錢氏の宮女は、父祖から宮仕して居る。今日に至るまで、遺民は故主君を悲しんで居る。若溪の楊柳は、初て架を飛ばし、溪を照らす畫眉の美人は溪を渡つて去る。郎權(郎は年少き男子の稱)の歸るにあつて、相媚態(なまめきたる姿)をして、人に媚びしたがふ)する。此狀を觀ると、姬姓の魯女、姜姓の齊女だけが、魯や齊を有つとも信せられない。

自昌化雙谿館下步尋谿源至治平寺二首

昌化雙谿館の下より歩いて谿源を尋ねて治平寺に至る 二首

亂山滴翠衣裘重

亂山翠を滴らして衣裘重し、

【字解】一昌化 雙谿館、

雙湖響空窗戶搖

雙湖響空しく窗戶搖く。

飽食不嫌溪筍瘦

飽食嫌はず溪筍の瘦するを、

穿林閒覓野芎苗

林を穿ちて閒に覓む野芎の苗。

却愁縣令知游寺

却て愁ふ縣令の寺に遊ぶを知るを、

尙喜漁人爭渡橋

尙ほ喜ぶ漁人の争うて橋を渡るを。

正似醴泉山下路

正に似たり醴泉山下の路、

桑枝刺眼麥齊腰

桑枝は眼を刺し麥は腰に齊し。

名、橋嶺が四川通志に、醴泉山在眉州治西八里、環繞州城、山中有八角清、甘如醴、故名。【六】刺眼、杜子美の詩に、石角鉤衣破、藤枝刺眼新。

經に、雙谿館在昌化縣治前(縣前一百一十步)。太平寰宇記に、昌化縣在杭州西二百四十里。【三】亂山、杜荀鶴の詩に、遊人不見可、春入亂山青。【四】滴翠、衣裘重、杜牧之の詩に、水聲侵笑語、嵐翠撲衣裳。王維の詩に、山路元無語、空翠濕人衣。【五】野芎、香草、一に川芎ともいふは、四川省の産を佳とするからである。【六】醴泉、山の

【題義】此詩は熙寧六年三月の作、東坡が昌化縣に至り、雙谿館の下から歩いて、溪の源を尋ね、治平寺に至つた時のことを寫したのである。昌化縣の前で谿が南北に分れて流る。熙寧の間、縣令陸元長は、其の北流に臨んで亭を爲つたが、東坡は亭上に遊び、詩を題し事を記した。雙湖響空の語がある。

【詩意】春は亂山に入つて青く、翠が滴りて、行人の衣裘も重くなつたやうに感せられる。谿水は南北に分れて流れて居るが、谿の源を尋ねて遂に治平寺に至つた。溪水の響も空しくなつて、寺の窗戶

が搖いた。溪筍の瘦せたのをも嫌はずに十分に食べた。林を穿つて間に野苧(をんななづら)の苗を
覓めた。却て縣令が我等の寺に遊ぶを知つたことを迷惑に思ふのである。併し、尙ほ漁人が争うて橋
を渡るのを喜ばしく思ふ。(紀昀いふ、苗字如何對瘦字、六句、用莊子争席意。莊子に、其反也、
舍者與之争席矣と見ゆ。)山寺に到るの途はかの眉州に在る醴泉山下の路に似て居る。(東坡が程六表
弟の蜀に歸るを送る時に、醴泉寺古垂橘柚の句あり。)即ち桑の枝は眼を刺し、麥の高さは腰に齊し
い。

毎見田園輒自招、
倦飛不擬控扶搖、
共疑楊惲非鋤豆、
誰信劉章解立苗、
老去尙貪彭澤米、
夢歸時到錦江橋、
宦游莫作無家客、
舉族長懸似細腰。

田園を見る毎に輒ち自ら招く、
飛ぶに倦んで擬せず扶搖に控するを。
共に疑ふ楊惲豆を鋤くにあらずと、
誰か劉章苗を立つを解するを信せん。
老い去つて尙ほ彭澤の米を貪り、
夢に歸りて時に到る錦江橋。
宦游して家なきの客となる莫れ、
舉族長く懸りて細腰に似たり。

【字解】(一)倦飛、陶淵明の
歸去來の辭に、鳥倦飛而知還。
(二)控扶搖、控は、投げること、
莊子の逍遙遊に、控於地而已。扶
搖は、同じく逍遙遊に、搏扶搖而
上者九萬里。扶搖を約めると、音同
となる。鶴は颶風の颶。二聲を合せ
て一番としたもの。爾雅に、扶搖謂
之颶風。(三)楊惲、字は子幼、漢、
宣帝の時、中郎將となる。殿中に居
り、康濯で、私がなかつたが、性、剛

善であつたため、怨を招き、免ぜられて庶人となる。家居産業を治め、室宅を起し、財を以て自ら娛む。友人孫會宗、書を以て之を
戒しむ。答へて曰く烹羊無焦、斗酒自勞ふ。酒後、耳熱し、天を仰ぎ笛を拊つて烏烏と呼ぶ、人生行樂のみ、富貴を領つ何れの時ぞ
と。(四)劉章解立苗、史記、齊悼惠世家に、朱虛侯劉章益劉氏不得職、常入侍高后、燕飲、進曰、請爲太后言耕田歌、高
后曰、若生而爲王子、安知田乎、章曰、深耕溉種立苗、秋、種非其種者、鋤而去之、呂后嘿然。(五)食彭澤米、晉書、陶
潛傳に、爲彭澤令、在縣、公田悉令吏種秫、(六)長懸似細腰、韓退之の詩に、細腰不自乳、舉族長孤懸。
錦江橋、今、成都の大慈寺前に在る。過ぐる所の石橋が是である。(七)長懸似細腰、韓退之の詩に、細腰不自乳、舉族長孤懸。
【詩意】今、余は田園を見る毎に、輒ち自ら招いてここに居らうとする。鳥は飛ぶに倦んで、颶風に
投じようともしない。昔、楊惲は官を免せられて、田園生活に入り、人生は行樂のみと謂つたさうだ
が、實際彼は豆を鋤いたとも思はれない。又、朱虛侯劉章は、劉氏の一族が職を得ないのを忿つて、
燕飲の時に、太后の爲に、耕田歌を言ひ、深耕溉種立苗、其の種でないものは、鋤いて之を去らん
とすると説いた。すると、呂后は默然として居つたさうである。併し、誰も劉章が苗を立てることを
解したとも信しない。老い去つて尙ほ彭澤の米を貪つて、退隱が出来ないのは愧かしい。夢に故山に
歸つて、時に錦江橋に到つた。ああ人生宦遊して、家なきの客となること勿れ。家族が生活難に陥い
つて、細腰となるであらう。

於潛僧綠筠軒
可使食無肉

於潛の僧綠筠軒
食をして肉なからしむべくとも、

不可使居無竹。

居をして竹なからしむべからず。

無肉令人瘦。無竹令人俗。

肉なくんば人をして瘦せしむ、竹なくんば人をして俗なし。

人瘦尚可肥。俗士不可醫。

人の瘦せたるは尚ほ肥えつべし、俗士をば醫すべからず。

旁人笑此言。似高還似癡。

旁人此の言を笑ふ、高きに似て還つて癡なるに似たりと。

若對此君仍大嚼。

若し此君に對して仍つて大に嚼ちせば、

世間那有揚州鶴。

世間那ぞ揚州の鶴あらんや。

【字解】

【字解】「」於潛僧。杭州府に、於潛縣があること前に出づ。僧、名は致、字は惠覺、參寥子集に見ゆ。或はいふ、僧は疑らくは道潛を指すならんと。參寥子集は、宋の釋道潛の撰する所、道潛は性質が福であつたため、合ふこと寡かつたさうである。一統志に、道潛、於潛人、通内外典、能文章、尤喜爲詩、蘇軾守杭日、卜智果精舍居之云云と見ゆ。【二】綠筠軒。臨安志に、寂照寺在於潛縣南二里、寺舊有綠筠軒。後、宋、理宗の寶慶の初に、御名を避けて、此君軒と易ふ。坡詩王微之の語を用ゐたのである。【三】不可使居無竹。一本に不可居無竹に作る。【四】仍大嚼。魏の曹植（字は子建）吳質（字は季重）に與ふる書に、過屠門、而大嚼、雖不得肉、貴且快意。子建が書の意は、屠者の門を過ぎ、肉を見て大に嚼すれば、たとひ其の肉を得て食はないでも快といふに在る。東坡は大嚼の二字を使用したまでで、而も肉を食ふ意に用ゐた。書の意とは異なる。字を用ゐて意を用ゐなかつたのである。【五】揚州鶴。殷芸小説に、有客相從、各言所志、或願爲揚州刺史、或願多貲財、或願騎鶴上揚州、其一人曰、願爲揚州刺史、騎鶴上揚州、蓋欲兼三人之所欲也。九江郡・丹揚郡・廬江郡・會稽郡等の處、皆揚州の地。刺史は太守、漢には太守といひ、唐には刺史といふ。

【題義】

此詩も熙寧六年三月の作、寂照寺に遊んで、寺僧惠覺の爲に綠筠軒に題し、并に於潛女の詩

も作つたのである。紀昀いふ、與二月兔茶詩相埒と。

【詩意】食と居とは、誰でも重んずる所のものである。食には、縱令肉を備へることがなくとも、居處には種竹がなくては叶はない。（昔、晉の王徽之（字は子猷）は嘗て居を空宅（室屋樹木もないあれ屋敷）の中に寄せて、便ち竹を種えしめた。或人が其の譯を問ふと、徽之は、但嘯詠して、何ぞ一日も此君なかるべけんやと言つたさうである。此君は竹を指す。此語よりして此君の二字を竹の異名とする。東坡も子猷が語を用ゐたのである。）食膳に肉がなければ、只、人の肌膚を瘦せさせるまでだが、居處に竹を栽ゑることがないと、人の心をして凡俗ならしめる。人の瘦せたのは、尚ほ肥えるやうにも出来ようが、只、凡俗の輩は、逆も醫治を施して、變じ易へやうはない。（陰に附ける薬がない意。東坡が此詩は、詩僧の居所を言ふ作であるから、肉は食はなくても、竹は種ゑなくては叶はない云云と言つたのであらう。）傍人は此の言を笑つて、（此言は上の六句を指す）言は高尚なるに似て、還つて愚癡である。謂れもない出家の僧となつて、肉竹の論などをしようよりは、世間に居て、肉をも食ひ、又、竹をも栽ゑて樂んだならば、二つとも併せて好かるべきにと、僧を嘲つて笑ふ。（此の以下の二句は嘲りを解く辭である。）傍人の嘲りも、一理はあらうが、凡そ世の中の事、同時に二つは好まれない。それで比較して勝れた方を擇んで取るがよい。若し竹に對して、又、肉を大嚼するやうに好いことばかりあつたら、世間に何ぞ揚州の鶴のやうな願があらうぞ。（畢竟、願の滿ち難い世であるによつて、肉を食ふことを捨てて、竹を栽ゑて樂むのであると、或人のなした嘲りを解き、兼ねて此の

詩の旨意を結んだのである。

與臨安令宗人同年劇飲 臨安の令宗人同年と劇飲す

我雖不解飲。把盞歡意足。

我飲を解せずと雖も、盞を把れば歡意足る。

【字解】(一) 臨安令、蘇舜舉をいふ。時に臨安の令たり。(二) 宗人同年、宗人は同族の人をいふ、禮記に、宗人授事。同年は、同じ年に、進士の試験に及第したものを、國史補に、俱捷謂之同年、捷は及第の意。蘇舜舉は東坡と同姓同年であるをいふ。唐書、許孟容傳に、李絳與孟容弟季、同年進士、爲同年、詩曰、進士明經、歲大抵百人、吏部得官至千人、私謂爲同年、本非親與、海也と見ゆ。(三) 把盞、蘇舜舉の詩に、所思惟把盞。(四) 白髮、感秋人、白樂天に、初見白髮感秋詩がある。(五) 黃雞催曉曲、白樂天の詩に、羅道使君不解歌、聽唱黃雞與白日、黃雞催曉五時鳴、白日催年酉時渡。(六) 敝袍、論語、子罕篇に、衣敝緇袍、緇袍は禊衣。袍は衣の著あるもの。(七) 霜葉、霜にて赤くなつた葉。白樂天の詩に、醉

試呼白髮感秋人。

試みに白髮秋を感ずる人を呼んで、

令唱黃雞催曉曲。

黃雞曉を催はすの曲を唱へしめん。

與君登科如隔晨。

君と科に登りしは晨を隔つるが如し、

敝袍霜葉空殘綠。

敝袍霜葉空しく綠を残す。

如今莫問老與少。

如今老と少とを問ふこと莫れ、

兒子森森如立竹。

兒子は森森として竹を立つるが如し。

黃雞催曉不須愁。

黃雞曉を催すとも愁ふるを須みず、

老盡世人非我獨。

世人を老い盡くす我獨のみにあらず。

【題義】此詩も、熙寧六年三月の作である。治平寺に至つて、臨安縣を過ぎたとき、縣令蘇舜舉と劇飲して歸り、此の詩を作つたのである。紀昀いふ、清而淺と。

【詩意】我は酒を飲むことは出来ないが、盞を把れば、何となく歡ばしくてたまらない。試に白髮となつて秋風を感ずる人をして、白樂天が作つた黃雞催曉の曲を唱へしめようか、深感到堪へられな

いであらう。憶昔、君と進士の試験に及第したことも、昨日の如くである。青春空しく過ぎて、今は散れたる綿入を著け、霜葉は紅と雖も、是れ春ならず、處處綠を残すのみである。如今、老と少とを問ふこと莫れ、幸に兒子は森森として生長し、竹を立つたやうである。(子由が詩に、聞道渠家八丈夫、他日歸耕免曲獨とあるは、東坡の此句と同意。)されば黃雞が曉を催すことあるも、少しも愁へるには及ばない。世人を老い盡すのであつて、我獨のみが年よるのではない。

寶山晝睡

寶山の晝睡

七尺頑軀走世塵。

七尺の頑軀世塵に走り、

十圍便腹貯天真。

十圍の便腹天真を貯ふ。

此中空洞渾無物。

此の中空洞渾て物なし、

何止容君數百人。

何ぞ止に君の數百人を容るるのみならずや。

【字解】(一) 寶山、杭州圓經に、寶山在吳山之南。西湖志に、題吳山。西上有寶月山、又東爲淺山、淺山之支爲七寶山。(二) 七尺頑軀、文選、陸士衡の詩に、昔爲七尺軀。(三) 十圍、晉書に、尹隸腰帶十圍。(四) 便腹、肥え太りたる腹。後漢

古今體詩 與臨安令宗人同年劇飲 寶山晝睡

書に、邊韶、字孝先、以文學知名、曾晝日假臥、弟子私嘲之曰、邊孝先腹便便、讀書一但欲眠。【一】天眞、人の本性、琴操に、反其天眞。晉書の阮籍傳に、保天眞。

【題義】此詩も前の詩と同じ時の作、寶山の僧舎に晝寝ね、睡覺め、起つて壁上に題したのである。【詩意】この七尺の頑軀（愚だが丈夫である、己の身を謙していふ。）は世塵に走り、十圍もある便便たる腹中には天眞（天然のままにて飾りのない本性）を貯へて居る。又、此の腹中は空洞にして渾て何物もない。されば包容することは大であつて、何ぞただに君等數百人を容るのみならんや。

【餘論】東坡は自ら此詩の後に題していふ、余在錢塘、一日晝寝於寶山僧舎、起題壁、其後有二數小子、亦題名壁上、見者乃謂予謂之也、周伯仁（周顛字は伯仁）所謂君者、乃王茂宏（王導字は茂弘）之流、豈此輩哉と。周顛字は伯仁、少うして重名あり。神采秀徹、王導（字は茂弘、少うして風鑿あり、識量清遠なり。）深く之を尊重す。嘗て其の腹を指して曰く、此中、何かあると。曰く、此中、空洞にして物なし。以て卿等數百人を容るべしと。東坡の此の詩は此の故事に據る。

僧清順新作垂雲亭

僧清順 新に垂雲亭を作る

江山雖有餘亭榭苦難穩
登臨不得要萬象各偃蹇
惜哉垂雲軒此地得何晚

江山餘ありと雖も、亭榭苦だ穩なり難し。
登臨するも要を得ず、萬象各偃蹇。
惜しいかな垂雲軒、此の地得ること何ぞ晩き。

天功爭向背詩眼巧增損

天功向背を争ひ、詩眼巧に増損す。

路窮朱欄出山破石壁很
海門浸坤軸湖尾抱雲巘
葱蔥城郭麗淡淡烟邨遠
紛紛烏鵲去一一漁樵返

路窮りて朱欄出で、山破れて石壁很ぐ。
海門坤軸を浸し、湖尾雲巘を抱く。
葱蔥城郭麗しく、淡淡烟邨遠し。
紛紛烏鵲去り、一一漁樵返る。

雄觀快新獲微景收昔遁

雄觀新獲を快うし、微景昔遁を收む。

道人眞古人嘯咏慕嵇阮
空齋臥蒲褐芒屨每自捆

道人は眞に古人、嘯咏嵇阮を慕ふ。
空齋蒲褐に臥し、芒屨毎に自ら捆く。

天憐詩人窮乞與供詩本

天は詩人の窮するを憐み、供詩の本を乞與す。

我詩久不作荒澀旋鋤墾
從君覓佳句咀嚼廢朝飯

我が詩は久しく作らず、荒澀旋て鋤墾す。
君に從つて佳句を覓め、咀嚼朝飯を廢す。

【字解】【一】垂雲亭、杭州圓經に、寶殿院、亭館有僧竹軒・垂雲亭、亭乃詩僧清順作。垂雲亭詩にいふ、小亭曉絕出雲間、萬象升沈不得聞、莫怪詩翁頭白早、時來向此寫湖山。【二】亭榭、亭は臺、榭は屋宇ある臺。宋史に、久在洛、因卜居、有二亭、榭竹樹之勝、優游自得。【三】偃蹇、左傳の哀公六年に、彼皆偃蹇。註にいふ、偃蹇と。微後にして隨はない貌である。楚辭、離騷の註には、高貌とある。【四】天功、書經の舜典に、欽哉惟時、亮天功。【五】詩眼、范成大の詩に、道眼已空詩眼在、梅花秋動

駕言徂北山。得與幽人兼。
清風洗昏翳。晚景分穠纖。
縹緲朱樓人。斜陽半疎簾。
臨風一揮手。悵焉起遐瞻。
世人驚朝市。獨向溪山廉。
此樂得有命。輕薄神所殲。

駕して言に北山に徂き、幽人と兼ぬるを得。
清風昏翳を洗ひ、晚景穠纖を分つ。
縹緲朱樓の人、斜陽半は疎簾。
風に臨んで一たび手を揮ふ、悵焉として遐瞻を起す。
世人は朝市に驚せ、獨溪山に向つて廉。
此の樂み命あるを得、輕薄は神の殲す所。

【字解】【一】北山 西湖志に、自莫雲山、葛嶺、棲霞嶺一帶、統謂之北山、以其在西湖之北也。【二】三吳 水經に、吳興・吳郡・會稽を以て三吳となす。或は指掌圖に據つて、蘇州・常州・湖州を三吳とするもあり、通典を引いて、會稽・吳興・丹陽分つて三吳と爲す。何れでも宜しい。【三】尋僧去 杜牧之の詩に、石路尋僧去、此生應不違。【四】激激 水が溢れる貌。楊雲が詩に、春江激激清且急。【五】昏翳 曇りて暗い、昏翳といふに同じ。陳子昂の詩に、昏翳無晝夜。【六】穠纖 穠は草木の稠く多い貌。纖は穀類の薄く細い貌。曹植の洛神賦に、纖纖得中。【七】縹緲 遠くかすかに見えぬ貌。李白の天門山詩に、參差遠天際、縹緲晴霞外。【八】朱樓 後漢書、馮衍傳に、伏朱樓而四望兮。【九】悵焉 悵悵の意。楚辭、九辯に、惆悵兮而私自憐。李太白の詩に、停梭悵悵憶遺人。【一〇】遐瞻 遐眺などと同じく、遠くを見渡す意。

【題義】此詩は、熙寧六年五月十日に、呂穆仲(即ち仲甫)・周邠・惠勤・惠思・清順・可久・惟肅・義詮(孤山僧志に、詮を柏堂に作る)等と同じく西湖に泛んで、北山に遊んだ時の作である。湖山を寫して畫のやうである。紀昀いふ、四句用義山水齋語と。

【詩意】三吳の地、雨が連月降りつづいて、湖水の水量が日夜に増した。僧を尋ねて行かんとするも、路がない。激激として水が溢れて簾を打つ。龍に駕して北山に行き、幽人(世を避けて隠れ居る人)と之を兼ねることが出来た。清風が昏翳(暗くおほふこと)を洗ひ、晚景が稠き處と細かい處とを、はつきり見はして居る。遙に見る朱樓の人、夕陽は半ば疎簾を照らして居る。風に臨んで一たび手を揮ふと、悵然として望恨の心が生じ、遠くを見渡したいといふ氣が起つて来る。世の人は人の稠き朝や市に驚せ集つて、かかる溪山に向つては至つて淡泊である。幸に山水の此樂みを得たのは、眞に天命である。従つて輕薄は神の殲す所であることを念はなくてはならない。

會客有美堂。周邠長官與數僧同泛湖。往北山湖中。聞堂上歌笑聲。以詩見寄。因和二首。時周有服。

客有美堂に會す、周邠長官、數僧と同じく湖に泛び、北山湖中に往く、堂上の歌笑の聲を聞き、詩を以て寄せらる、因りて和す、二首、時に周に服あり

靄靄君詩似嶺雲。
從來不許醉紅裙。

靄靄として君が詩は嶺雲に似たり、
從來許さず紅裙に醉ふことを。

【字解】【一】有美堂 吳山の嶺に在る。歐陽修の有美堂記に、嘉祐二年、龍圖閣直學士尙書吏部郎中梅

不知野屐穿山翠。知らず野屐の山翠を穿つを、
 惟見輕橈破浪紋。惟見る輕橈の浪紋を破るを。
 頗憶呼盧袁彦道。頗る憶ふ盧を呼ぶ袁彦道、
 難邀罵座灌將軍。邀へ難し坐を罵る灌將軍。
 晚風落日元無主。晚風落日元主なし、
 不惜清涼與子分。清涼を惜まず子と分たん。

公（名は攀）出守於杭、於其行也、天子寵之、以詩、於是始作有美之堂、蓋取賜詩之首章、而名之、云云。賜詩的首章に、地有湖山美、東南第一州の句あり。【一】 蘇軾、雲の集れる貌。陶潛の停雲の詩に、停雲露、時雨濛濛。韓退之の贈張秘書詩に、君詩多態度、露露春空雲。【二】 紅裙、妓女をいふ、杜

甫の詩に、越女紅裙濕、燕姬翠黛愁。【三】 野屐、屐は木屐。宋書に、謝靈運好山水、尋山陟嶺、常著木屐、上山則去其前齒、下則去其後齒。【四】 呼盧、賭博。呼盧は賭博すること。盧は樗蒲の采の目の名、五子、皆黒きもの、最勝の采。袁彦道は、晉の世の博奕に巧な人の名。因て博奕の事をもいふ。尙ほ餘論を見よ。【五】 罵座灌將軍、灌夫が灌賢や程不識を衆辱したことをいふ。餘論を見よ。

【題義】 此詩も、熙寧六年五月の作、客を有美堂に會したが、周邠長官は服喪中で來なかつた。數僧と同じく湖中に泛び、堂上歌笑の聲を聞いて周邠の寄せられた詩は、堂上歌聲想過雲、玉人休整碧紗裙、妝殘粉落脂暈、飲劇杯深琥珀紋、響屐定知高楚客、笑談應好卻秦軍、莫辭上馬玉山倒、已是遲留至夜分。此詩は之に和したのである。

【詩意】 君が詩は露露（雲の集りたなびく貌）として嶺雲に似て居る。從來、紅裙に醉ふことを許さ

ない。山に遊んで、野屐の山翠を穿つことを知らない。ただ水に泛んで、輕い楫の浪紋を破るを見るのみである。かの喪に居るも、服を變じ、賭博をして人の窮を救うた袁彦道のこと憶はれてならない。又、かの灌夫が丞相田蚡の婚禮の賀宴に列し、灌賢や程不識を衆辱したことも穩かではないが、多少氣を吐くに足るのである。かかる人は、今は邀へ難い。天地間には物各主がある。ただ晚風と落日とは、元來主がないから、どうか清涼を惜まないやうに、子と之を分たうと欲するのである。

【餘論】 晉書の袁耽傳に、袁耽、字彦道、陽夏人、少有才氣、爲士類所稱、桓温少時、遊于博徒、資產俱盡、欲求救于耽、而耽在艱、（喪に居るをいふ）遂變服懷布帽。隨温與債主戲、耽素有藝名、債者聞之而不相識、謂之曰、卿當不辨作袁彦道也、遂就局、十萬一擲、直上三百萬、耽投馬絕叫、探布帽擲地曰、竟識袁彦道否。とある。又、漢書の灌夫傳に、灌夫嘗有服、丞相田蚡娶燕王女爲夫人、太后詔列侯宗室、皆往賀、寶嬰過夫、欲與俱、夫謝曰、丞相與夫有隙、嬰強與俱、夫行酒、蚡不能滿觴、夫怒、次至灌賢、方與程不識耳語、夫無所發怒、適罵賢曰、平生毀程不識不直一錢、今日、長者爲壽、適效女曹兒咕囁（咕囁、附耳小語聲。）耳語。蚡謂夫曰、程李、俱東西宮衛尉、今衆辱程將軍、仲孺（灌夫字は仲孺）獨不爲李將軍（李廣）地乎、夫曰、今日斬頭穴胸、何知程李、蚡怒、召長史曰、今日召宗室、有詔、劾灌夫罵、坐不敬とある。袁耽も服喪中、灌夫も服喪中、故に東坡の自註に、皆取其有服也。

載酒無人過子雲。酒を載せて人の子雲に過ぐるなし、
 掩關晝臥客書裙。關を掩うて晝臥せば客裙に晝す。
 歌喉不共聽珠貫。歌喉共に珠貫を聴かず、
 醉面何因作縵紋。醉面何に因つて縵紋を作さん。
 僧侶且陪香火社。僧侶且つ陪す香火の社、
 詩壇欲斂鶴鷺軍。詩壇斂めんと欲す鶴鷺の軍。
 憑君遍遠湖邊寺。君に憑つて遍く遠る湖邊の寺、
 漲綠晴來已十分。漲綠晴れ來つて已に十分。

【字解】「子雲」漢の揚雄、字は子雲、蜀郡成都の人。學を好んで、博く羣書を誦む。嘗て甘泉・河東・校獵、長揚の四賦を表し、又、法言及び太玄等を著す。「掩」關、掩はむほひ閉ぢる。南史、袁粲傳に、席門常掩。「歌喉不共聽」珠貫、禮記、樂記に、歌者上如抗、下如隊（聲と同じ）、樂象乎鐘如貫珠。嚴尚書の子駟馬に與ふる詩に、莫損歌喉一串珠。白樂天の子駟馬に與ふる詩に、何郎小妓歌喉好、嚴

老呼爲一串珠。【縵紋】しほり。李賀の詩に、龜甲屏風解眼縵。【香火】北齊書の陸法和の傳に、有香火因緣。張昺の詩に、星霜長朝寺、香火靜中人。【鶴鷺軍】鶴も鷺も、陣立ての名。左傳、昭公二十一年に、公子城以晉師至、救宋、與華氏戰於緡邱、鄭國順爲鶴、其御順爲鷺。緡邱は宋の地。

【詩意】漢の揚雄は、家が貧しくて、酒ばかり嗜んで居たから、人の其の門に至るものは、稀であつた。たまには好事のものもあつて、酒や肴を載せ、從つて學んだのである。今は酒を載せて尋ね來るものもない。それで關門を閉ぢて晝臥して居ると、思ひ掛けなくも、客がやつて來て下裳に字を書いた。又、昔、羊欣といふ人は、隸書が上手であつた。父不疑が烏程の令となつたとき、欣は年僅に十

二。時に王獻之が吳興の太守であつたが、甚だ之を愛した。欣、嘗て夏月に新しい絹の裙を着けて、晝寢をして居た時、獻之は縣に入り、之を見て、絹に數幅を書して立ち去つたといふことが南史に見えて居る。人も來ないし、來ても逢はない。從つて歌喉貫珠の美聲も、共に聴くことが出来なかつた。これでは醉眼も縵紋をなさない。さて僧侶も香火の社に陪する。有美堂の同人は詩陣を張り、或は鶴の陣立を用ゐるものもあり、鷺の陣立を用ゐるものもある。君の御蔭で遍く遠る湖邊の寺、時は恰も漲綠晴れ來つて已に十分であつた。

席上代人贈別三首 席上人に代りて別を贈る 三首

【字解】「悽音」悽音云云 李百藥の詩に、悽音起離憂。悽音の二字は、共に心に悲しく感じいたむ意。

悽音怨亂不成歌。悽音怨亂して歌を成さず、
 縱使重來奈老何。縱ひ重ねて來らしむるも老を奈何せん
 淚眼無窮似梅雨。淚眼窮りなく梅雨に似たり、
 一番勻了すれば一番多し。

【字解】「梅雨」江浙地方は、四五月、梅黄まんとす。水調ひ、土海ひ、蒸鬱して雨を爲す、之を梅雨といふ。風土記に、夏至前兩名黃梅雨、水調

土海、三月雨曰迎梅、五月雨曰送梅。【一番勻了】一番は一たびの意、揚誠齋の詩に、乍晴風日一番清。陸龜蒙の詩に、幾點

【題義】杜甫の詩に、揮淚各西東とあり、陸龜蒙の詩に、丈夫非無淚、不灑離別間とある。離情は發して離歌となる。此三首は要するに人に代つて離歌を唱へたのである。紀昀は、第一首を評し

て卑俗と言つた。

【詩意】遠きを離といひ、近きを別といふ、離別に臨んでは、悽愴の心が怨亂して離歌も出来ない。縦ひ重ねて来る機会があるとしても、老を奈何せん。涙眼は窮りないこと梅雨の盡くるなきに似て居る。一たび勻了して少くなつたと思ふと、又、一番多く降りしくのである。(勻は解字に、少也从勺从二と見ゆ。)

天上麒麟豈混塵。

天上の麒麟豈塵に混せんや、

籠中翡翠不由身。

籠中の翡翠身に由らず。

那知昨夜香閨裏。

那ぞ知らん昨夜香閨の裏、

更有偷啼暗別人。

更に偷啼暗別の人あらんとは。

に、一種二色、翡翠羽、翠青羽、大如鳥、皆珍禽也。【三】不由身、羅隱の詩に、世間難得不由身。【四】偷啼、陳後主の詩に、大婦怨空閨、中婦夜偷啼。暗涙といふに同じ。【五】暗別、白樂天の詩に、惟有潛離與暗別。

【詩意】天上の麒麟は、下界の塵には混じらない。籠中の珍禽は、得難くして身に由らない。昨夜、香閨の裏に、更に偷啼(人に知れないやうに泣く)して、人知れず別を悲しんで居る人があるとは、誰も氣付かないであらう。(偷啼する所以である。孟浩然が友の京に之くを送る詩に、君登青雲去、予望青山歸、雲山從此別、淚濕薜蘿衣とあるも、同じ心持ちで、會面の期し難いことを悲しむので

【字解】【一】天上麒麟、南史に、徐陵母蘇氏嘗夢、五色雲化為鳳、集左肩、已而誕、年數歲、家人攜以候寶誌、摩其頂曰、天上石麒麟也。【二】籠中翡翠、白樂天の詩に見ゆ。翡翠はカハセミ、格物論

ある。)

蓮子擘開須見臆。

蓮子擘開須らく臆を見るべし、

楸枰著盡更無期。

楸枰著け盡して更に期なし。

破衫却有重逢日。

破衫却て重ねて逢ふ日あり、

一飯何曾忘却時。

一飯何ぞ曾て忘却する時あらんや。

【字解】【一】蓮子云云、蓮の實を約といふ、王延壽の賦に、綠房紫的。荷中の玄荷(稚荷、荷は蓮の葉)を意(はすの實の中の實)といふ。【二】楸枰、碁局をいふ、温庭筠の詩に、開對楸枰一壘。

【詩意】此詩は所謂吳歌の格で、字を借りて意を寓せたのである。蓮の實が咲き開いた。蓮の實は荷、荷中の實は意、須らく臆を見るべきである。(須見臆は荷の意を以ていひ、心の底まで見るべき意である。)碁局をば著け盡して、更に會ふべき時はない。(更無期は碁を以ていひ、行行重行行、與君生別離、相去萬餘里、各在天一涯、道路阻且長、會面安可知的意である。)破衫(破れ衣)は重ねて逢ふ日がある。(重ねて逢ふ處、縫綻の縫を以て之を隠す。)食する毎に飯匙(さじ)は忘れない。一飯何ぞ曾て忘却する時あらんや。(別れても忘れない。忘却時は、匙七の匙を以て之を隠す。)

【餘論】古樂府の子夜歌に、霧露隱芙蓉、見蓮不分明。また、明燈照空局、悠然未見期。また、理絲入殘機、何悟不成匹。讀曲歌に、芙蓉履裏委、蓮子從心起。また、石闕生口中、銜杯不得語、東坡の此詩は、全く此等の詩の意を祖としたのである。宋の葛立方の韻語陽秋に、彙帖(妻が其の夫を稱していふ)今何在、山上復有山、何當大刀頭、破鏡飛上天。古詞又云、鬪碁燒敗襖(襖